茨城県西茨城郡友部町

小原（おばら）遺跡

県営畑地帯総合整備事業（一般型）小原地区（北区）
平成16年度　埋蔵文化財調査報告

2005年

友部町小原遺跡発掘調査会

大成エンジニアリング株式会社

茨城県西茨城郡友部町

小原（おばら）遺跡

県営畑地帯総合整備事業（一般型）小原地区（北区）
平成16年度　埋蔵文化財調査報告

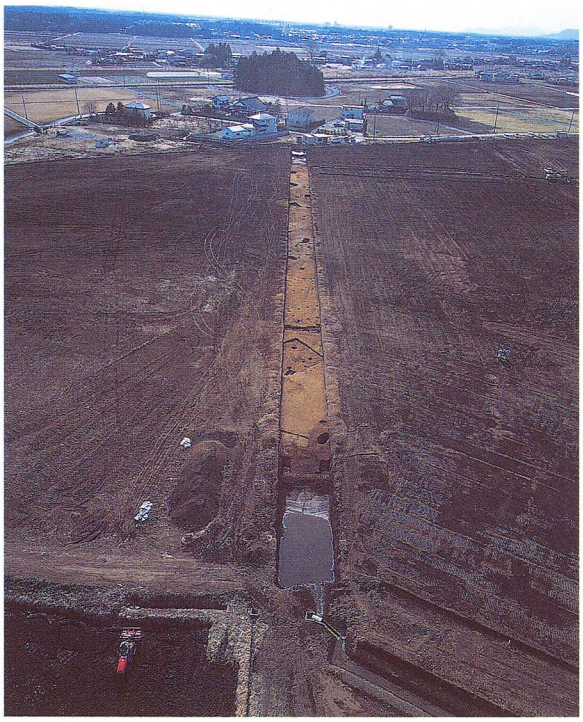
2005年

友部町小原遺跡発掘調査会

大成エンジニアリング株式会社

巻頭図版

調査区全景（南から）



調査区全景（北から）

PG01出土　弥生土器

序　文

友部町は、茨城県のほぼ中央部に位置し、県都である水戸市に隣接、東京から約100kmの距離にあります。北西部に八溝山系が連なり、東南部の涸沼川沿いに東茨城台地と呼ばれる平坦な台地、北西部には友部丘陵と呼ばれる緩やかな丘陵地帯が広がります。現在では町内を高速道路や鉄道が走り、活気にあふれています。また、涸沼川・枝折川・涸沼前川などの水に恵まれ、豊かな可耕地であり、古代より人々が生活しやすい環境であったと思われます。

今回の調査は県営畑地総合整備事業にかかわる発掘調査であります。この調査の結果、弥生・古墳時代の遺跡が確認され、地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書が研究資料としてはもとより、教育・文化振興の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に発掘調査・整理作業・報告書の刊行に際し、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係各機関ならびに各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

友部町教育委員会

教育長　坂倉　弘國

例　言

1．本書は、茨城県西茨城郡友部町大字小原624番地外に所在する小原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本調査は、「県営畑地帯総合整備事業（一般型）小原地内（北区）」の平成17年度事業に伴い、埋蔵文化財の記録保存を目的として実施されたもので、友部町小原遺跡発掘調査会の委託を受け、友部町教育委員会の指導の下、大成エンジニアリング株式会社が実施した。

3．調査は、埋蔵文化財調査部吉田寿を調査担当者とし、小宮山友康が補佐した。

4．調査期間・調査面積は下記の通りである。

　発掘調査　平成17年１月12日～２月10日

　整理期間　平成17年２月11日～３月25日

　調査面積　1,080㎡

5．本書は、服部敬史顧問の統括の下、吉田寿・小宮山友康が執筆し、小野真美・山嵜裕子が編集協力した。また、執筆の文責を文末に記した。

6．本調査に関わる出土品及び図面・写真類の資料は、友部町教育委員会が保管している。

7．発掘調査及び整理作業にあたり次の方々、機関からご教示とご協力を賜った。

池田晃一　寺内寛　能島清光　原信田正夫　茨城県教育庁文化課　㈲阿部建設　㈱茨中　㈱キガ　㈱中央航業

8．発掘調査及び整理作業参加者は下記の通りである。(50順、敬称略)

飯田明　小薗江とき　小薗江なみ　佐藤利男　佐藤八重子　塩畑昭子　塩畑勝利　島田与四郎　鈴木正　鈴木眞知子　中村伊重　吹野常夫

凡　例

1．本遺跡調査の略号はＯＢＲである。出土遺物にも注記してある。

2．本書の挿図・写真の表示は次のとおりである。

（１）平成14年４月１日施行の測量法により、日本測地系が世界測地系に変更されたことから新座標（Ⅸ系）を使用した。原点はX=40460.000 Y=44780.000である。

（２）検出遺物は下記の略号で表した。

SI･･･竪穴住居跡　SB･･･掘立柱建物　SD･･･溝　SK･･･土坑　P･･･小穴（ピット）

SX･･･性格不明遺構

3．実測図は基本的に下記の縮尺とし、スケールを図中に示し、遺物写真は概ね実測図の縮尺に準じた。

遺構実測図　1/60　　竈・炉　1/30　　遺物実測図　1/3

4．遺構実測図中の方位は座標北を示す。

目　次

巻頭図版
序　文
例　言／凡　例
目　次／挿図目次／挿表目次図／図版目次

Ⅰ　調査概要
　1　調査に至る経緯 ……1
　2　地理的位置と歴史的環境 ……1
　3　調査方法と経過 ……5
　4　基本層序 ……6
Ⅱ　検出された遺構と遺物
　1　縄文時代 ……8
　2　弥生時代 ……9
　3　古墳時代 ……18
　4　古代 ……27
　5　その他 ……32
Ⅲ　まとめ
　1　弥生時代 ……34
　2　古墳時代以降古代 ……36

写真図版 ……39
報告書抄録 ……60

挿図目次

第１図　遺跡位置図（1/7500）
第２図　周辺遺跡分布図（1/25000）
第３図　調査地点位置図
第４図　基本層序
第５図　遺構配置図
第６図　SK01実測図
第７図　SK02・3実測図
第８図　SI04実測図・遺物実測図
第９図　SI05実測図・遺物実測図（１）
第10図　SI05遺物実測図（２）
第11図　PG01実測図・遺物実測図
第12図　SD01実測図
第13図　遺構外遺物実測図
第14図　SI01実測図
第15図　SI01遺物実測図（１）
第16図　SI01遺物実測図（２）
第17図　SI02実測図・遺物実測図
第18図　SI06実測図（１）
第19図　SI06実測図（２）・遺物実測図（１）
第20図　SI06遺物実測図（２）
第21図　SI03実測図
第22図　SI03実測図・遺物実測図（１）
第23図　SI03遺物実測図（２）
第24図　SB01実測図・遺物実測図
第25図　SB02実測図・遺物実測図
第26図　SB03実測図
第27図　SX01実測図・遺物実測図

挿表目次

第１表　周辺の遺跡
第２表　調査工程表
第３表　遺物観察表（１）
第４表　遺物観察表（２）
第５表　遺物観察表（３）
第６表　遺物観察表（４）
第７表　遺物観察表（５）
第８表　遺物観察表（６）
第９表　遺物観察表（７）
第10表　遺物観察表（８）
第11表　遺物観察表（９）
第12表　遺物観察表（10）
第13表　遺物観察表（11）
第14表　遺物観察表（12）
第15表　遺物観察表（13）
第16表　住居跡規模一覧

図版目次

図版１　1．調査区全景
　　2．調査区全景
　　3．調査風景
図版２　1．SK01完掘状況
　　2．SK01土層断面
　　3．SK02土層断面
図版３　1．SK03土層断面
　　2．SI04完掘状況
　　3．SI05検出状況
図版４　1．SI05完掘状況
　　2．SI05炉跡完掘状況
　　3．SI05炉跡土層断面
図版５　1．PG01完掘状況
　　2．SD01西壁土層断面
　　3．SI01掘り方
図版６　1．SI01検出状況
　　2．SI01カマド土層断面
　　3．SI02完掘状況
図版７　1．SI02掘り方
　　2．SI06掘り方
　　3．SI06土層断面
図版８　1．SI06　P1土層断面
　　2．SI06　P2土層断面
　　3．SI06　P3土層断面
図版９　1．SI03完掘状況
　　2．SI03完掘状況
　　3．SI03土層断面
図版10　1．SI03掘り方
　　2．SI03カマド土層断面
　　3．SB01完掘状況
図版11　1．SB01　P6土層断面
　　2．SB02完掘状況
　　3．SB02　P3土層断面
図版12　1．SB03完掘状況
　　2．SX01完掘状況
　　3．調査風景

友部町小原遺跡発掘調査会組織名簿

会　長　　坂倉　弘國（友部町教育委員会教育長）
副会長　　白田　清郎（友部町文化財保護審議会会長）
理　事　　深谷　　忠（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　　友部平重郎（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　　高野　克巳（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　　檜山　成勇（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　　南　　秀利（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　　鈴木　　登（友部町文化財保護審議会委員）
監　事　　岡本　規雄（友部町教育委員会生涯学習課長）
幹　事　　島田　武夫（友部町教育委員会生涯学習課長補佐）
幹　事　　橋本　祐一（友部町教育委員会生涯学習課係長）
幹　事　　海老沢　仁（友部町教育委員会生涯学習課主幹）
調査員　　吉田　　寿（大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部主任調査員）
指導員　　寺内　　寛（元茨城県教育財団調査課長）

大成エンジニアリング株式会社　埋蔵文化財調査部

学術顧問　　服部敬史・安孫子昭二
部　　長　　早川　泉
課　　長　　板野伸彦
調査員　　吉田　寿・小宮山友康

Ⅰ 調 査 概 要

1 調査にいたる経緯

畑地帯総合整備事業は、かんがい施設、道路、農地などの生産基盤の整備とあわせて、生産環境や集落環境を改善するための施設などを地域の実情に応じて一体的に整備することによって、生産性が高く、効率的な畑作農業地域を作る事業であります。そして、畑作かんがい施設の整備により、生産可能な作物品質の拡大、作物の反収の増加、品質の向上（生産物単価の上昇）あるいは、農道の整備による輸送経費の削減、荷傷み防止による品質向上。そして、区画整理による労働生産性の向上などの効果が期待されています。

友部町でも第四次総合計画で６つの目標に沿った基本施策を定めています。その重点施策の一つとして産業振興プロジェクトがあり、農林業の振興が図られることになります。そのために農業生産基盤の整備が進められ、その一環として畑地帯の整備が行われています。友部町小原地区の土地改良事業もそのような環境の中で、小原地区土地改良組合が設立され、県の指導を受けながら実施することになりました。

計画地は常磐線を挟んで北区（小原遺跡）と南区（三本松遺跡）の二地区に別れていますが、その中でも北地区には山王塚古墳など町内最大の古墳を有する一本松古墳群があり、重要な埋蔵文化財が包蔵されている地域であることは良く知られていました。そのため、町教育委員会は平成14年度以来、区画整理計画地内の開発にかかる範囲について、笠間市文化財審議会委員の能島清光氏に試掘による確認調査を依頼し、その結果に基づいて、大成エンジニアリング株式会社に調査を委託してきました。すなわち平成14年度は、南区（三本松遺跡）において3400㎡の調査範囲に弥生時代、古墳時代さらに古代から中世にいたるきわめて密度の濃い集落跡が発見されました。15年度には北区の幹線道路２号建設用地の1260㎡の調査範囲に縄文時代から弥生時代、古墳時代の住居跡等が発見されました。そして16年度の今回は、北区の幹線道路１号建設にかかる1080㎡を調査することになりました。

2 地理的位置と歴史的環境

地理的位置

暖地性植物分布の北限に近い友部町では、丘陵地域の植生では照葉樹と落葉広葉樹林が混交しており、カシ類、ツバキ類、イヌシデ・コナラ群類などの樹種が確認される。必ずしも原始・古代の植生を反映したものではないだろうが、留意される点である。

茨城県のほぼ中央部に位置する友部町は、東部は水戸市・茨城町に、南部は涸沼川を隔てて西茨城郡岩間町に、西部は笠間市に隣接している。町域は、東西約11㎞、南北約13㎞、面積は約59㎢である。町の北部を国道50号線、西部を国道355号線が走っており、JR常磐線と水戸線が友部駅で分岐している。また現在は常磐自動車道が町の南端部を通過しているが、友部ジャンクションで北関東自動車道が結ばれるようになると、北関東圏における東西交通の幹線として機能することが期待されている。

友部町は、山地及び丘陵地、台地、沖積低地に分かれるが９割方は緩やかな丘陵と平地で、涸沼川、涸沼前川などの中小河川にも恵まれて、生活するには良好な自然環境にある。北部・西部は鶏足山塊から南西に延びる丘陵地（友部丘陵）で、標高50～90ｍで広い平坦地を残している。丘陵を構成する層は友部層と呼ばれる更新世の海成砂礫層で、上層には関東ロームをのせている。中央部から南東部の台地は、東茨城台地の一部をなして大洗

町方面に広がっている。基盤となる第三紀層は見和層上層部と呼ばれ、砂・礫・粘土層によって構成されており、上層には関東ロームをのせている。南西部の山地は標高228mの金比羅山を中心に構成され、山地東側は国見山付近に水源をもつ涸沼川によって開析されており、沖積低地は水田となっている。中央部の台地北側には、北部丘陵を水源とする涸沼前川が北西から南東に流れ、流域には水田が拓かれている。

本遺跡は、その涸沼前川左岸の標高36～39mの丘陵縁辺部に立地している。弥生時代にはじまり、古墳時代から古代、中世にかけて営まれた集落跡である。沖積地の水田も弥生時代の頃から拓かれたものであろう。

歴史的環境

町域には多くの遺跡が確認されている。ここでは小原遺跡周辺の主な遺跡について概観する。

『友部町史』によれば、町内には縄文時代の遺跡が36ヶ所ほど確認されている。遺跡は、涸沼川流域をはじめ前涸沼川、涸沼川の支流枝折川の沿岸およびこれらの河川にそそぎ込む台地上に立地するという。先年、調査した宍戸カントリークラブのアプローチ道路の善九郎古墳群でも中期の住居跡と貯蔵用の土坑が検出され、かなり大規模な集落の存在が予測された。

弥生時代には、後期になってひたちなか市東中根遺跡や長岡遺跡に代表される遺跡が急激に増加する。壷形土器が主体となる独特の土器組成で、弥生末期に成立する十王台式土器に引きつがれていくようである。友部町内には８ヶ所の散布地が知られていたが、2000年に調査された茨城県教育財団による久保塚遺跡ではじめて弥生後期の住居跡が発見された。本事業にともなう平成14年度の南区・三本松遺跡の調査で弥生後期の住居跡が14軒検出され、また本事業の15年度の北区・幹線道路第２号の調査でも１軒検出された。この地域が弥生後期になって集落が形成されるようになり、やがて古墳築造の基盤をなしたことが示唆される。

茨城県下は関東地方でも群馬・千葉県に次ぐ古墳、古墳群が存在しているところである。とくに常陸太田、ひたちなか、石岡周辺、そして霞ヶ浦の北岸･南岸には、古墳群が集中して形成された。茨城県における古墳の特徴は、前方後円墳の造営が７世紀代にまで引きつがれる東国でも特異な事象となっている。また、方墳の発達や組合式箱式石棺の埋葬施設を多く採用するなども特徴である。

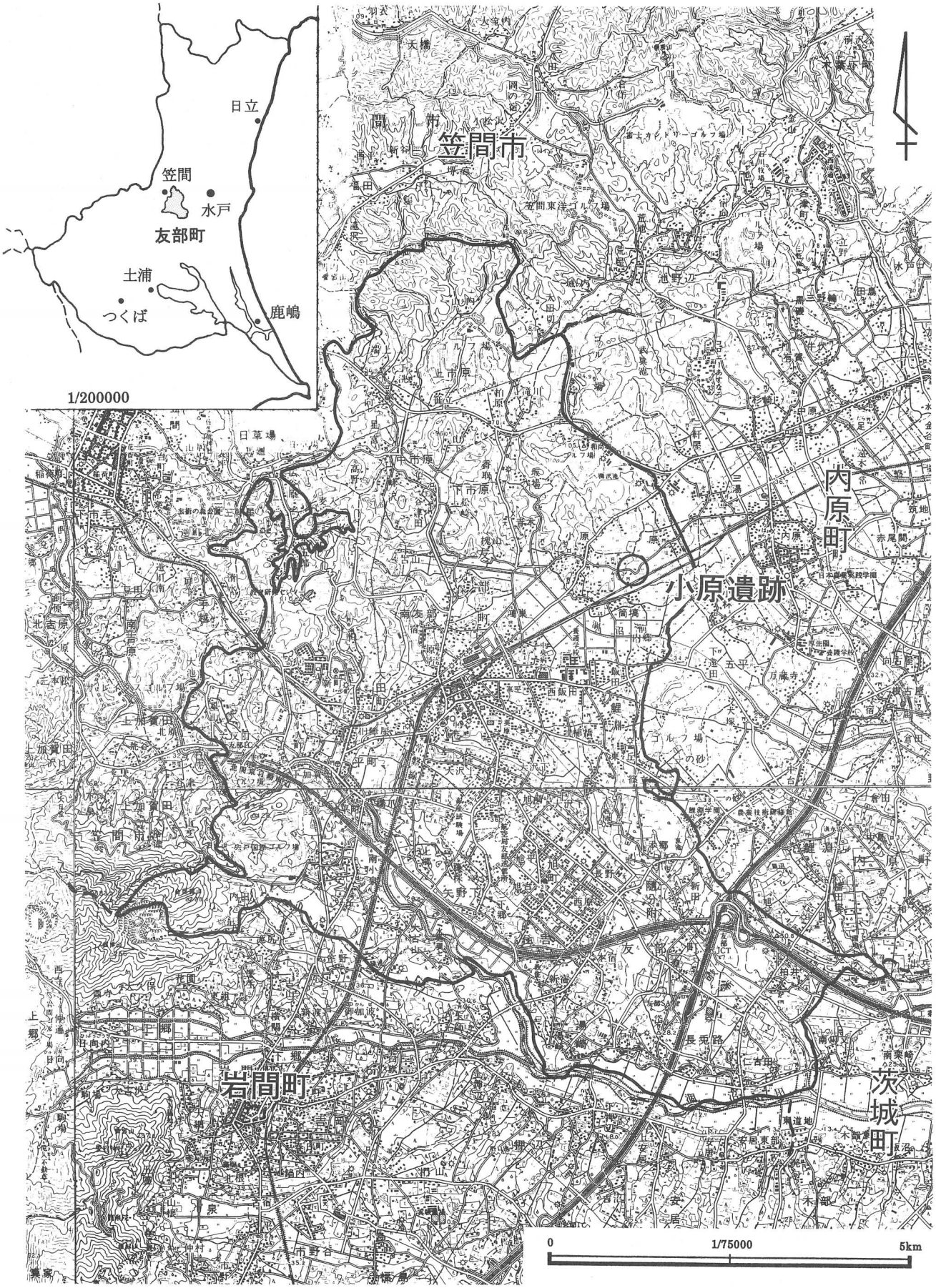
友部町の古墳は涸沼前川流域に多く集中しており、柳沢古墳群･一本松古墳群などの例が確認される。特に町指定史跡の「一本松古墳群」は前方後円墳２基、円墳１基で、本遺跡と何らか密接な関わりがあるものと考えられる。また東部に芝沼古墳群、南部に佐藤林古墳群、善九郎古墳群などが所在する。

これらを造営した集団の集落跡は古墳群と対応するように存在していると思われるが、その分布は必ずしも明確ではなかった。町史によれば、涸沼前川、涸沼川流域の丘陵台地上にはそれぞれ10個所近くの散布地が認められ、古墳時代前･後期の集落跡が存在するとみられる。1997年からはじまった北関東自動車道関係の遺跡調査や翌年の総合流通センター事業地内の遺跡調査により、涸沼川沿いの地域で、小峯A･B遺跡、仲丸遺跡、久保塚遺跡などの当該期の集落が明らかにされた。このうち仲丸遺跡からは、後期の住居跡が22軒検出されている。平成14年度の本事業の南区・三本松遺跡の調査でも古墳時代の住居跡が14軒検出された。また、これまで前期に属する遺跡は資料的に恵まれなかったが、平成15年度の幹線道路第２号の調査で住居跡の存在が確認された。

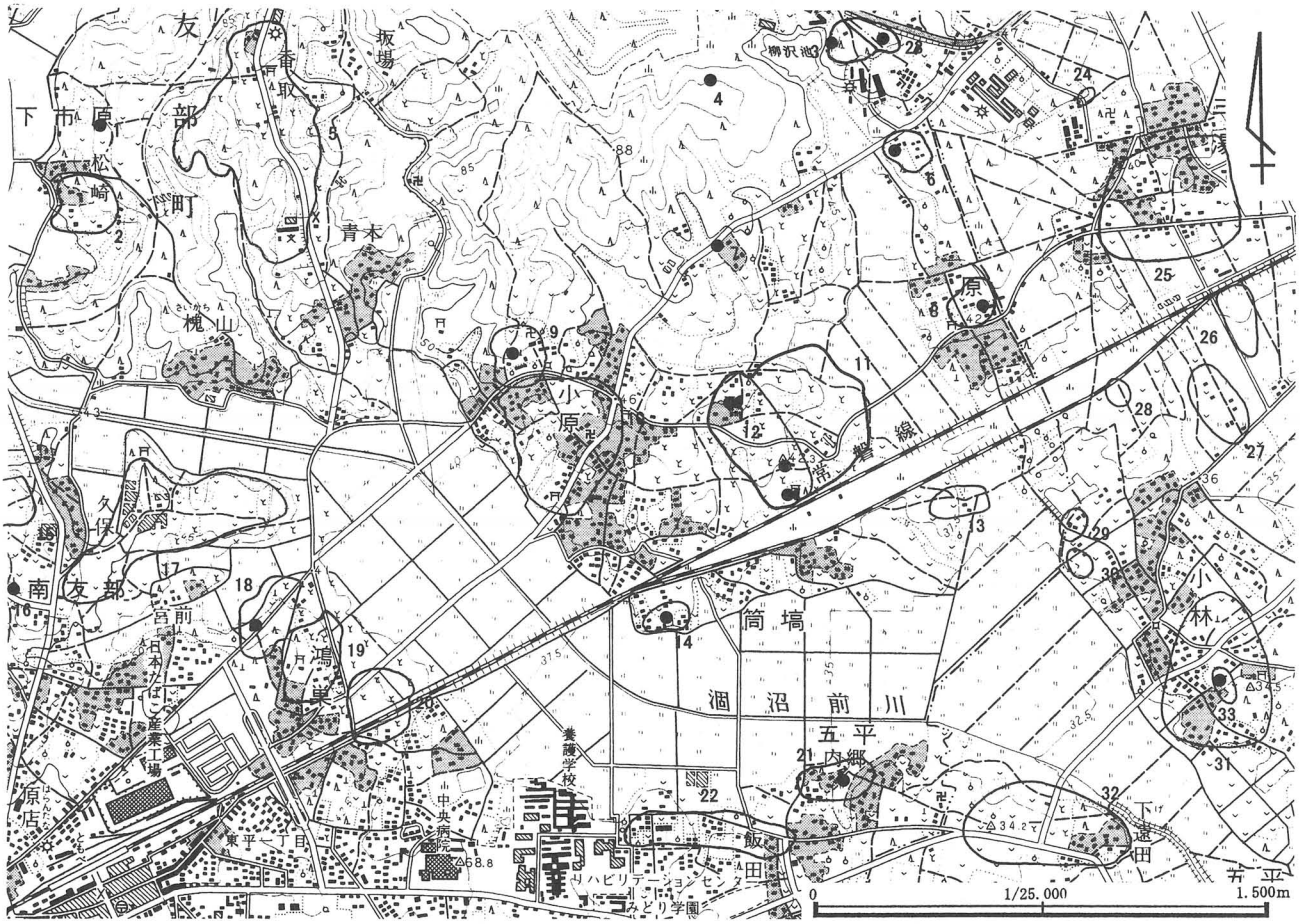
奈良・平安時代の町域は、茨城郡と那珂郡とにまたがっていた。この時代の遺跡としては涸沼前川を挟んだ対岸に北平遺跡があり、近年行われた調査において９世紀代を中心に墨書土器が確認されている。また三本松遺跡の調査では、限られた範囲ながら大小64軒もの住居跡が検出されている。

中世以降のものとしては、小原城跡が町の指定史跡として、本丸のみが現状保存されている。

（吉田）



第１図　遺跡位置図(1/7500)



第２図　周辺遺跡分布図(1/25000)

第１表　周辺の遺跡

友部町

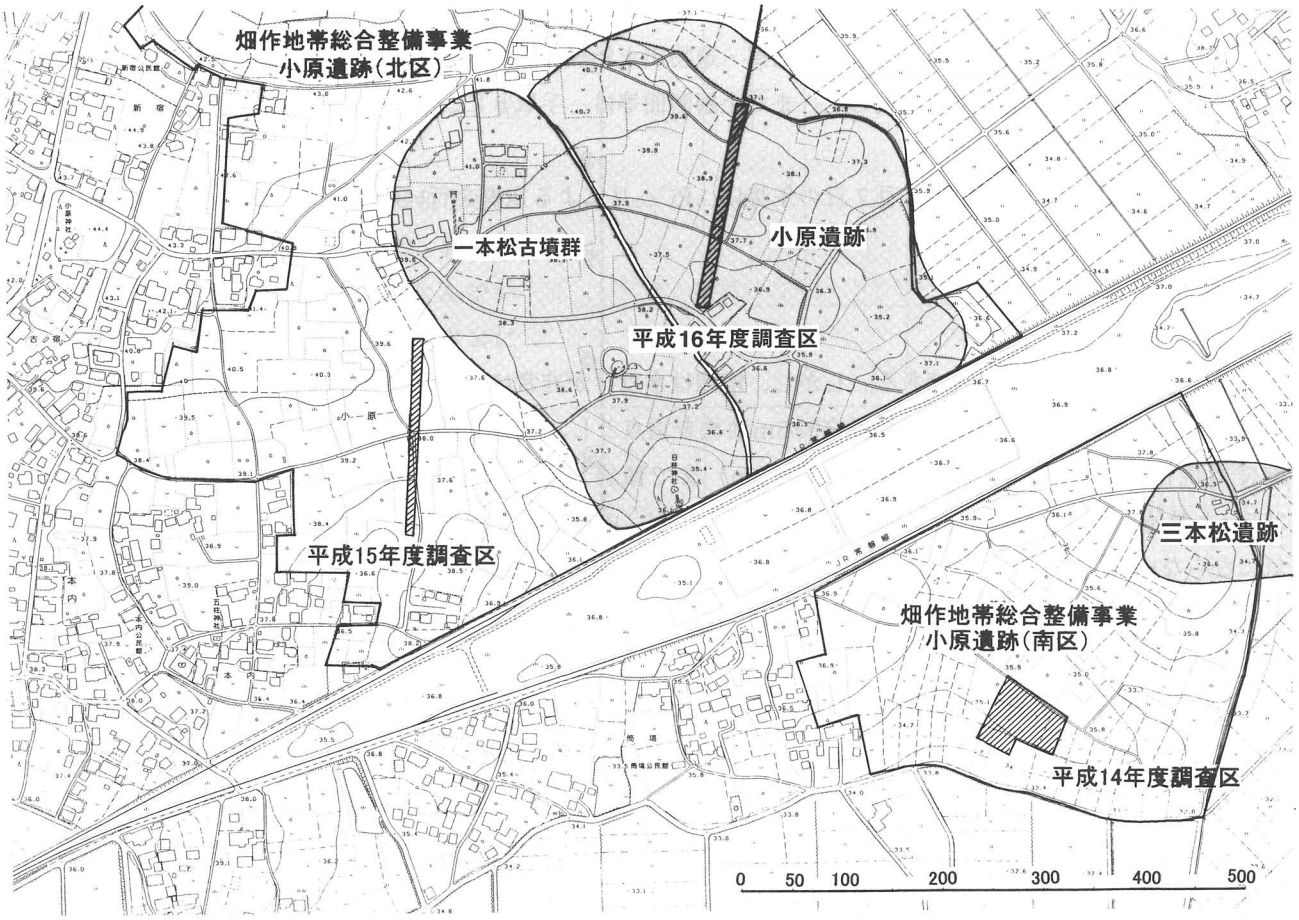
遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期 縄文	弥生	古墳	備考
1	四十八塚	塚				平成10年発掘調査
2	松崎台遺跡	包蔵地	○			
3	柳沢古墳群	古墳群			○	円墳7基
4	大日山古墳群	古墳群			○	
5	香取，坂場遺跡	包蔵地	○			平成6年発掘調査
6	原古墳	古墳			○	
7	喜平塚古墳	古墳			○	
8	原坪古墳群	古墳			○	
9	高寺古墳群	古墳群			○	円墳8基，昭和50年発掘調査，町指定史跡(2号墳)
10	小原城跡	城館跡				町指定史跡(本丸跡のみ)
11	小原遺跡	包蔵地	○	○	○	
12	一本松古墳群	古墳群			○	021と同地域，前方後円墳2基，円墳1基，町指定史跡
13	三本松遺跡	包蔵地		○		
14	塚崎古墳	古墳			○	
15	久保遺跡	包蔵地	○			
16	丹後塚古墳	古墳			○	
17	北平遺跡	包蔵地	○			
18	掃部塚古墳群	古墳群			○	円墳7基
19	家前遺跡	包蔵地	○	○	○	
20	田端内遺跡	包蔵地	○	○	○	

友部町

遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期 縄文	弥生	古墳	備考
21	五平古墳群	古墳群			○	円墳6基
22	五平内郷遺跡	包蔵地	○	○	○	

内原町

遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期 縄文	弥生	古墳	備考
23	三軒屋古墳群	古墳群			○	4基
24	宮前遺跡	包蔵地	○			
25	舞台遺跡	包蔵地	○		○	
26	西川遺跡	包蔵地	○		○	
27	竜開遺跡	包蔵地	○			
28	向山遺跡	包蔵地	○		○	
29	新道池南遺跡	包蔵地	○	○	○	
30	達中前遺跡	包蔵地	○		○	
31	小林遺跡	包蔵地			○	
32	下遠田遺跡	包蔵地	○		○	
33	大塚古墳群	古墳群			○	2基



第３図　調査地点位置図

3　調査方法と経過

区画整理北区計画地のほぼ中央に、西から東に開口する支谷が入りこんでいる。今回の調査個所は、その開口部に近い南側微高地という絶好の位置にあり、栗などの樹木が伐採されて見渡すかぎり更地となった中に、計画道路は幅７ｍで南北方向に延びる長さ180ｍの範囲が調査対象地であるが、両側0.5ｍを安全策として残し、調査面積は1080㎡とした。

今次調査に先立っては、平成16年６月16日に、笠間市文化財保護新議員能島清光氏による埋蔵文化財確認調査が実施されている。このときは植栽されていた栗畑の間に試掘坑が４ヶ所設定され、弥生時代および奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されて、本調査の必要性が説かれている。

調査はまず、重機により盛土ないし表土を除去したが、30～35㎝でローム土に達したので人力作業に切り替え、鋤簾等により遺構確認作業を行った。これにより竪穴と思われる数箇所の落ち込みが確認されたが、南北両端の沖積面に下りる緩傾斜では渇水期にもかかわらず水が涌きだす状況であった。

重機掘削を終えた時点で、公共座標（世界測地系座標Ⅸ系）を基準とした一辺10ｍの正方形グリッド杭を設定し、標高を取り付けた。座標杭には、西から東へ１・２…、南から北へＡ・Ｂ…の仮称を付し、南西隅にあたる杭の仮称をもってグリッドの呼称とした。また、遺構ごとにセクションを設定し、覆土を掘削した。遺構番号の呼称は、前述の略号を用い遺構種別ごとに１番からの連番とした。

出土した遺物は、原則として遺構ごとに一括して取り上げした。写真による記録は、35㎜モノクロ・カラーリバーサル及びネガカラーを使用し、断面・完掘・遺物出土状況等を適宜撮影した。記録は、基本的に光波測距儀を用いて観測を行い、遺構図を作成した。また土層断面等は、手取りによって図面の作成を行い、グリッド杭の標高を基準に計測した。

最後に、遺構調査が終了した２月７日の午後に、RCヘリによる空撮を行い、現地調査をすべて終了した。

4　基本層序

調査区域周辺の現況は畑地である。しかし、南側は水はけが非常に悪い為か常時ぬかるみ、湿地という印象を受ける。地形的には調査区中央部の標高39.5m前後を頂点とし、北側および南側では下傾斜していく。特に北端部では現在形成されている水田面（標高37.0m）まで傾斜しており、傾斜度がきつい。一方、南端部は標高37.5mと数値上では北側との標高比高差は目立たないが、中央部からなだらかに傾斜しており北端部ほど傾斜は気にならない。

包含層の堆積状況は良好ではない。南北方向に長い調査区域内において表土層の下位から直接ローム層に移行する箇所も存在し、比較的良好な箇所でもかろうじて表土層以下15～25㎝でローム層に移行する。これは一つに農作業に伴う天地返しなどが頻繁に行われたこと、加えて開発工事に伴う抜根や土取り（土量移動）が既に開始されていたことが要因として挙げられる。前者については調査区北側でローム層中にまで及んでいる箇所が多かった点からも伺える。

第４図は本遺跡の基本的な土層堆積である。上記した比較的良好な包含層といえる調査区南部（Ｅ－３区）東壁にテストピットを設定し、その断面観察により概ねⅠ～Ⅵ層を基本層序とした。しかし、第Ⅴ層以下は湧水のため詳細な記録観察はできなかったことをお断りしておく。また最上部にある本来の表土は、造成工事により欠失している。本調査において遺構検出はⅡ層下部～Ⅲ層上部にかけて行った。

第２表　調査工程表

月日 / 調査	1月																				2月									備考
	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8		
調査準備	■																													
表土掘削		■	■																											
遺構確認						■	■	■																						
SI01～06							■	■	■	■			■	■		■	■			■	■									弥生・古墳・古代住居跡
SK01～03								■	■	■			■	■																縄文土坑
SB01～03									■	■			■	■		■														古代掘立柱建物跡
PG01														■								■	■							小穴群
SD01																				■	■	■								溝状遺構
SW01													■																	近世以降溝跡
SX01								■	■	■																				不明遺構
備考				事務所設置										現場閉鎖	現地見学会							町教委の視察	県教委の視察				ヘリによる空撮			

第Ⅰ層：層厚20cm前後を測る、暗褐色をおびた「耕作土」と思われる。φ１～２㎜の橙色粒を少量含んでおり、粘性・しまり共にある。

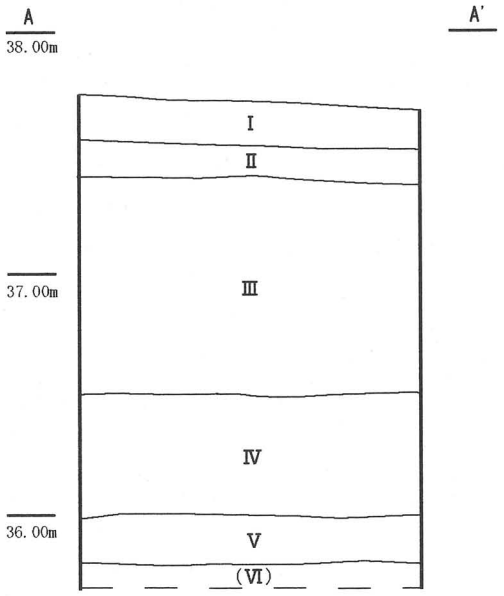
第Ⅱ層：層厚10～15cmを測り、茶褐色をおびる。表土に近似するものの、橙色粒を多量、ローム粒を少量含んでいる。Ⅰ層に比べて粘性・しまり共にやや強まる傾向にある。

第Ⅲ層：85～90cmを測り、黄褐色をおびた「ローム」層となる。粘性・しまり共に強い。

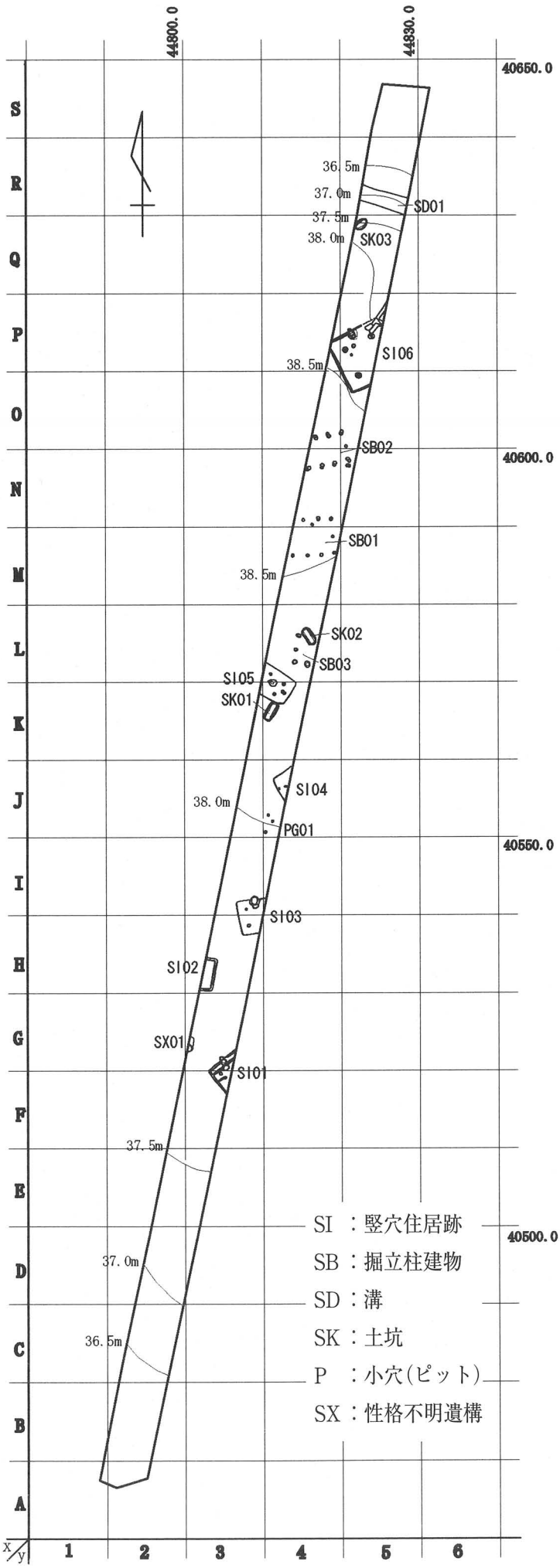
第Ⅳ層：黄灰色をおびたいわゆる「アワ土」と呼ばれる約３万年前の赤城火山を給源とする鹿沼土層で、層厚は約50cmを測る。粘性は弱く、しまりが強い。

第Ⅴ層：明茶褐色をおびたロームで、層厚は約20cmを測る。

（第Ⅵ層：湧水の為、観察不能）



第４図　基本層序



第５図　遺構配置図

Ⅱ　検出された遺構と遺物

1　縄文時代の遺構

SK01（第６図）

調査区中央、K－4グリッドに位置し、標高は38.1mを測る。長軸方向はN－29°－Eをとる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.6m・短軸1.2m・深さは0.95mを測る。底面は長軸2.2m・短軸0.5mの楕円形を呈し、平坦である。底面から0.4～0.5mの高さより上部が外傾する。

覆土は６層に分けられ、自然堆積の状況を示している。

出土遺物はない。

SK02（第７図）

調査区中央、L－4グリッドに位置し、標高は38.2mを測る。長軸方向はN－35°－Wをとる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.4m・短軸1.1m・深さは0.95mを測る。底面は長軸1.95m・短軸0.5mの楕円形を呈し、平坦である。底面から0.7mの高さより上部が外傾する。

覆土は７層に分けられ、自然堆積の状況を示している。１層を切る０層はSB03の掘込である。

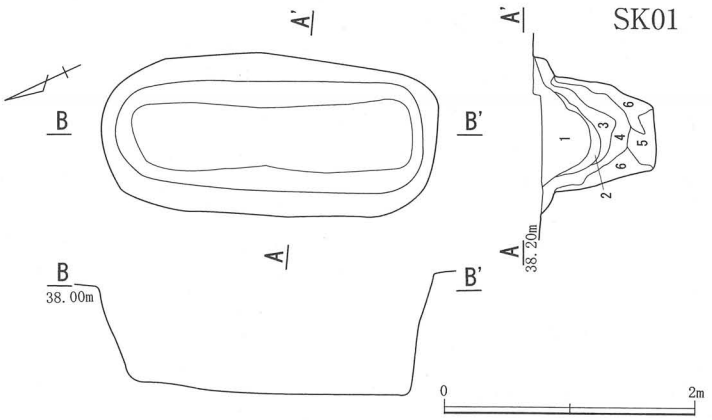
出土遺物はない。

SK03（第7図）

調査区北側、Q－5グリッドに位置し、標高は37.7mを測る。長軸方向はN－52°－Wをとる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.7m・短軸1.1m・深さは1.2mを測る。底面は長軸1.45m・短軸0.45mの楕円形を呈し、北側にやや傾斜する。底面から0.6～0.7mの高さより上部が外傾する。

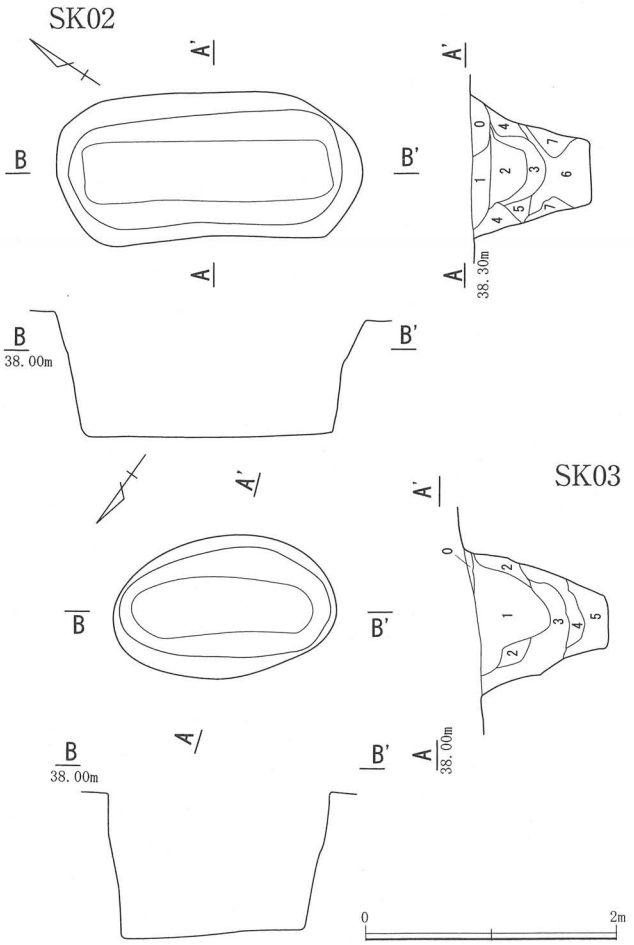
覆土は５層に分けられ、自然堆積の状況を示している。

出土遺物はない。



1 黒色土　白色粒微量。粘性あり、しまり強い。
2 黒褐色土　橙色粒少量。粘性あり、しまり強い。
3 黒褐色土　ローム粒少量。粘性・しまり強い。
4 茶褐色土　黒褐色土粒・ロームブロック少量。粘性強く、しまりあり。
5 暗褐色土　ローム粒・ブロック少量。粘性強く、しまりあり。
6 黄褐色土　ロームブロック多量。粘性弱く、しまり強い。

第６図　SK01実測図



0 黒褐色土　橙色粒微量。粘性弱く、しまりあり。
1 黒色土　白色粒微量。粘性あり、しまり強い。
2 黒色土　橙色粒少量。粘性あり、しまり強い。
3 黒褐色土　橙色粒少量。粘性あり、しまり強い。
4 暗褐色土　ローム粒少量。粘性強く、しまりあり。
5 暗黒褐色土　4より黒味が強く、橙色粒少量。粘性あり、しまり弱い。
6 暗褐色土　φ3～5㎜の橙色粒・ローム粒少量。粘性・しまり強い。
7 茶褐色土　ローム粒・ブロック少量。粘性あり、しまり弱い。

0 暗褐色土　客土で、粘性・しまりなし。
1 黒色土　白色粒微量。粘性あり、しまり強い。
2 黒褐色土　1に近似する。粘性あり、しまり強い。
3 黒褐色土　黄褐色ローム（アワ土）粒少量。粘性・しまり強い。
4 茶褐色土　黄褐色ローム（アワ土）粒多量。粘性あり、しまり強い。
5 暗褐色土　下位に黄褐色ローム（アワ土）粒少量。粘性強く、しまりあり。

第7図　SK02・3実測図

2　弥生時代の遺構と遺物

SI04（第8図）

調査区中央、J－4グリッドに位置し、標高は38.3mを測る。本址は西側約3分の1を調査したが、大半は調査区外に出る。平面形は部分的な調査の為に断言できないが、隅丸長方形を呈すると思われる。調査範囲内での規模は長軸3.3m・短軸3.0mを測り、長軸方向はN－30°－Wをとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40cmを測る。床面はローム層中に構築され、平坦である。炉跡および周溝は調査範囲内において検出されなかった。

ピットは2個検出された。P2は住居内側にやや傾斜しており、出入口施設とも考えられるが、P1の性格が不明瞭である。いずれにせよ部分調査のため確証はない。

遺物は覆土中を中心に出土しているが、30点に満たない。いずれも散在的な出土であり、一括集中といった出土様相は見られなかった。

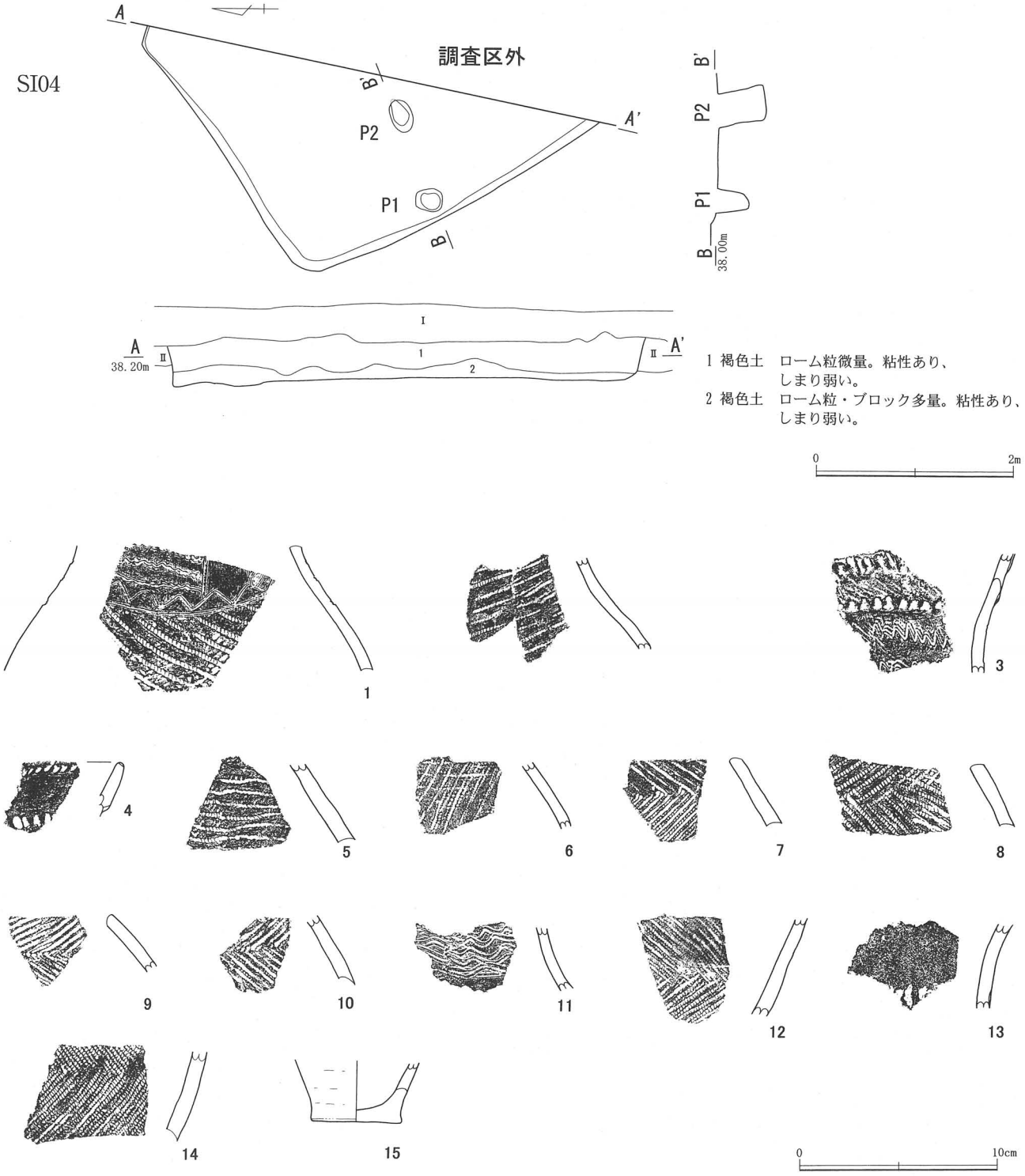
SI05（第9図）

調査区中央、L－4グリッドを中心に位置し、標高は38.2mを測る。西側壁は調査区外に出、南側壁は一部は試掘坑により欠失する。平面形は隅丸長方形を呈すると思われ、規模は長軸は現存値で4.6m・短軸3.8mを測る。長軸方向はN－53°－Wをとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は52cm前後を測る。床面はローム層中に構築され、平坦で堅い。周溝は調査範囲内においては検出されなかった。

炉跡は地床炉で、長軸線上の中央やや西寄りにあり、長径1.1m・短径0.9m・深さ0.13mの楕円形を呈する。

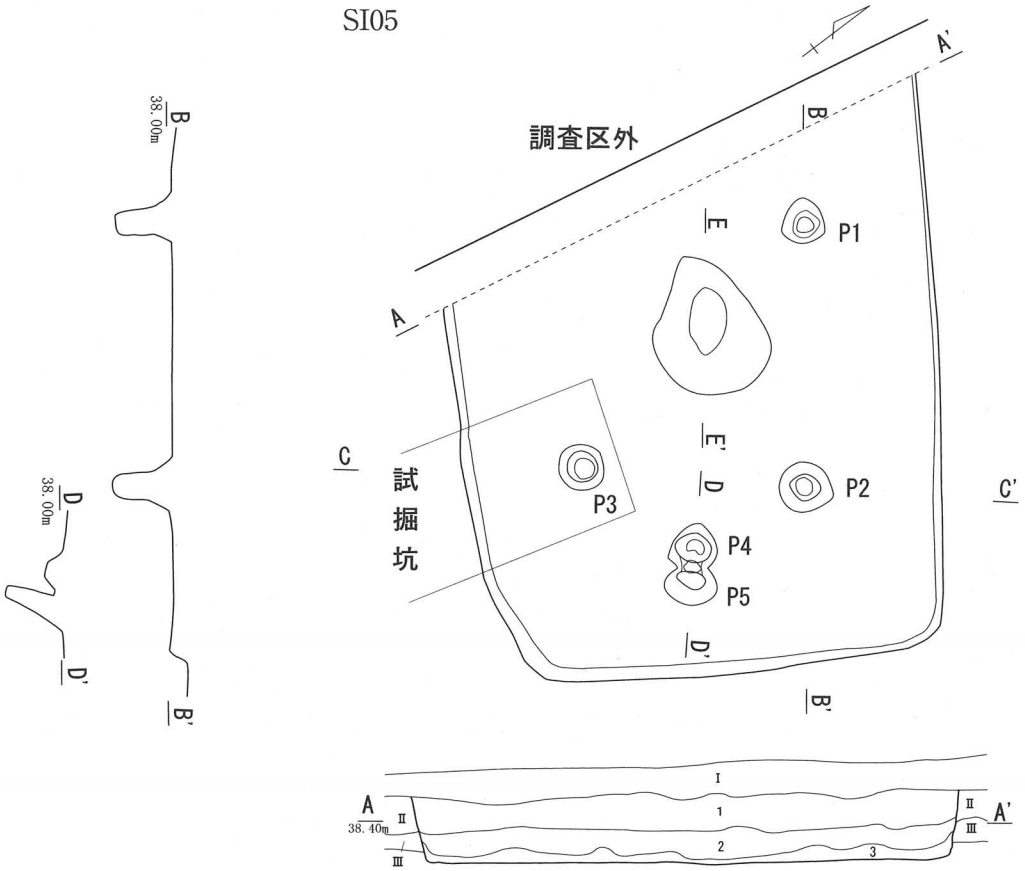
ピットは5個検出され、主柱穴はP1～3である。P5は住居内側へ約30～35°の傾斜を有していることから梯子穴のような出入口施設と考えられる。

遺物は炉周辺の床面から5点出土した以外は、すべて覆土中からである。SI04と同様に散在的であり、まとまった出土状況は見られなかった。



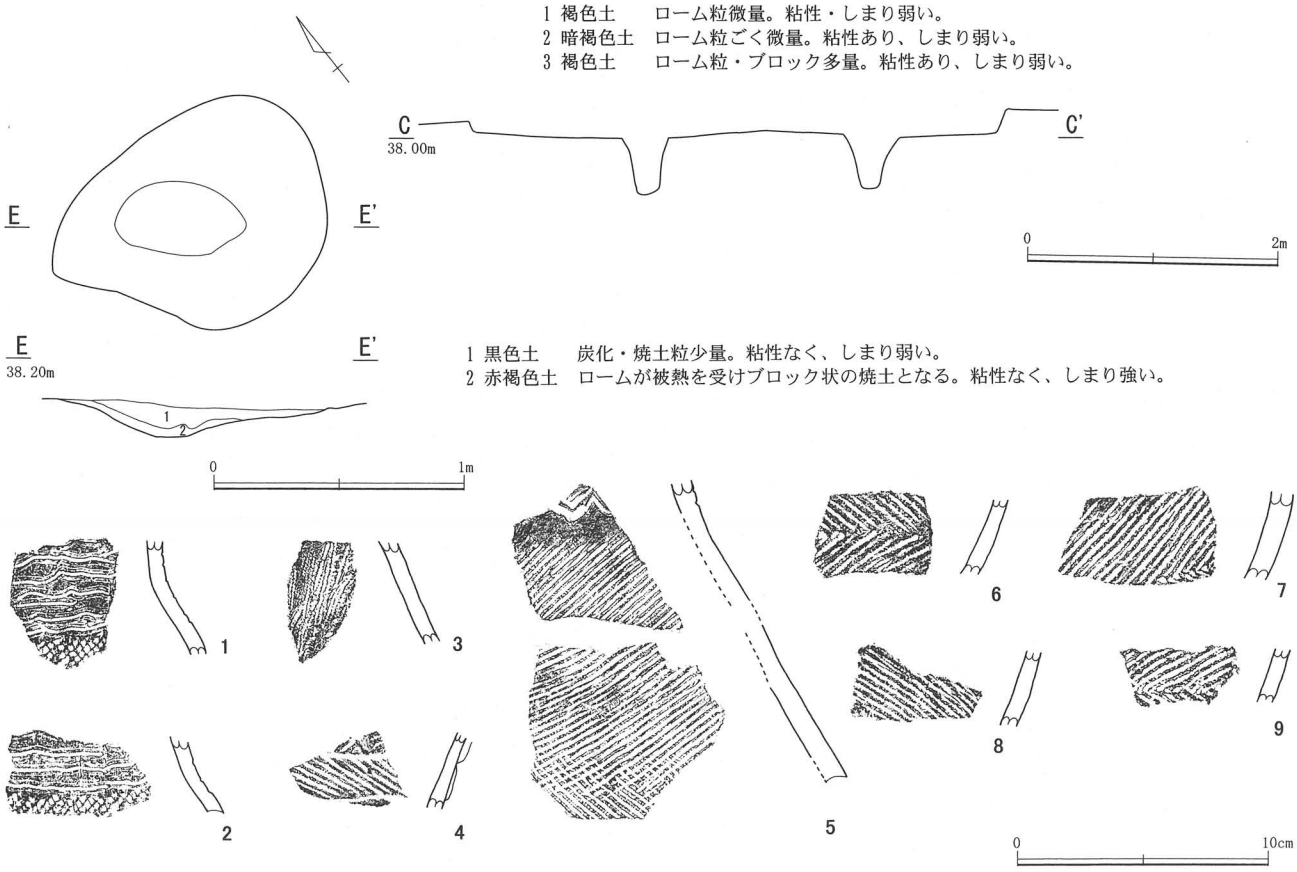
第8図　SI04 実測図・遺物実測図

SI05



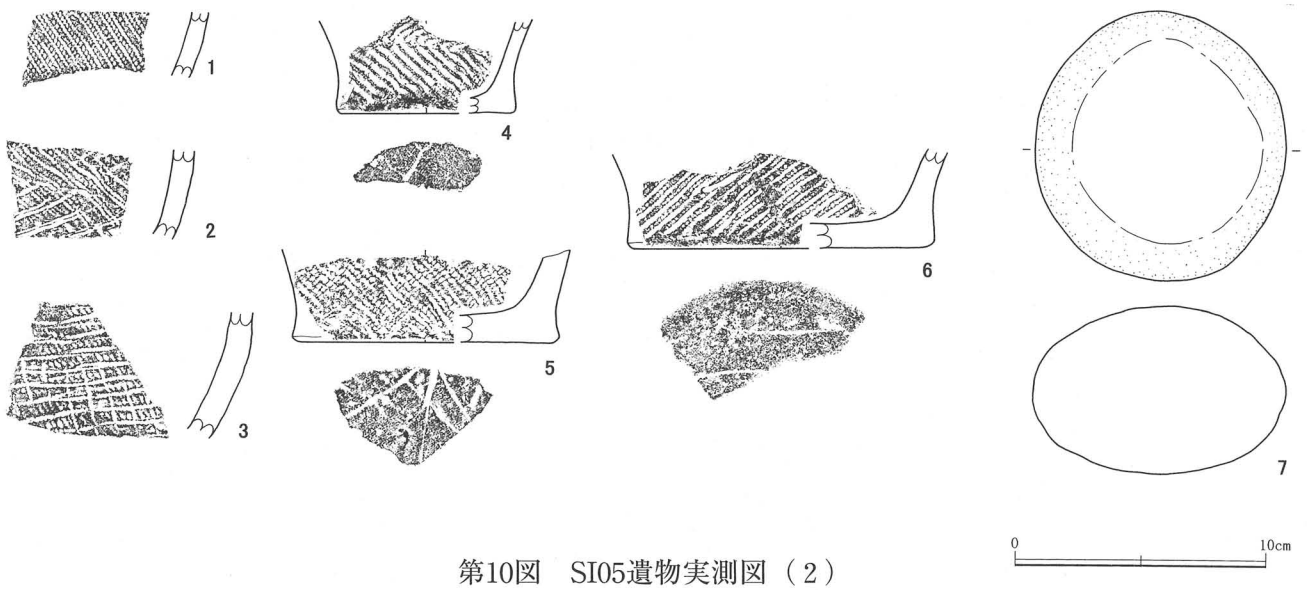
SI05　炉

1 褐色土　　ローム粒微量。粘性・しまり弱い。
2 暗褐色土　ローム粒ごく微量。粘性あり、しまり弱い。
3 褐色土　　ローム粒・ブロック多量。粘性あり、しまり弱い。



1 黒色土　　炭化・焼土粒少量。粘性なく、しまり弱い。
2 赤褐色土　ロームが被熱を受けブロック状の焼土となる。粘性なく、しまり強い。

第 9 図　SI05 実測図・遺物実測図（1）



第10図　SI05遺物実測図（２）

第３表　観察表（１）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SI04	一括	8-1	13-1	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部～胴部の破片。肩部は櫛描文で縦位に区画され、区画内を横位の櫛描波状文が施されている。肩部と胴部との境は櫛描山形文と櫛描文が施され、胴部には撚糸文ｌが施される。肩部外面には黒色物質が付着している。	微砂粒微量	普通	外面：黒褐色 内面：暗褐色
	一括	8-2	13-2	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。撚糸文ｒが施されている。外面に黒色物質が付着している。	小砂粒・白色針状態物質微量。	普通	暗褐色
	一括	8-3	13-3	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部～頸部の破片。口縁部折り返し部分に刺突文をつけ、櫛描波状文、刺突文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒微量	普通	黒褐色
	一括	8-4	13-4	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部破片。口唇部にキザミ目が施され、口縁部折り返し部分に刺突文が施さている。外面に黒色物質が付着している。	小砂粒・白色針状物質・長石微量	普通	外面：暗褐色、 内面：明赤褐色
	一括	8-5	13-5	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸文ｌが施されている。	微砂粒中量・石英少量	普通	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色
	一括	8-6	13-6	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の縄文が一部格子状に施されている。	微砂粒微量	普通	黒褐色
	一括	8-7	13-7	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	微砂粒・石英微量	普通	外面：橙色 内面：明赤褐色
	一括	8-8	13-8	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｌとｒの羽状縄文が施されている。内面に黒色物質が付着している。	小砂粒・長石多量。	普通	暗褐色
	一括	8-9	13-9	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	微砂粒微量	普通	明赤褐色
	一括	8-10	13-10	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	微砂粒・石英多量	普通	外面：橙色 内面：明赤褐色
	一括	8-11	13-11	弥生土器	壺	-	-	-	壺の頸部の破片。不規則な櫛描波状文が施されている。	小砂粒・長石少量	普通	外面：褐色 内面：にぶい黄褐色
	一括	8-12	13-12	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	微砂粒微量	普通	明黄褐色
	一括	8-13	13-13	弥生土器	壺	-	-	-	壺の頸部の破片。下端にLR縄文？が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒・長石微量	普通	赤褐色
	一括	8-14	13-14	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｌとｒの羽状縄文が施されている。	小砂粒・石英中量。	普通	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色
	一括	8-15	13-15	弥生土器	壺	-	-	-	底部～胴部の破片。胴部は急角度で立ち上がり、底部はヘラナデ後ナデ。胴部から底部にかけて黒斑あり。	微砂粒・石英多量、白色針状物質少量。	普通	外面：暗褐色 内面：赤褐色

第４表　観察表（２）

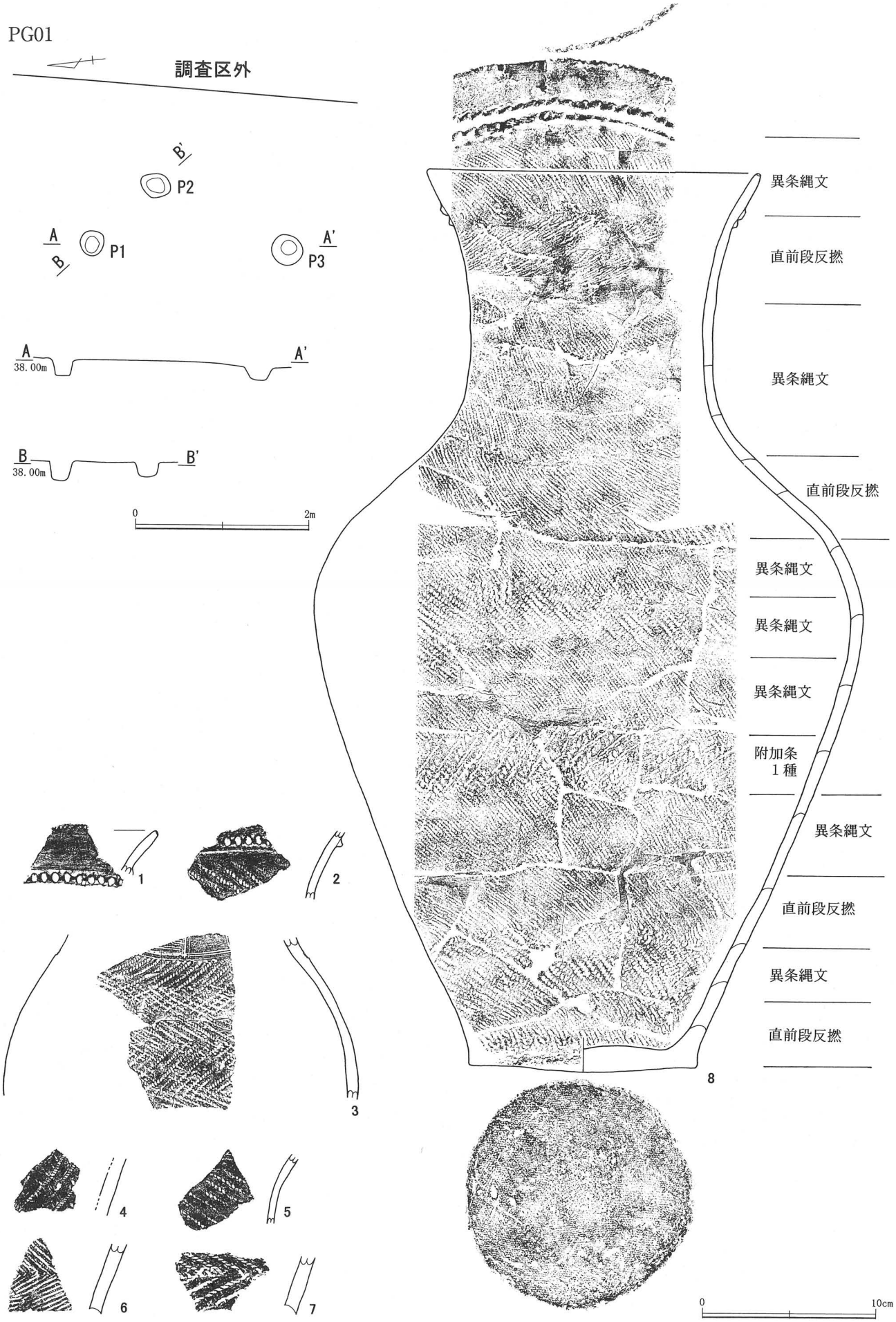
遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SI05	一括	9-1	13-16	弥生土器	壺	-	-	-	頚部～肩部は破片。頚部には不規則な櫛描波状文が施され、肩部にはLR縄文が横位に施されている。頚部に一部黒色物質が付着している。	微砂粒・石英少量	普通	暗褐色
	一括	9-2	13-17	弥生土器	壺	-	-	-	頚部～肩部は破片。頚部には不規則な櫛描波状文が施され、肩部にはLR縄文が横位に施されている。	小砂粒中量・石英少量	普通	内面：暗褐色 外面：橙色
	一括	9-3	13-18	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸１の縄文が縦位に不規則に施されている。内面に黒色物質が付着している。	微砂粒・石英・黒雲母微量	普通	橙色
	一括	9-4	13-19	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部破片。折り返し部分に撚糸１の縄文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	小砂粒・石英少量	普通	暗褐色
	一括	9-5	13-20	弥生土器	壺	-	-	-	上部に横位の櫛描波状文を施し、その下に付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。一部重なり、格子状をなす。	小砂粒・石英中量	普通	黄褐色
	一括	9-6	13-21	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	橙色
	一括	9-7	13-22	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	大砂粒少量・中砂粒・石英中量	普通	内面：赤褐色 外面：褐色
	一括	9-8	13-23	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の縄文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	黄褐色
	一括	9-9	13-24	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	微砂粒微量	普通	赤褐色
	一括	10-1	13-25	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の縄文が施されている。	小砂粒・石英少量	普通	黒褐色
	一括	10-2	13-26	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の縄文が、無節ｒの付加縄文とともに格子状に施されている。外面に黒斑あり。	微砂粒微量	普通	暗褐色
	一括	10-3	13-27	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の縄文が格子状に施されている。	小砂粒中量	普通	黄褐色
	一括	10-4	13-28	弥生土器	壺	-			壺の底部～胴部破片。胴部に縄文RLが施され、底部には木葉痕が明瞭に残る。	微砂粒微量	普通	外面：橙色 内面：黄褐色
	一括	10-5	13-29	弥生土器	壺	-			壺の底部～胴部破片。胴部に縄文RLが施され、底部には木葉痕が残り、磨かれている。内面に黒色物質が付着している。	微砂粒微量	普通	褐色
	一括	10-6	13-30	弥生土器	壺	-			壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の縄文が施されている。底部に棒状の圧痕が残る。	小砂粒・石英中量	普通	黄褐色
	一括	10-7	13-31	石器	磨石				長さ10.8cm、幅10cm、厚さ6.8cm。円礫を素材とした、楕円形で厚みを持つ大型の磨石。両面とも甲高でとりたてて擦痕は認められない。			

PG01（第11図）

調査区中央、J－4グリッド周辺において、３本のピットを検出した。これらを当該期の帰属とした理由は、ピット内に遺物が出土している点、各ピットの覆土が住居址覆土と共通している点から判断したものである。調査中には、ピットの配列を含めて、住居跡の存在も考慮し周辺を精査したが、床面と覚しき硬化面や焼土痕、壁面となるような掘込を確認することはできなかった。

いずれも平面は不整円形を呈し、径25～35cm・深さ15～20cmを測る。覆土は単層である。

遺物はP2覆土中から出土した。



第11図　PG01実測図・遺物実測図

第５表　観察表（３）

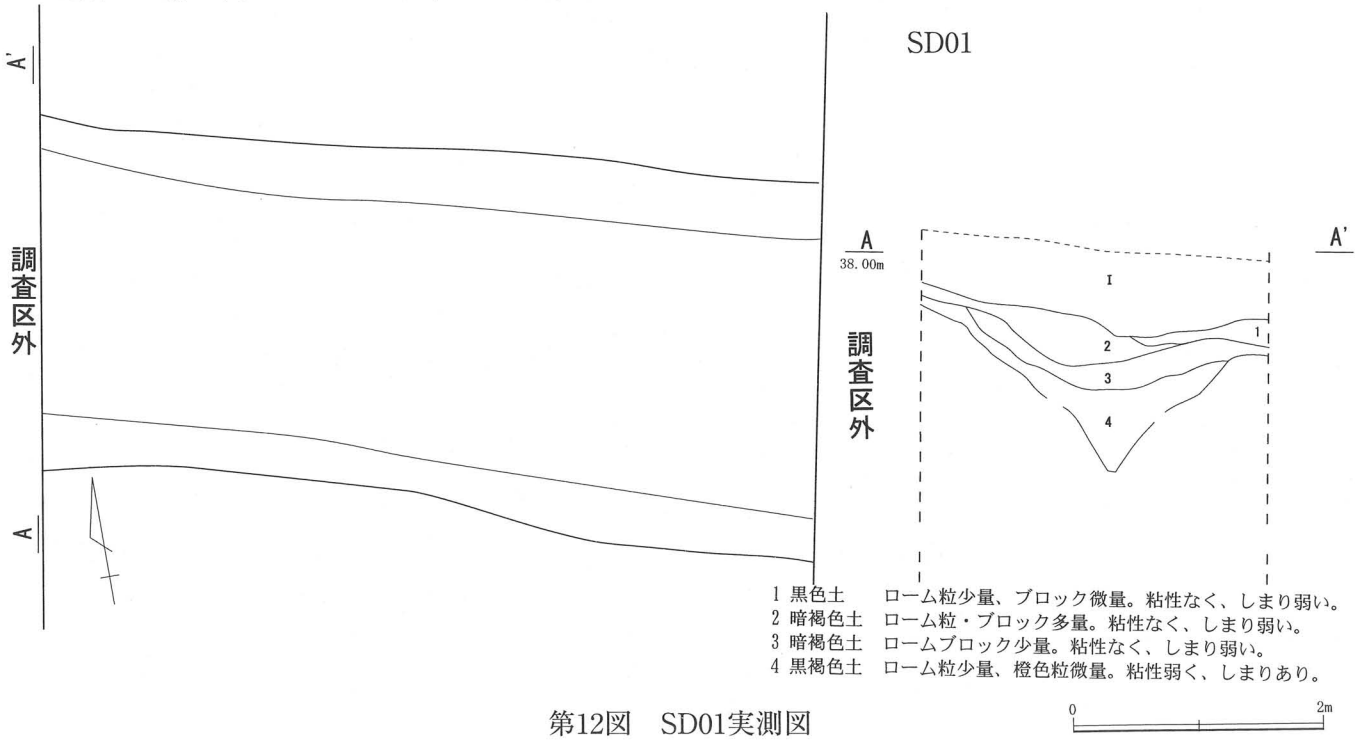
遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
PG01	一括	11-1	13-32	弥生土器	甕	-	-	-	甕の口縁部破片。口唇部にヘラ状工具によるキザミ目が施される。胴部との境に細い隆帯が廻され、刺突文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒微量	普通	暗褐色
	一括	11-2	13-33	弥生土器	甕	-	-	-	甕の口縁部破片。胴部との境に細い隆帯が廻され刺突文が、胴部には斜位の撚糸１の縄文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒微量	普通	暗褐色
	一括	11-3	13-34	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。上部は縦位に櫛描文で区画され、横位の櫛描文で区画内を施文している。胴部は撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。外面に黒色物質が付着している。内面にヘラ状工具痕が明瞭に残る。	微砂粒微量	普通	暗褐色
	一括	11-4	13-35	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸１の縄文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	赤褐色
	一括	11-5	13-36	弥生土器	壺	-	-	-	斜位の撚糸１の縄文が施されている。表面に擦痕が残る。	微砂粒微量	普通	暗褐色
	一括	11-6	13-37	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	外面：暗褐色 内面：橙色
	一括	11-7	13-38	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	黄褐色
	一括	11-8	14-1	弥生土器	壺	19	13	52	大型壺の完形品。口唇に縄文原体の圧痕で刻みを入れ、口縁下に指頭圧痕の粘土紐２条貼付け。その直下から底部まで撚りの異なる各種の縄文原体（異条付加条）を回転施文した縄文帯が12段に渡り重畳。底面には布目圧痕と籾痕が確認される。東中根式？			

SD01（第12図）

調査区北側、Ｒ－５グリッドに位置し、標高は37.0ｍを測る。北側へとしだいに傾斜していく地形に沿って、概ね東西方向にのびるものと考えられる。

調査は著しい湧水の為、溝底まで到らなかったが、溝の断面形態は「Ｖ」ないし「逆台形」状を呈すると思われる。確認面での溝幅1.9～2.2ｍ・深さ（1.0～1.2）ｍを測る。

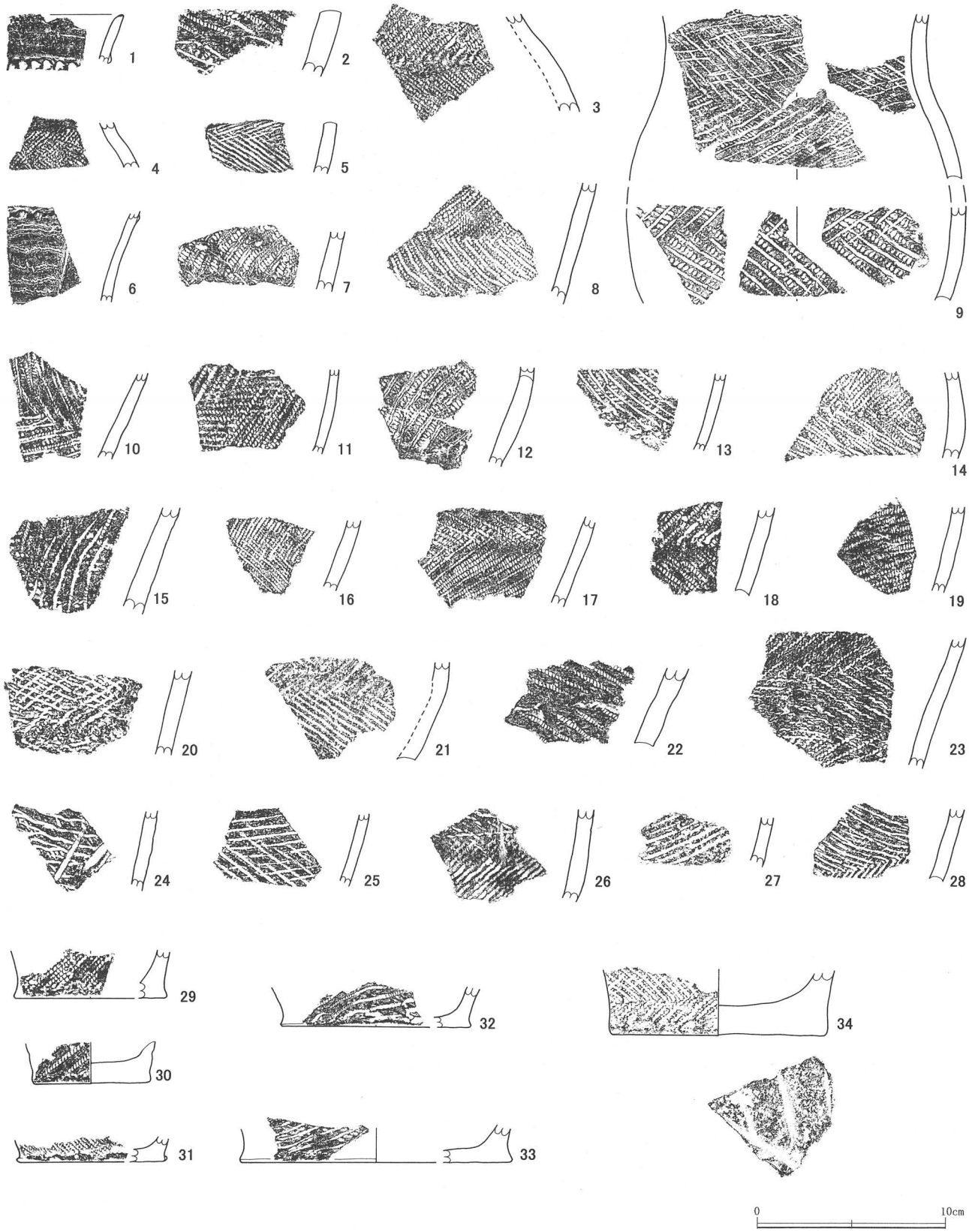
遺物は２層より出土したが、小片のため図示できるものはない。



第12図　SD01実測図

遺構外遺物

弥生時代に属する遺構外の遺物は調査区域内において散漫な出土状況であった。当時期の遺構が位置する調査区中央部周辺においてややまとまるものの、完形に近い遺物はなく、小破片が大多数を占める。



第13図　遺構外遺物実測図

第６表　観察表（４）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
遺構外	一括	13-1	15-1	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部破片。口唇部にキザミ目が施され、胴部との境に細い隆帯が廻され刺突文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	暗褐色
	一括	13-2	15-2	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。斜位の撚糸１の縄文が施されている。内面は剥落している。表面の調整は丁寧ではなく凹凸がある。	小砂粒・石英・長石多量	普通	外面：暗褐色 内面：橙色
	一括	13-3	15-3	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。内面は剥落している。	小砂粒・石英・長石多量	普通	褐色
	一括	13-4	15-4	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	褐色
	一括	13-5	15-5	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。一部格子状をなす。	小砂粒・石英少量	普通	暗褐色
	一括	13-6	15-6	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。一部格子状をなす。外面黒斑あり。	小砂粒・石英少量	普通	褐色
	一括	13-7	15-7	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加２条）の羽状縄文が施されている。内面に黒斑と粘土継痕あり。	小砂粒・石英少量	普通	褐色
	一括	13-8	15-8	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。内面は剥落している。	中砂粒・石英少量	普通	橙色
	一括	13-9	15-9	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。撚糸１と付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。一部格子状をなす。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	暗褐色
	一括	13-10	15-10	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加１条）の羽状縄文が施されている。	微砂粒・白色物質少量	普通	橙色
	一括	13-11	15-11	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	黒褐色
	一括	13-12	15-12	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条２種（付加２条）の縄文が施されている。内外面に黒斑あり。	大砂粒・石英多量	普通	暗褐色
	一括	13-13	15-13	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の縄文が格子状に施されている。内面は剥落している。	微砂粒少量	普通	外面：暗褐色 内面：黄褐色
	一括	13-14	15-14	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。内面はヒビが入り、もろくなっている。	中砂粒・石英少量	普通	橙色
	一括	13-15	15-15	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。斜位の撚糸１の縄文が施されている。内面にヘラナデ痕残す。	小砂粒・石英少量	普通	褐色
	一括	13-16	15-16	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。一部格子状をなす。	小砂粒・石英少量	普通	黄褐色
	一括	13-17	15-17	弥生土器	壺	-	-	-	壺の頸部破片。櫛描文で縦位に区画して、区画内を横位の櫛描波状文を、口縁部折り返し部分に刺突文を施す。	微砂粒少量	普通	褐色
	一括	13-18	15-18	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-19	15-19	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。斜位の撚糸１の縄文が施されている。表面は磨耗してもろくなっている。外面に黒斑あり。	小砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-20	15-20	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の縄文が格子状に施されている。内面は剥落している。外面に一部黒色物質が付着している。輪積み痕あり。	大砂粒・石英多量	普通	赤褐色
	一括	13-21	15-21	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。外面は磨耗し、内面は剥落している。	小砂粒・石英・長石多量	普通	橙色
	一括	13-22	15-22	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。斜位の撚糸１の縄文が施されている。内面は剥落している。表面の調整は丁寧ではなく凹凸がある。	小砂粒・石英・長石多量	普通	褐色

第７表　観察表（５）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
遺構外	一括	13-23	15-23	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。	微砂粒・長石少量	普通	暗褐色
	一括	13-24	15-24	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと無節１との羽状縄文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	外面：暗褐色 内面：赤褐色
	一括	13-25	15-25	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の縄文が格子状に施されている。内面は剥落している。	小砂粒・石英多量	普通	黄褐色
	一括	13-26	15-26	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと無節１との羽状縄文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	外面：暗褐色 内面：赤褐色
	一括	13-27	15-27	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。斜位の撚糸１の縄文が施されている。表面は磨耗してもろくなっている。	小砂粒・石英少量	不良	白色
	一括	13-28	15-28	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撚糸ｒと１の羽状縄文が施されている。内面は一部剥落している。	小砂粒・石英多量	普通	黄褐色
	一括	13-29	15-29	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。胴部には撚糸ｒの縄文が施されている。底部には布目圧痕が残り、内面は剥落している。	小砂粒・石英多量	普通	橙色
	一括	13-30	15-30	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。胴部には斜位の撚糸ｒの縄文が施されている。底部は急角度で立ち上がる。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-31	15-31	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。胴部には横位の縄文RLが施されている。底部は薄く、急角度で立ち上がる。底部～胴部への調整が丁寧ではなく、粘土が巻き付いたままである。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-32	15-32	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。胴部には斜位の撚糸ｒの縄文が施されている。底部は薄く、急角度で立ち上がる。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-33	15-33	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。胴部には付加条２種（付加１条）の縄文が施されている。底部は薄く、急角度で立ち上がる。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-34	15-34	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。胴部には撚糸ｒと１の羽状縄文が施され、底部には木葉痕が明瞭に残る。	大砂粒・石英多量	普通	橙色

3　古墳時代

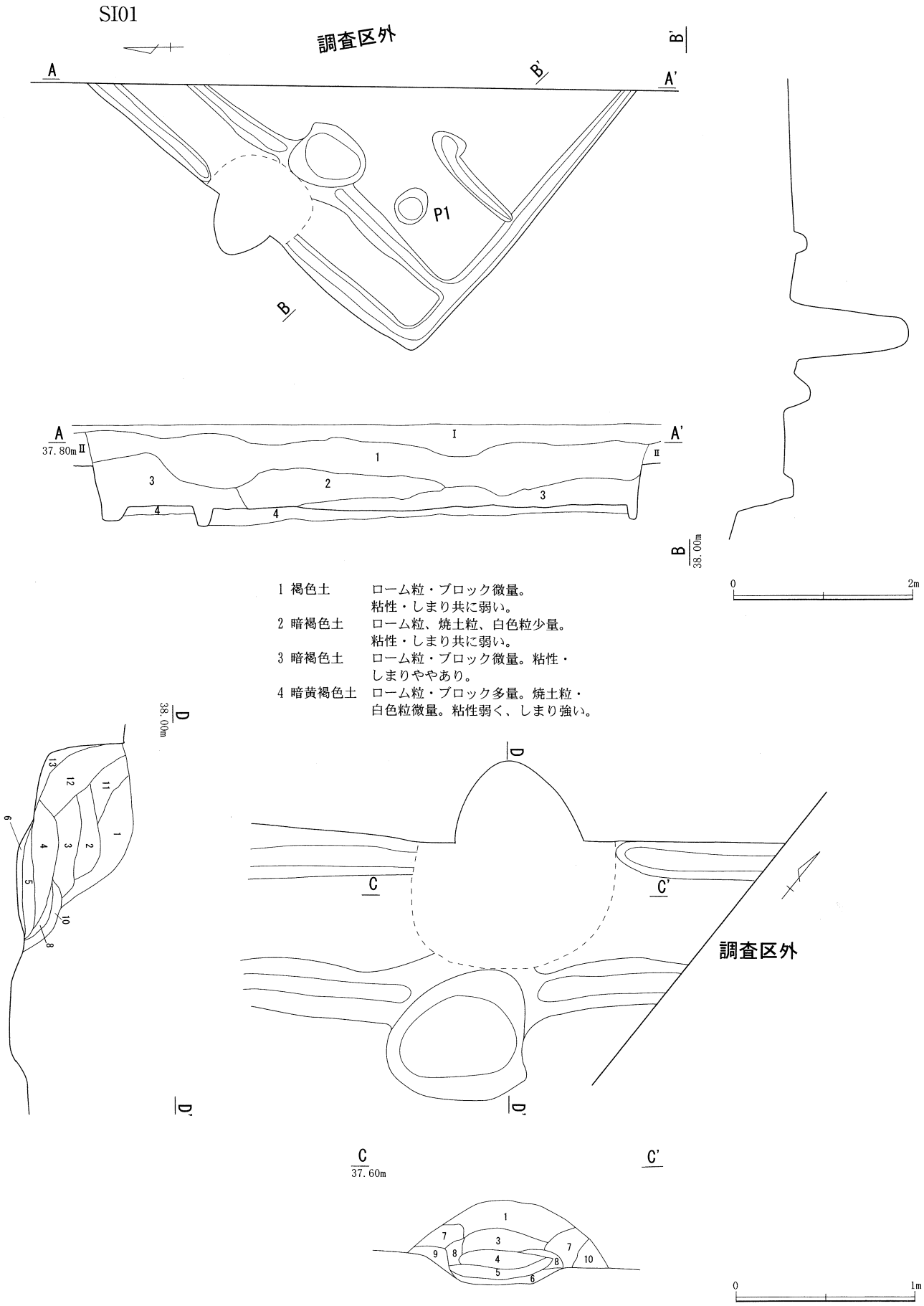
SI01（第14図）

調査区南側、G－3グリッドを中心に位置し、標高は37.6mを測る。本遺構の大部分、東側は調査区外となる為、平面形は断言できないが方形を呈すると思われる。この住居は建替えが行われており、古い住居の西辺側を0.6mほど拡張し、カマドを構築している。したがって、調査範囲内での規模は旧住居跡が３×3.8m、新住居跡が４×4.5mの二辺壁が確認されている。主軸方向はN－39°－Wをとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは平均35cmを測る。床面はローム層中に貼床が構築され、平坦で堅く踏み締められている。周溝は幅12～24cm・深さ８～16cmで調査範囲内では全周している。

ピットは主柱穴が１個検出され、その南側に幅13～18cm、深さ８cmの間仕切り状の溝が存在する。

遺物は床面・カマド周辺および覆土上層から出土した。床直上面のまとまった遺物としてはカマド右袖前面から復元可能の個体が出土している。しかし本遺構に伴う遺物の大半は覆土上層から中層にまとまって出土したものであり、投げ込み・流れ込みに拠るものであることが想定される。下層からの出土点数は顕著ではない。

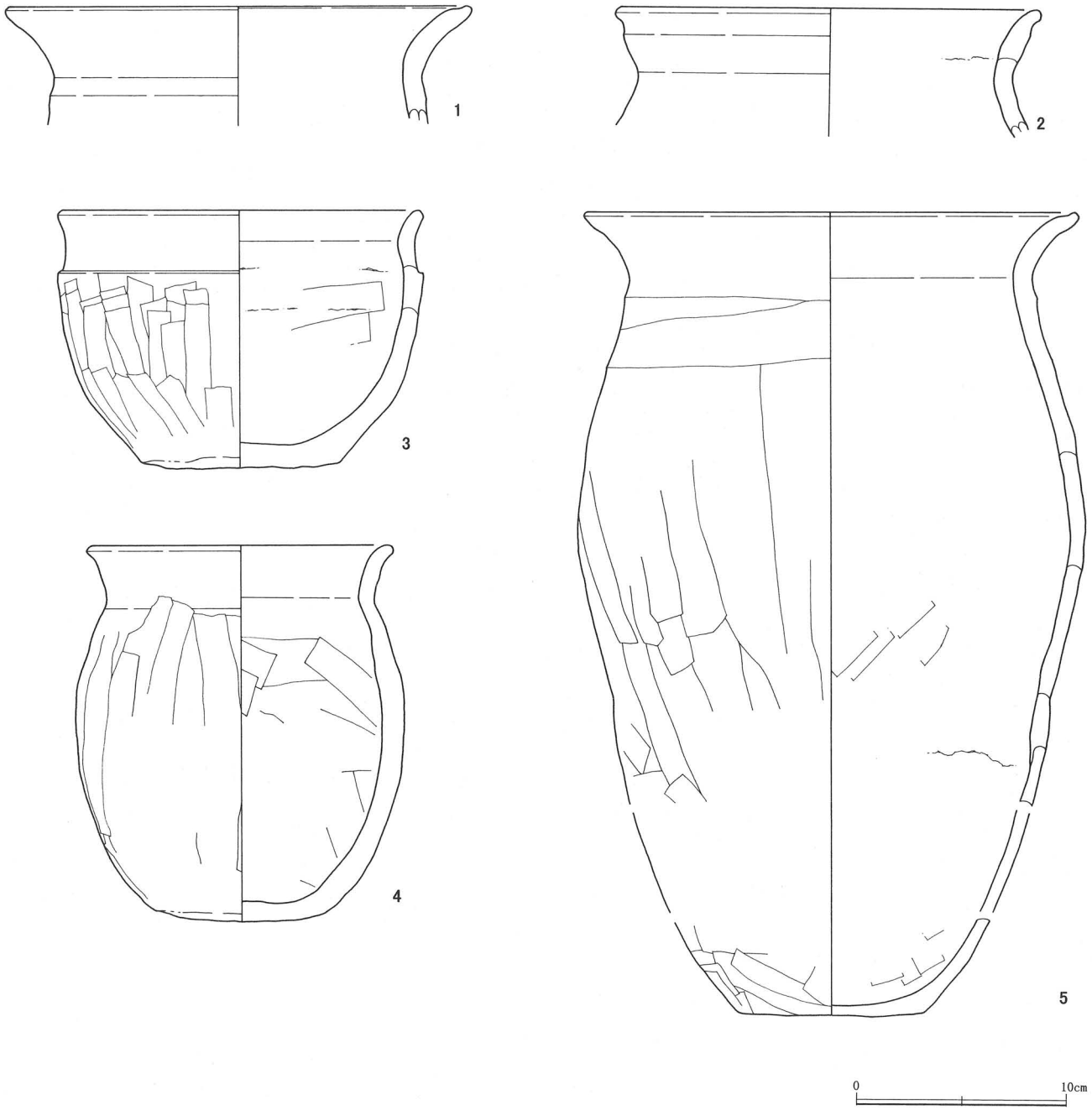
カマドは北壁面に構築され、長さ1.2m・幅1.1mを測る。遺存状況は袖部が崩落して残存していなかったものの、比較的良好である。図のカマド破線範囲は掘り方で灰白色粘土が貼られている。なお、断面図A-A'では東側の切合面は床面に段差が認められないが、カマド西側では断面B-B'にみるように、壁際に10cm程の段差が認められる。これを棚状施設と解すると、住居跡は拡張した結果ではなく単独住居の可能性がある。



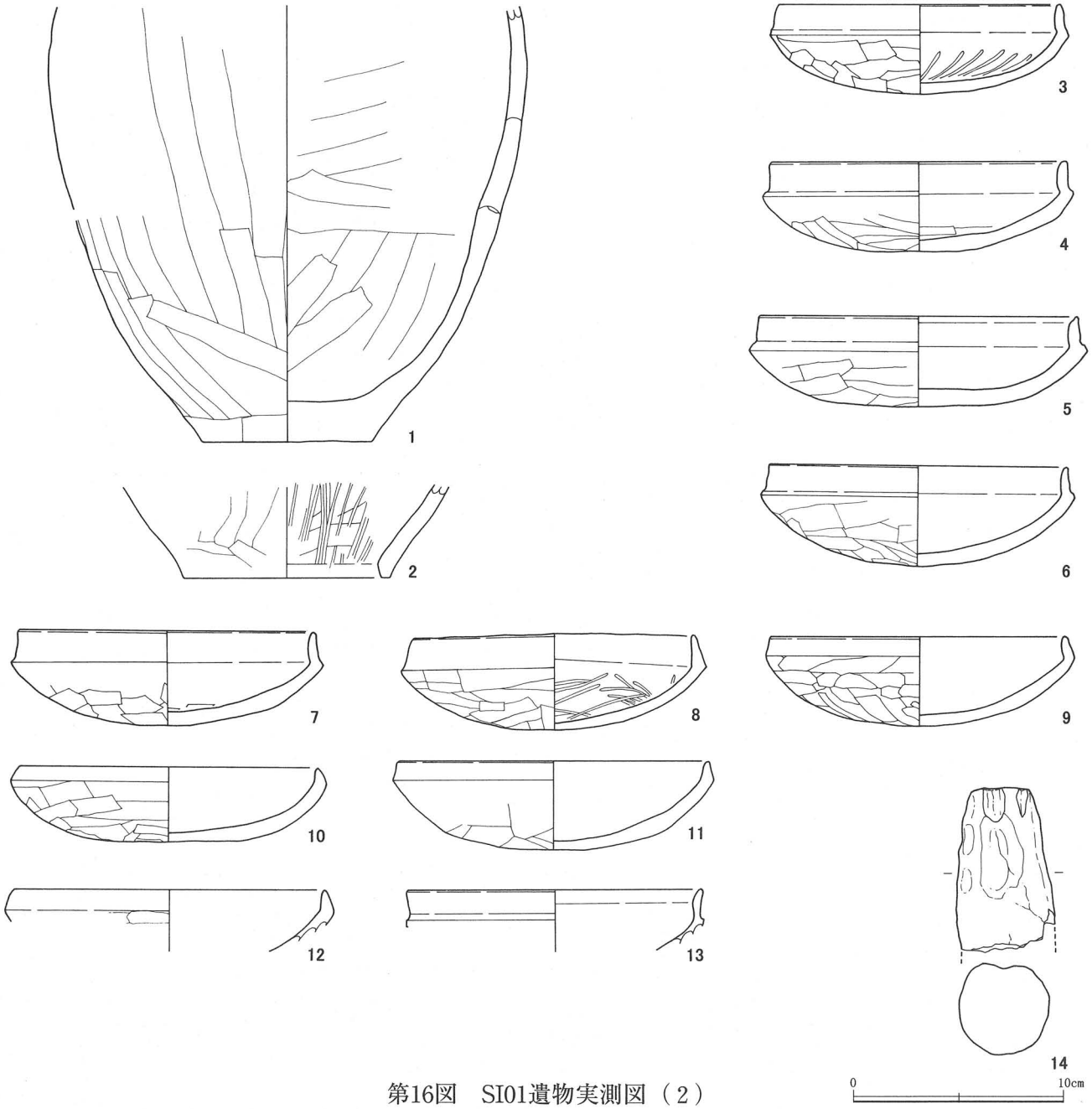
1 褐色土　ローム粒・ブロック微量。粘性・しまり共に弱い。
2 暗褐色土　ローム粒、焼土粒、白色粒少量。粘性・しまり共に弱い。
3 暗褐色土　ローム粒・ブロック微量。粘性・しまりややあり。
4 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック多量。焼土粒・白色粒微量。粘性弱く、しまり強い。

第14図　SI01実測図

1　暗褐色土　φ2～4㎜の白色粒少量。粘性弱く、しまりあり。
2　暗褐色土　1に近似するが、φ5㎜の橙色粒少量。粘性弱く、しまりあり。
3　暗褐色土　2に近似するが、しまりが強まる。
4　灰褐色土　焼土・粘土粒多量、炭化粒少量。粘性・しまりなし。
5　赤褐色土　焼土・粘土粒多量、炭化粒少量。粘性・しまり共に弱い。
6　赤褐色土　焼土・被熱礫少量、ロームブロック多量。粘性弱く、しまりなし。
7　暗褐色土　φ2～5㎜の黒色粒・粘土粒・焼土微量、ロームブロック少量。粘性・しまりあり。
8　暗茶褐色土　焼土・粘土粒少量。粘性あり、しまり弱い。
9　暗褐色土　粘土粒・ロームブロック少量。粘性あり、しまり強い。
10　暗茶褐色土　7に近似するが、焼土は含まれず、ロームブロック少量。粘性・しまりあり。
11　暗褐色土　φ5㎜の黒色粒少量、焼土・粘土粒微量。粘性なく、しまりあり。
12　暗褐色土　焼土・粘土粒少量。粘性・しまりなし。
13　褐色土　12に比べロームブロックが含まれる。粘性・しまりややあり。



第15図　SI01遺物実測図（1）



第16図　SI01遺物実測図（2）

第８表　観察表（６）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SI01	一括	15-1	15-35	土師器	甕	(21.6)	〈5.5〉	-	口縁部横ナデ。	小砂粒・金雲母少量。	普通	にぶい黄褐色
	一括	15-2	15-36	土師器	壺	(19.6)	〈6.0〉	-	口縁部横ナデ。内面粘土継痕あり。	小砂粒・金雲母少量。	普通	にぶい黄褐色
	一括	15-3	15-37	土師器	鉢	(17.2)	(12.1)	(9.4)	口縁部横ナデ。外面は縦位のヘラ削り。底部外面ヘラ削り。内面はヘラナデ。カマド粘土付着。	砂粒・金雲母中量。	普通	外面：明赤褐色 内面：黄褐色
	一括	15-4	15-38	土師器	甕	(14.4)	17.7	8.0	口縁部横ナデ。外面は縦位のヘラ削り。底部外面ヘラ削り。内面はヘラナデ。カマド粘土付着。	砂粒小量。	普通	にぶい黄褐色
	一括	15-5	16-1	土師器	甕	(23.2)	-	(8.4)	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り後、ヘラナデ。内面はヘラナデ。口縁部、胴部に一部黒斑あり。	砂粒小量、金雲母多量。	普通	胴部外面：にぶい黄褐色 口縁部・内面：明黄褐色
	一括	16-1	16-2	土師器	甕		8.0	(20.5)	外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。胴部外面に黒斑あり。	砂粒中量。	普通	にぶい黄褐色

第9表　観察表（7）

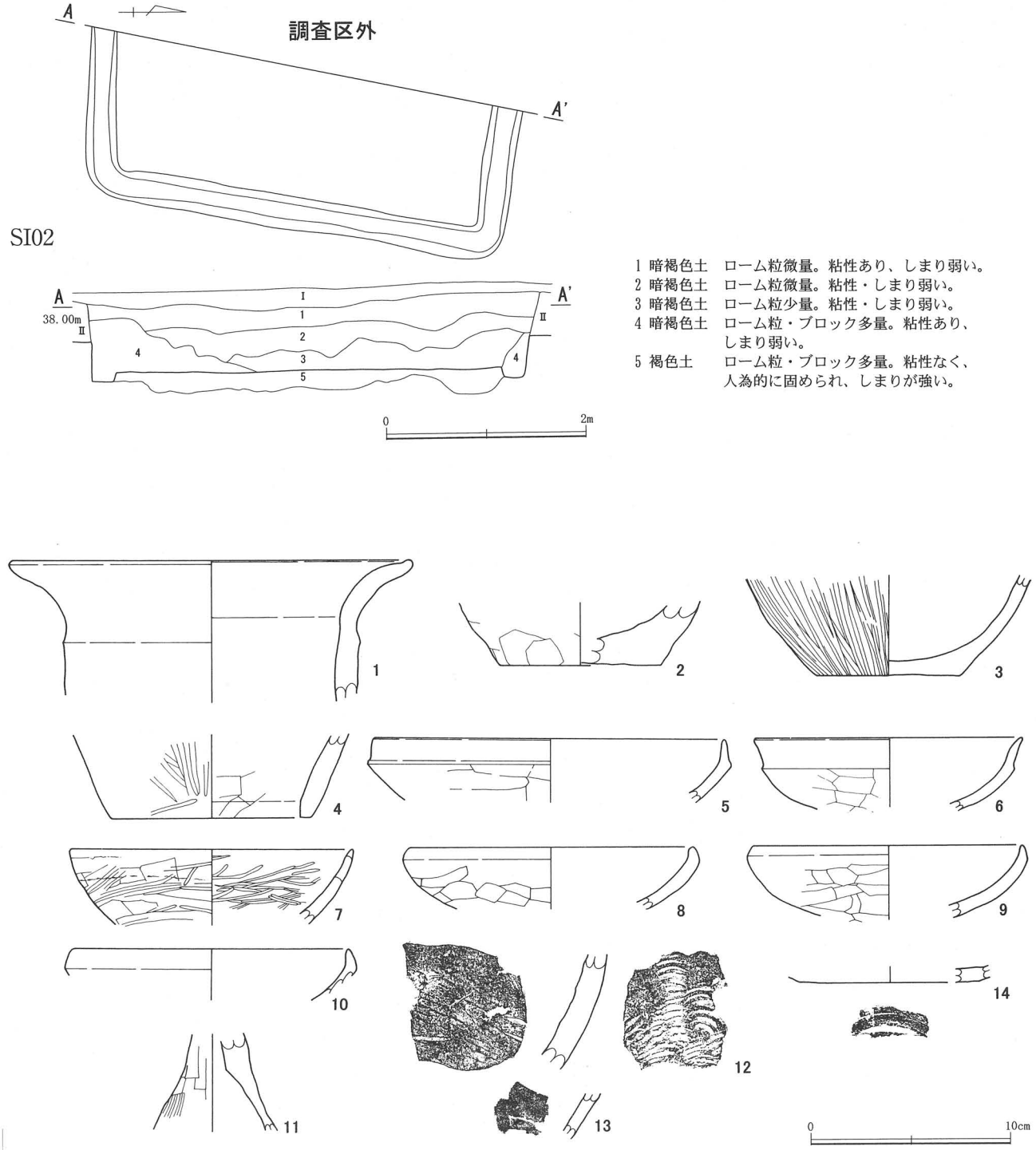
遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SI01	一括	16-2	16-3	土師器	甑	-	〈4.3〉	(9.7)	外面はヘラ削り、内面はヘラ削り後、ヘラ磨き。孔部はヘラ削り。	砂粒少量	普通	明赤褐色
	一括	16-3	16-4	土師器	坏	(13.2)	4.2	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削、内面は放射状暗文。外面底部に黒斑あり。内面黒色処理。	砂粒・金雲母少量。	普通	外面：黄褐色 内面：赤褐色
	一括	16-4	16-5	土師器	坏	14.1	4.2	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。口縁部内外面にタール状物質付着。	砂粒・金雲母中量。	普通	橙色
	一括	16-5	16-6	土師器	坏	(15.0)	4.2	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、底部に一部黒斑あり。内面はナデ。	砂粒中量、長石・赤色スコリア・白色針状物質少量。	普通	明赤褐色
	一括	16-6	16-7	土師器	坏	14.0	4.75	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り。口縁部内外面にタール状物質付着。外面体下部に一部黒斑あり。	砂粒少量・金雲母多量。	普通	橙色
	一括	16-7	16-8	土師器	坏	14.0	4.55	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。体部・口縁部内外面にタール状物質付着。	砂粒中量、金雲母多量。	普通	明黄褐色
	一括	16-8	16-9	土師器	坏	13.25	4.5	-	外面はヘラ削り、内面はヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒少量・金雲母多量。	普通	明褐色
	一括	16-9	16-10	土師器	坏	13.9	4.2	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り。口縁部内外面にタール状物質付着。	小砂粒・金雲母少量。	普通	橙色
	一括	16-10	16-11	土師器	坏	(14.0)	3.5	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はナデ。内面黒色処理。。	砂粒少量・金雲母中量。	普通	外面：明褐色 内面：赤褐色
	一括	16-11	16-12	土師器	坏	(14.5)	4.2	-	口縁部横ナデ。内面黒色処理。外面はヘラ削り。	小砂粒・金雲母少量。	普通	橙色
	一括	16-12	16-13	土師器	坏	(14.5)	〈2.9〉	-	口縁部横ナデ。内面はナデ。内面黒色処理。外面は胴部剥落。	小砂粒・金雲母少量。	普通	橙色
	一括	16-13	16-14	土師器	坏	(14.0)	〈2.9〉	-	口縁部横ナデ。内面はナデ、黒色処理。外面は胴部剥落。	小砂粒・金雲母少量。	普通	橙色
	一括	16-14	16-15	土製品	支脚				高さ（7.7）、幅4.7、厚さ4.3。指頭痕による整形痕が顕著に残る。下端部欠損。	金雲母・黒色スコリア微量。	普通	にぶい黄褐色、一部赤褐色。
SI02	一括	17-1	16-16	土師器	甕	(17.0)	〈7.1〉	-	口縁部横ナデ。口縁部外面黒斑あり。内面ナデ。	金雲母多量	普通	にぶい黄色
	一括	17-2	16-17	土師器	甕	(17.2)	〈3.1〉	(8.0)	外面ヘラ削り。	小砂粒多量、金雲母・黒色スコリア微量	普通	にぶい黄褐色
	一括	17-3	16-18	土師器	甕	(13.5)	〈5.0〉	7.0	外面は胴部ヘラ磨き、底部はナデ後、軽いヘラ磨き。内面はナデ。外面に煤付着。	砂粒中量、金雲母微量	普通	暗褐色 内面：一部赤褐色
	一括	17-4	16-19	土師器	甑	(16.8)	〈4.2〉	(10.0)	外面はヘラ削りの後、磨き、赤色塗彩。内面ヘラ削り。	小砂粒少量	普通	赤褐色
	一括	17-5	16-20	土師器	坏	(13.1)	〈3.7〉	-	口縁部横ナデ。外面は体部ヘラ削り、内面黒色処理。	小砂粒微量。	普通	橙色
	一括	17-6	16-21	土師器	坏	(8.9)	〈13.1〉	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削りの後ナデ。内面は黒色処理。	金雲母少量	普通	にぶい黄褐色
	一括	17-7	16-22	土師器	坏	(19.8)	〈3.7〉	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削りの後、部分的な磨き。内面はヘラ磨き。	赤色スコリア。金雲母微量。	普通	外面：灰黄褐色 内面：橙色
	一括	17-8	16-23	土師器	坏	-	〈3.1〉	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はナデ。	小砂粒少量、金雲母微量。	普通	外面：赤褐色 内面：暗褐色
	一括	17-9	16-24	土師器	坏	(13.3)	〈3.6〉	-	口縁部横ナデ。内面はナデ、黒色処理。外面はヘラ削り。	小砂粒・金雲母微量	普通	赤褐色
	一括	17-10	16-25	土師器	坏	-	〈2.55〉	-	口縁部横ナデ。外面は剥落している。内面黒色処理。	金雲母少量	普通	橙色
	一括	17-11	16-26	土師器	高坏	-	〈4.8〉	-	外面ヘラナデ、一部ヘラ磨き。黒斑あり。内面指ナデ。	小砂粒少量、金雲母微量	普通	にぶい黄橙色
	一括	17-12	17-1	須恵器	甕	-	-	-	内面は同心円の当て具痕、外面は平行叩き目後ナデ。自然釉付着。	大砂粒微量、小砂粒少量	普通	暗灰色
	一括	17-13	17-2	須恵器	甕	-	-	-	外面横ナデ。	砂粒小量	普通	白色
	一括	17-14	17-3	須恵器	坏	-	〈0.8〉	-	底部切り離し後、ヘラナデ。	小砂粒小量。	普通	灰色

SI02（第17図）

調査区南側、H－3グリッドに位置し、標高は37.7mを測る。本遺構の西側は調査区外となる為、平面形は断言できないが方形を呈すると思われる。調査範囲内での規模は4.3×(1.6) mを測り、主軸方向は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは30cmを測る。床面はローム層中に貼床が構築され、平坦で堅く踏み締められている。周溝は幅22～30cm・深さ10cmで調査範囲内では全周する。

カマドないし炉、ピットは検出されなかった。

遺物は覆土下層から5点以外は上層から出土したものである。



第17図　SI02実測図・遺物実測図

SI06（第18・19図）

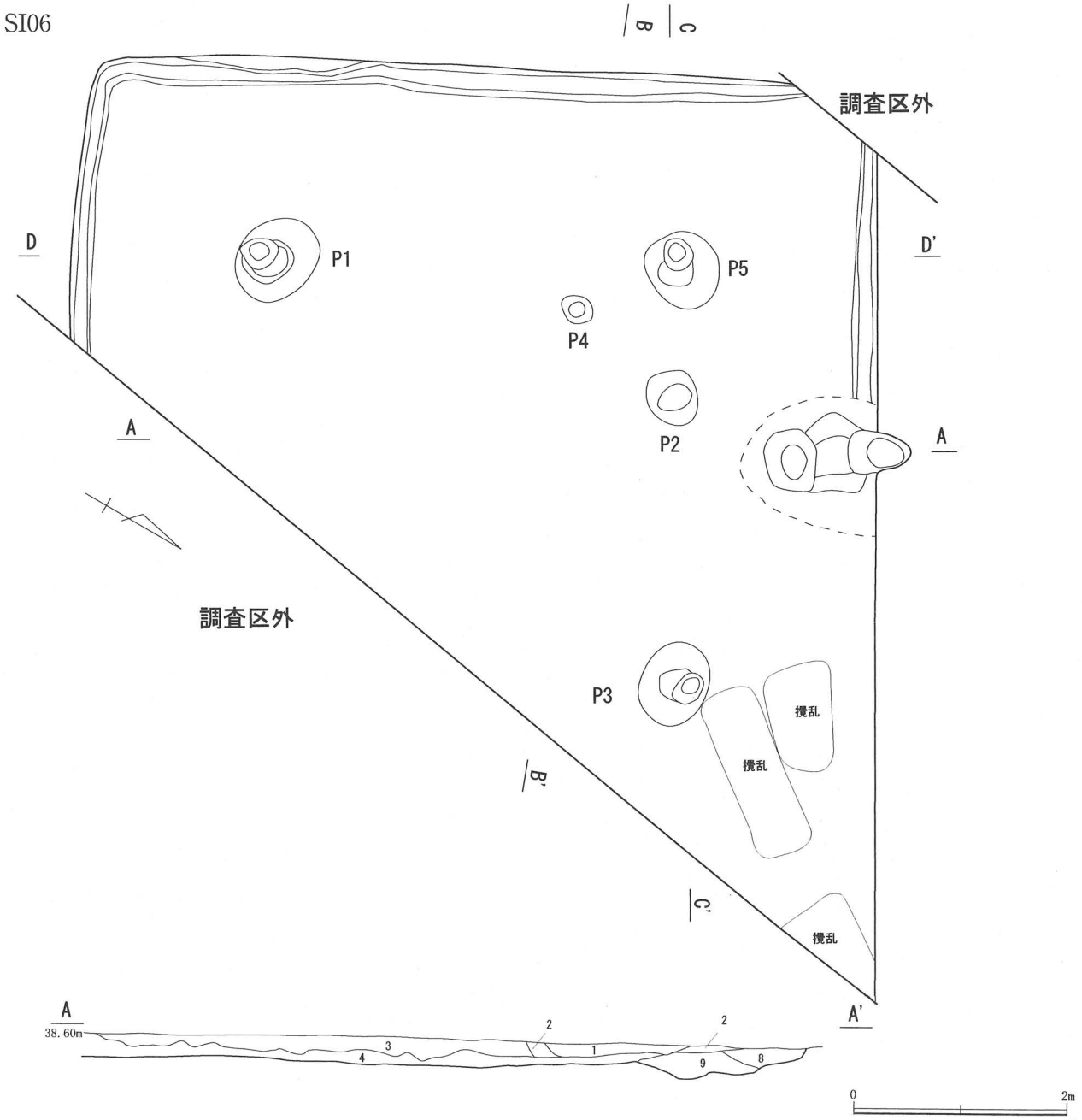
調査区北側、P－5グリッドを中心に位置し、標高は38.3mを測る。東西両側は調査区外となる。P－5グリッド周辺は後世の開発によりローム層上面まで削平されていた為、本遺構の掘込は浅い。特に北東側ではプラン確認が不可能であった。

平面形は方形を呈すると思われ、調査範囲内での規模は7.3×(6.6) mを測る。主軸方向はN－25°－Wをとる。床面はローム層中に構築され、平坦である。周溝は幅12～24cm・深さ６～10cmで住居面半部で検出されている。

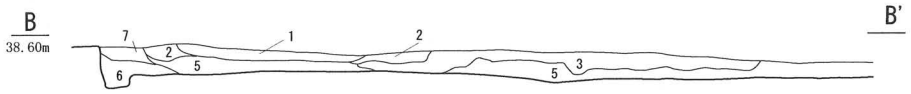
ピットは５個検出された。主柱穴はP1・3・5で、いずれも深さ１m前後あり、しっかりしたものである。P2はすり鉢状を呈する浅いピットである。

遺物は覆土の遺存が悪かったために、覆土内には遺物が少ない結果となった。床直上面・カマド周辺部・カマド崩落土中からややまとまって出土した。

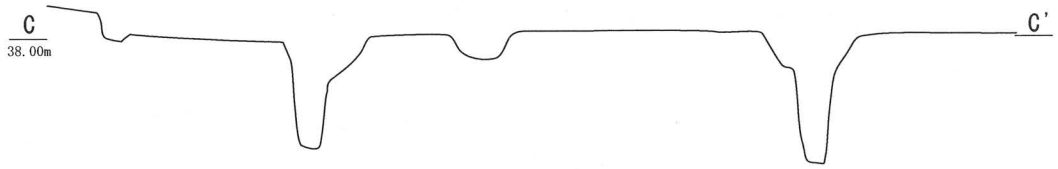
カマドは北壁面に構築され、長さ1.2m、幅1.1mを測るが、遺存状況は悪い。

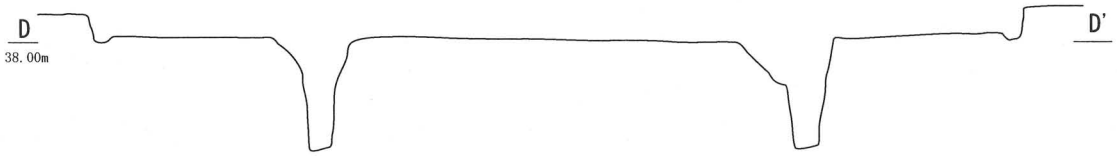


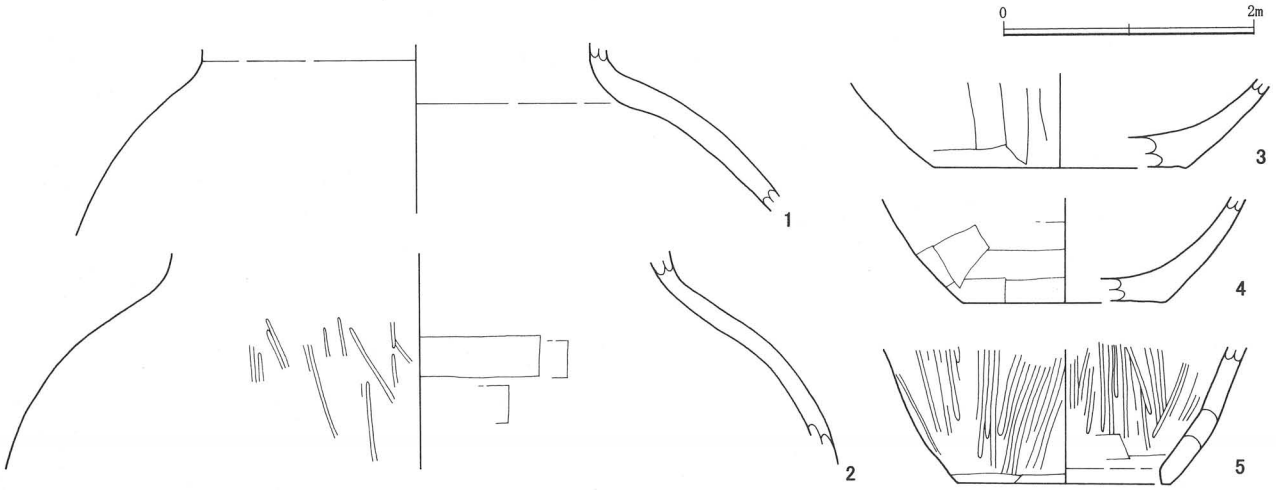
第18図　SI06実測図（１）



1 暗褐色土　ローム粒少量。粘性なく、しまり非常に強い。(SW01 覆土)
2 褐色土　ローム粒少量。粘性あり、しまり強い。
3 褐色土　ローム粒・ブロック少量。粘性あり、しまり弱い。
4 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック多量。粘性あり、しまり弱い。
5 暗褐色土　ローム粒・ブロック少量。粘性あり、しまり強い。
6 黒褐色土　ローム粒・ブロック少量。粘性あり、しまり弱い。
7 暗黄褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化粒微量。粘性なく、しまりあり。
8 黄灰色土　焼土粒・ブロック、白色粘土粒・ブロック多量。粘性なく、しまり強い。(竈覆土)
9 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック、焼土粒・ブロック少量。粘性・しまりあり。(竈覆土)



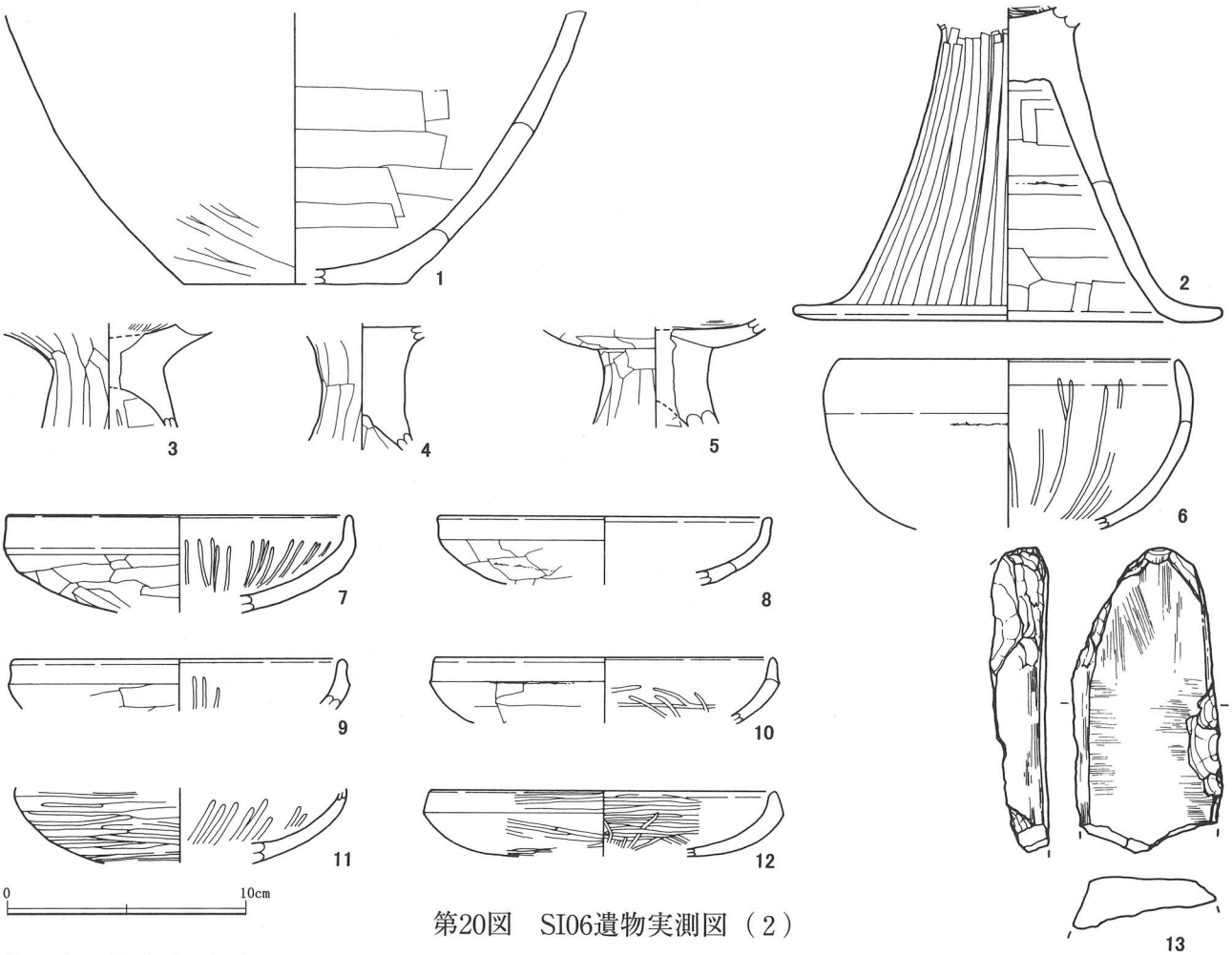




第19図　SI06実測図（2）・遺物実測図（1）

第10表　観察表（8）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SI06	一括	19-1	17-4	土師器	壺	-	-	-	内外面ナデ調整。	砂粒やや多量。	普通	外面：黒色、内面：にぶい黄橙色
	一括	19-2	17-5	土師器	壺	-			外面ナデ後、ヘラ磨き。内面はヘラナデ。	砂粒中量、金雲母多量。	普通	明黄褐色
	一括	19-3	17-6	土師器	壺	-	〈3.3〉	(10.0)	外面は胴部・底部がヘラ削り、内面はナデ。	砂粒中量、金雲母少量。	普通	灰黄褐色
	一括	19-4	17-7	土師器	壺	-	〈4.1〉	(8.0)	外面は胴部・底部がヘラ削り、内面はナデ。	砂粒中量。	普通	暗褐色
	一括	19-5	17-8	土師器	甑	-	〈5.3〉	(8.4)	口縁部横方向ヘラ削り。胴部内外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。	砂粒少量。	普通	外面：にぶい黄褐色、内面：橙色



第20図　SI06遺物実測図（2）

第11表　観察表（9）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SI06	一括	20-1	17-9	土師器	壺	-	〈11.3〉	(9.2)	外面はヘラ磨き、内面は横位のヘラナデ。	砂粒中量、金雲母多量。	普通	明褐色
	一括	20-2	17-10	土師器	高坏	-	〈13.0〉	(17.8)	坏部内面はヘラ磨き後、黒色塗彩。脚部外面は縦位のヘラ磨き、一部黒斑あり。内面はヘラ削り。裾部横ナデ。	大砂粒微量、砂粒少量、石英少量。	普通	外面：にぶい黄褐色 内面：明赤褐色
	一括	20-3	17-11	土師器	高坏	-	〈4.3〉	-	坏部外面は縦位のヘラ削り後磨き。輪積痕あり。内面は放射状暗文、黒色処理。	砂粒・金雲母微量	普通	にぶい黄褐色
	一括	20-4	17-12	土師器	高坏	-	〈5.0〉	-	坏部外面は縦方向のヘラ削り、内面はヘラ磨き。脚部は内面ヘラ削り、	砂粒中量・長石少量	普通	明黄褐色
	一括	20-5	17-13	土師器	高坏	-	〈4.0〉	-	坏部外面はヘラ削り、内面ヘラ磨き。脚部内面はヘラ削り。	砂粒中量・赤色スコリア少量	普通	にぶい黄橙色
	一括	20-6	17-14	土師器	埦	(14.2)	〈7.0〉	-	口縁部横ナデ。内面は放射状暗文、粘土継痕あり。外面はヘラ削りだが磨耗し、粘土継痕あり。	砂粒少量。	普通	にぶい黄橙色
	一括	20-7	17-15	土師器	坏	(14.4)	〈4.0〉	-	口縁部横ナデ。内面は放射状暗文、黒斑あり。外面はヘラ削り。	砂粒少量。	普通	暗褐色
	一括	20-8	17-16	土師器	坏	(13.8)	〈2.8〉	-	口縁部横ナデ。内面はナデ、黒色処理？外面はヘラ削り。輪積痕あり。	砂粒少量。	普通	明赤褐色
	一括	20-9	17-17	土師器	坏	(14.0)	〈2.1〉	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はヘラ磨き。	砂粒・赤色スコリア少量	普通	明赤褐色
	一括	20-10	17-18	土師器	坏	(14.0)	〈2.7〉	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はヘラ磨き。口縁部にタール状物質付着。	砂粒・金雲母少量	普通	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色
	一括	20-11	17-19	土師器	坏	-	〈3.1〉	-	外面はヘラ削りの後、横位のヘラ磨き。内面は磨き後、放射状暗文、赤色塗彩。	砂粒少量、金雲母・石英多量。	普通	にぶい褐色
	一括	20-12	17-20	土師器	坏	(14.2)	〈2.7〉	-	内外面ヘラ磨き。輪積痕あり。	砂粒・金雲母少量	普通	明赤褐色
	一括	20-13	17-21	石器	砥石	-	-	-	高さ12.6cm、幅6.2cm、厚さ2.15cm。裏面は剥落、下端部欠損。粘板岩。			

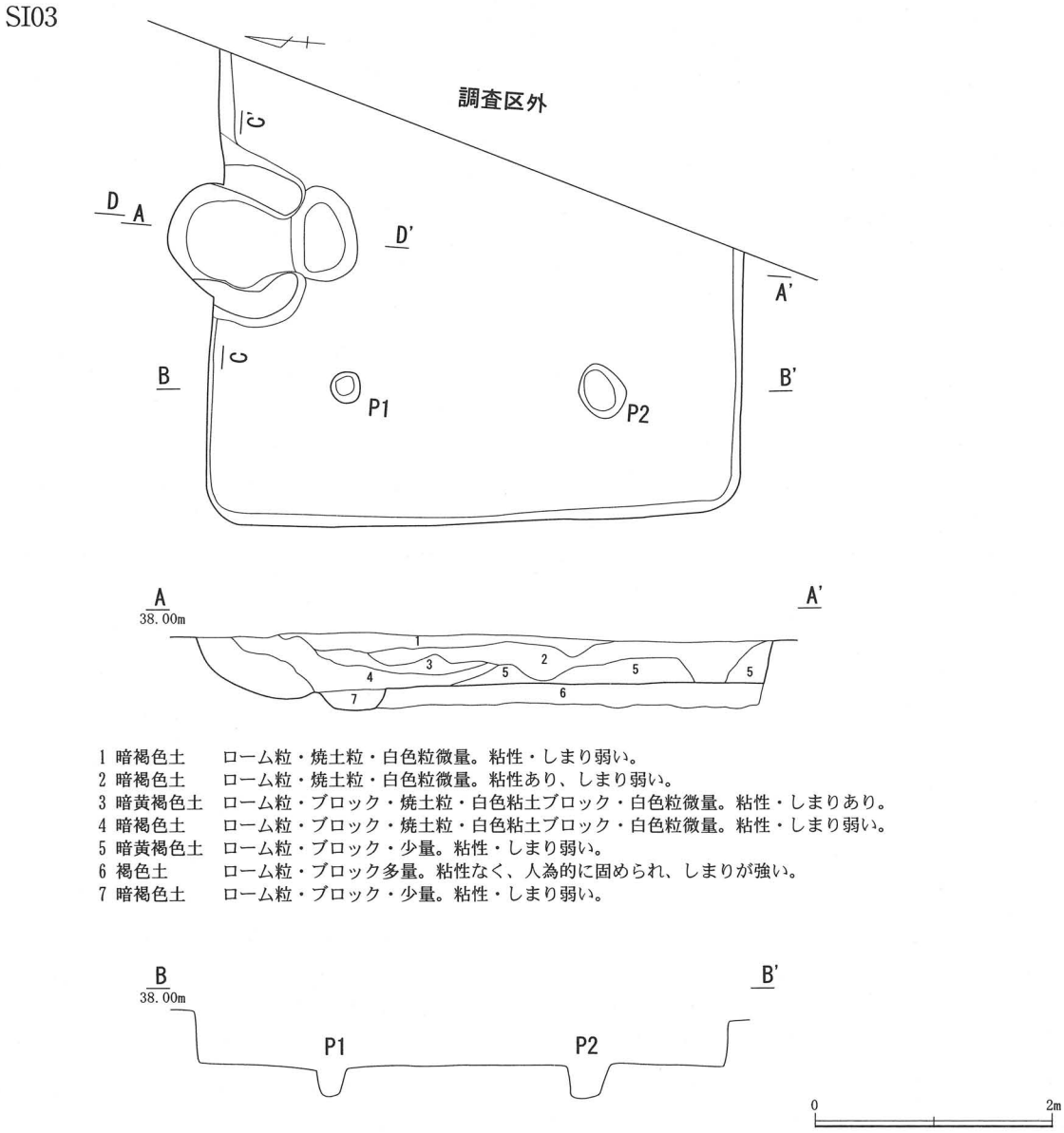
4　古代

SI03（第21･22図）

調査区南側、I－4グリッドを中心に位置し、標高は37.8mを測る。本遺構の東側は調査区外となる為、平面形は断言できないが方形を呈すると思われる。調査範囲内での規模は4.4×3.9mを測り、主軸方向はN－8°－Wをとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは30cmを測る。床面はローム層中に貼床が構築され、平坦で堅く踏み締められている。周溝はない。ピットは2個検出され、いずれも主柱穴と思われる。

遺物は床面・カマド周辺および覆土上層から出土した。多くは覆土上層から中層にかけての出土である。

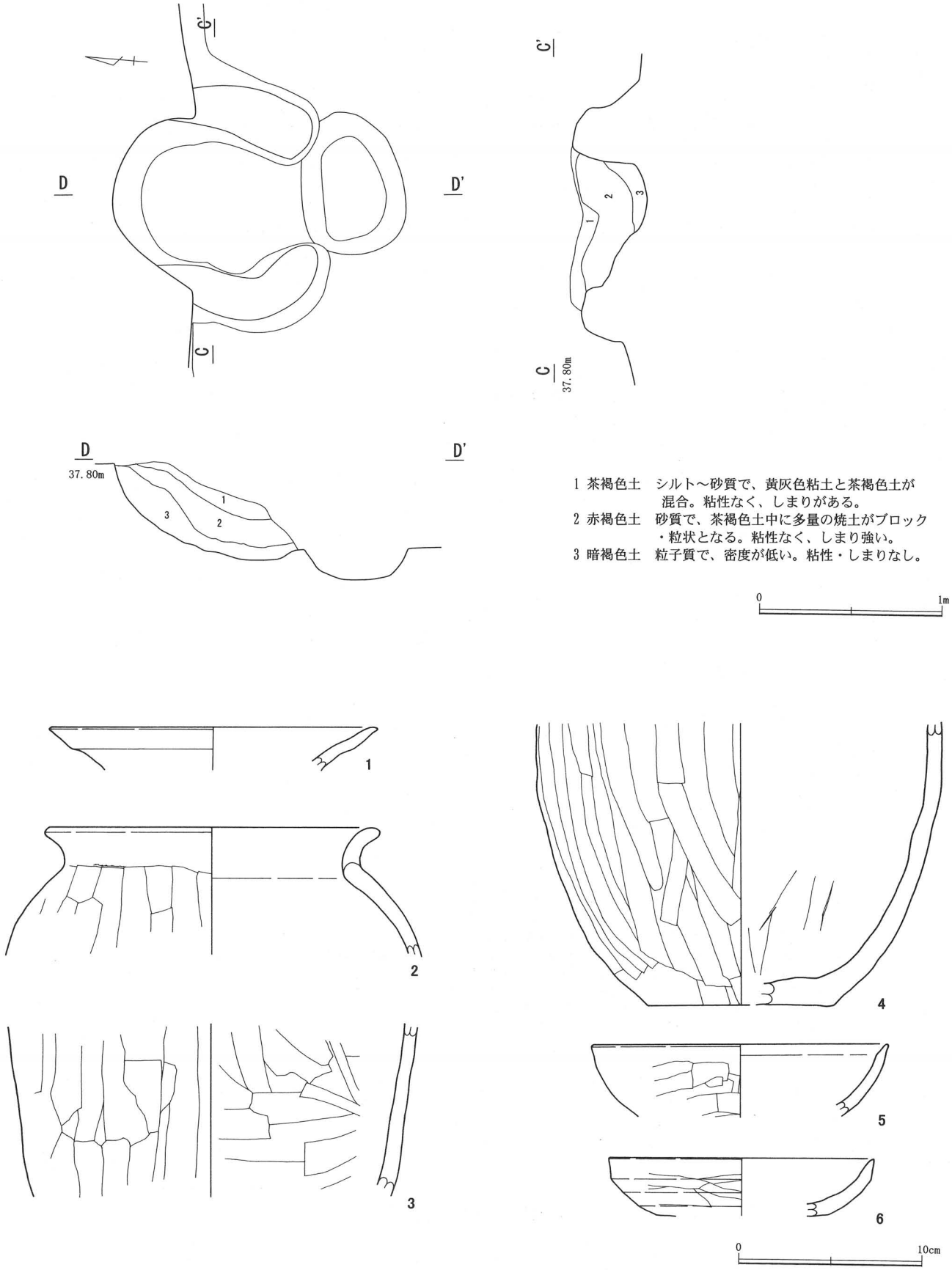
カマドは北壁面に構築され、長さ1.0m、幅1.3mを測る。遺存状況は良好である。



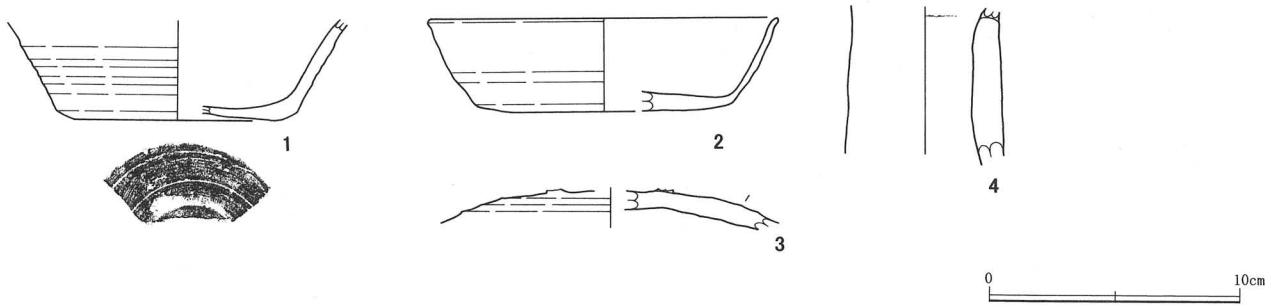
1 暗褐色土　ローム粒・焼土粒・白色粒微量。粘性・しまり弱い。
2 暗褐色土　ローム粒・焼土粒・白色粒微量。粘性あり、しまり弱い。
3 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック・焼土粒・白色粘土ブロック・白色粒微量。粘性・しまりあり。
4 暗褐色土　ローム粒・ブロック・焼土粒・白色粘土ブロック・白色粒微量。粘性・しまり弱い。
5 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック・少量。粘性・しまり弱い。
6 褐色土　ローム粒・ブロック多量。粘性なく、人為的に固められ、しまりが強い。
7 暗褐色土　ローム粒・ブロック・少量。粘性・しまり弱い。

第21図　SI03実測図

SI03　カマド



第22図　SI03実測図・遺物実測図（1）



第23図　SI03遺物実測図（２）

第12表　観察表（10）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SI03	一括	22-1	17-22	土師器	甕	(17.6)	〈2.3〉	-	口縁部は横ナデ。	金雲母微量	普通	暗褐色
	一括	22-2	17-23	土師器	甕	(18.0)	〈6.9〉	-	口縁部横ナデ。内面はナデ、外面は縦位のヘラ削り。	砂粒中量	普通	橙色
	一括	22-3	17-24	土師器	甕	-	-	-	内面はヘラナデ、黒色処理。外面は縦位のヘラ削り。	砂粒少量、金雲母多量	普通	明褐色
	一括	22-4	17-25	土師器	甕	-	〈15.2〉	10.0	外面胴部・底部は縦位のヘラ削り、外面に煤付着。内面はヘラナデ	大砂粒微量、中砂粒・金雲母中量	普通	内面：橙色、外面：にぶい黄褐色
	一括	22-5	18-1	土師器	坏	(16.0)	〈3.75〉	-	口縁部は横ナデ、黒色物質付着。内面はナデ、外面は横位のヘラ削り。	微砂粒微量	普通	にぶい黄褐色
	一括	22-6	18-2	土師器	坏	(14.2)	〈3.1〉	-	口縁部横ナデ。外面体部から底部はヘラ削り。	小砂粒少量	普通	橙色
	一括	23-1	18-3	須恵器	坏	-	〈4.1〉	(8.0)	底部ヘラ切り。外面体下部から底部は回転ヘラ削り。外面はロクロ目を明瞭に残す。内面はナデ	中砂粒微量、小砂粒少量、赤色スコリア少量。	普通	灰黄色
	カマド内	23-2	18-4	須恵器	坏	13.5	3.7	10.1	ヘラ切り後、外面底部は回転ヘラ削り。体部はロクロ目をやや残す。内面口縁部から底部は横ナデ、底部にタール状物質付着。	小砂粒・金雲母少量	不良	灰黄色
	一括	23-3	18-5	須恵器	蓋	-	〈1.65〉	-	天井部回転ヘラ削り。紐貼付け。	微砂粒微量	不良	にぶい橙色
	一括	23-4	18-6	須恵器	壺	-	〈6.2〉	-	内面に粘土継痕あり。内外面自然釉付着。	小砂粒少量	普通	灰白色

SB01（第24図）

調査区やや北側、N－5グリッド周辺に位置し、標高38.7mを測る。全容は不明であるが、２間×３間の側柱式掘立柱建物と想定され、主軸方向はN－94°－Wをとる。

柱穴は11個検出し、調査範囲内での規模は梁行4.3m・桁行5.4m、柱間寸法は梁行2.2m・桁行1.7～1.9mである。柱穴形態は径35～45cmの不整円形を呈し、深さ30～40cmのものが多いがP5・7は50cmを測る。

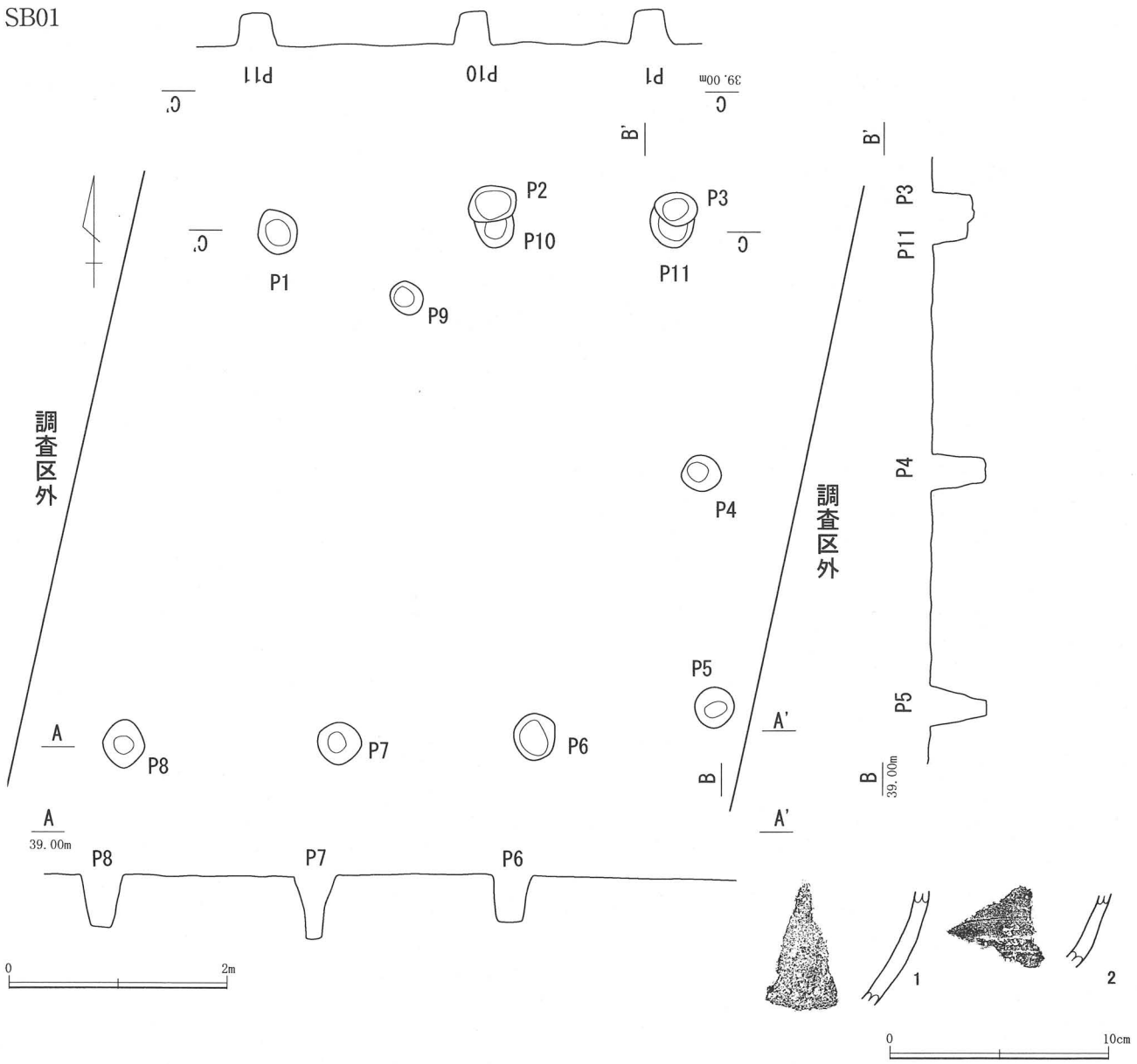
遺物は土師器、須恵器片でP2から出土した。

SB02（第25図）

調査区北側、O－5グリッドを中心に位置し、標高38.8mを測る。全容は不明であるが、２間×３間の側柱式掘立柱建物と想定され、主軸方向はN－103°－Wをとる。

柱穴は17個検出し、調査範囲内での規模は梁行4.0m・桁行5.4m、柱間寸法は梁行2.2m・桁行1.7～1.9mである。柱穴形態は径35～50cmの不整円形を呈し、深さ30～40cmのものが多いがP5・8は60cm前後を測る。

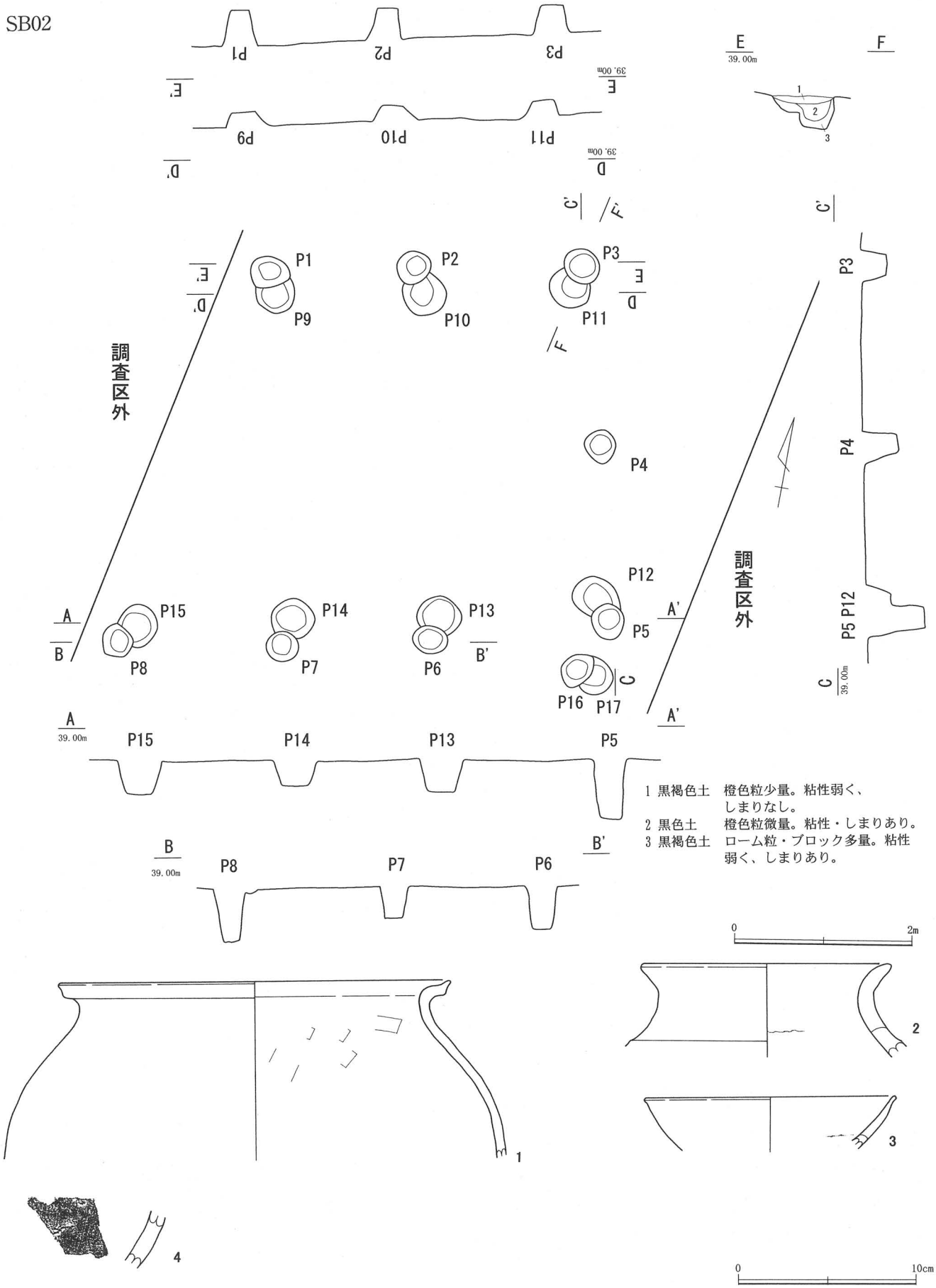
遺物は土師器甕、須恵器甕などでP1・4・７から出土した。



第24図　SB01実測図・遺物実測図

第13表　観察表（11）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SB01	一括	24-1	18-7	土師器	甕	-	-	-	外面胴部はヘラ削りの後ナデ。	小砂粒・金雲母少量	普通	外面：黒色 内面：暗褐色
	一括	24-2	18-8	須恵器	甕	-	-	-	胴部ナデ。内外面自然釉付着？	小砂粒少量	普通	灰褐色



第25図　SB02実測図・遺物実測図

第14表　観察表（12）

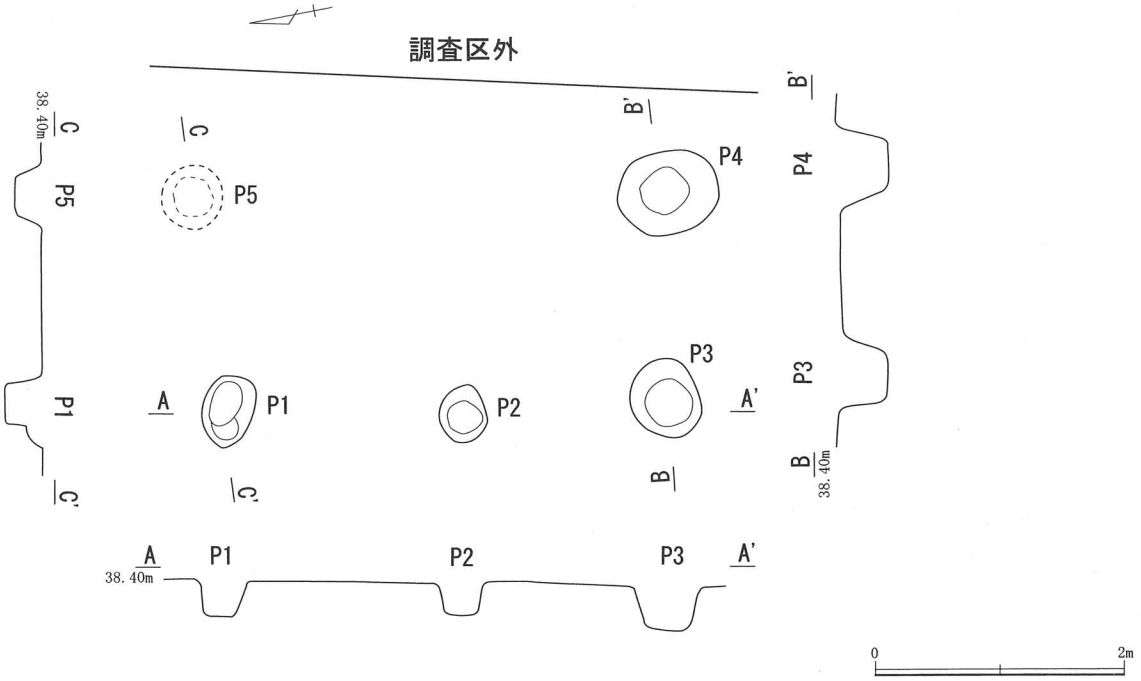
遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SB02	一括	25-1	18-9	須恵器	甕	(21.4)	〈10.05〉	-	口縁部横ナデ。胴部外面はナデ、内面はヘラナデ。	砂粒・金雲母少量	普通	暗褐色
	一括	25-2	18-10	土師器	甕	(13.7)	〈5.2〉	-	口縁部横ナデ。内面粘土継痕あり。	大砂粒微量、小砂粒少量	普通	外面：褐色、内面：赤褐色
	一括	25-3	18-11	須恵器	坏	(13.8)	〈2.95〉	-	内外面口縁部から体部は横ナデ。口縁部に降灰物付着。内面に粘土継痕あり。	小砂粒中量。	普通	黒褐色
	一括	25-4	18-12	須恵器	甕	-	-	-	外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。	小砂粒・黒雲母少量	普通	外面：黒褐色、内面：暗褐色

SB03（第26図）

調査区中央、L－4グリッドに位置し、標高38.3mを測る。全容は不明であるが、おそらく２間×２間の側柱式掘立柱建物と予想される。

柱穴は４本検出し、調査範囲内での規模は梁行3.6m・桁行1.8m、柱間寸法は梁行1.8m・桁行1.7～1.8mである。柱穴形態は径45～60cmの不整円形を呈し、深さ30～40cmを測る。

出土遺物はない。

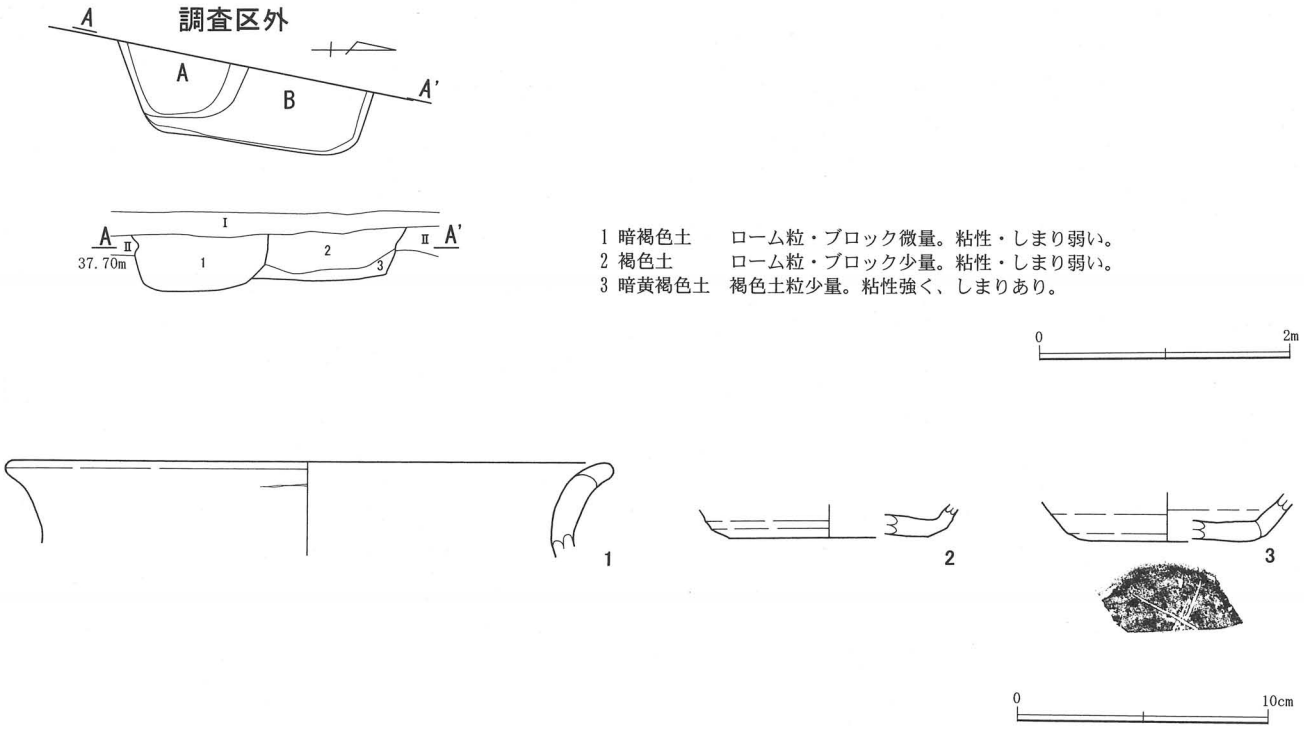


第26図　SB03遺物実測図

5　その他

SX01（第27図）

調査区南側、G－3グリッドに位置し、標高は37.8mを測る。２つの土坑からなり、西側は調査区外で全容は把握できないが、調査区内ではAがBを切っていることで新旧関係が理解できる。断定はできないが、Aは径0.5mの不整円形を、Bは長軸2.15m・短軸（0.6）mの楕円形を呈すると考えられる。



第27図　SX01実測図・遺物実測図

第15表　観察表（13）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特　　徴	胎土	焼成	色調
SX01	一括	27-1	18-13	土師器	甕	(24.0)	〈3.7〉	-	口縁部横ナデ。	砂粒中量	普通	にぶい橙色
	一括	27-2	18-14	須恵器	坏	-	〈1.35〉	(7.8)	底部手持ちヘラ削り。	砂粒少量	普通	灰色
	一括	27-3	18-15	須恵器	坏	-	〈1.5〉	(7.0)	底部外周から底面ヘラ削り。底部外面にヘラ記号「×」。	砂粒・黒色スコリア中量	普通	灰色

Ⅲ　まとめ

平成16年度における、小原遺跡の本調査時に検出された遺構や遺物について、その概要を述べてきた。

調査区内から検出された遺構には竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡３棟、ピット群１基、土抗３基、溝状遺構１条などがある。これを時代別にみると次のようである。

まず、縄文時代の遺構には、土抗３基（SK01～03）がある。いずれも伴出遺物はないが、昨年度に調査した南側調査区でも同形態の土坑を検出しており、その内の１基より加曽利E2式土器が出土している。覆土も同様であることから、これらは縄文時代中期後半の遺構であろうと判断した。するとこれらの土坑群はいずれも台地の縁辺付近に検出されており、調査区南側の低地をはさみ、南北の緩傾斜面には多数の土坑が存在するものと思われる。

弥生時代には、竪穴住居跡２軒（SI04・05）、ピット群１基（PG01）、溝状遺構１条（SD01）がある。古墳時代から古代には、竪穴住居跡４軒、掘立柱建物跡３棟などがある。さらに中世以降の溝状遺構などがある。

さて、調査範囲がきわめて限られている現状において、当地区周辺の歴史的様相を明らかにすることは困難であるが、これまで３年次にわたる調査成果を踏まえながら、資料的にややまとまっている弥生時代および古墳時代以降古代について簡単に考察し、まとめとしたい。

１　弥生時代

弥生時代は、住居跡２軒、溝状遺構１本、ピット群１基を検出した。これらの遺構は、出土遺物・覆土からいずれも弥生後期後半期に属するものである。

茨城県遺跡地図を参照すると、涸沼前川上流域では弥生時代の遺跡が極めて少なく、『友部町史』でも町内の弥生遺跡は８遺跡を数えるにすぎない（友部町1990）。しかしながら、友部町を含め涸沼前川上流域の地形は、小支谷が多く弥生後期の遺跡形成に適した立地景観から、遺跡の存在が発見される可能性が指摘されていた（川又1999）。近郊農村地帯のために、これまでは開発に伴う発掘調査があまり実施されてこなかった。このため、遺跡分布の実態がはっきりしなかった気味もある。

こうした見通しを裏付けるように、近年になって、涸沼前川を望む台地上に弥生後期集落の存在が浮かび上がってきた。すなわちこの度の調査に連動する、小原地区（南区）の三本松遺跡（2003）および小原地区（北区）小原遺跡（2004）の調査において、弥生時代後期の集落の一部が確認されていた。この両調査地区は、同じ台地上に連なり近接していることから、この台地一帯に大規模な集落が営まれていたであろうと想定されている（服部2004）。遺跡地図上では三本松遺跡、小原遺跡、一本松古墳群に分かれているが、本来は３遺跡が統合されて広大な範囲に線引きされるのであろう。

本年度の小原遺跡の調査も、道路幅に限られるトレンチ調査のために集落範囲のごく一部を発掘したにすぎないが、上記した遺構・遺物の発見があり、涸沼前川上流域における弥生文化の様相解明に、一定の成果を得ることができたといえよう。

（１）遺構について

住居跡は未調査部分を残すものの、10ｍの間隔を置いて２軒が検出された。

住居跡の平面形は隅丸長方形ないし隅丸方形を呈するもので、主軸はN－30°－WからN－53°－Wとほぼ一定方向を指す。住居規模はSI05が18㎡前後、SI02も概ね20㎡以下と想定される。SI05の炉跡は住居の中央やや北側に在る地床炉で、住居主軸にそって楕円形をなす。後期後半の当地域には炉石が伴う割合が高いとされるが、炉石はなかった。

第16表　住居跡規模一覧表

遺跡名	遺構名	規模（m）		面積（㎡）	主軸方向	住居形態	炉形態
小原（2004）	SI - 2	(5.0)	(3.5)	(17.50)	N-60°-W	隅丸方形？	楕円形？
小原（2005）	SI 04	現3.6	3.3	(11.88)	N-30°-W	隅丸方形？	不明
〃	SI 05	(4.8)	3.8	(18.24)	N-53°-W	隅丸長方形	楕円形
三本松（2003）	SI-45	5.0	3.9	19.50	N-60°-W	隅丸長方形	楕円形
〃	SI - 5	5.5	4.35	23.93	N-50°-W	隅丸長方形	楕円形
〃	SI-66	(6.0)	4.0	(24.00)	N-60°-W	長方形？	楕円形
〃	SI-28	5.8	4.2	24.36	N-40°-W	隅丸長方形	楕円形
〃	SI-33	5.9	4.5	26.55	N-70°-W	隅丸長方形	不明
〃	SI-74	6.9	4.0	27.60	N-70°-W	長方形	楕円形
〃	SI-86	6.4	4.5	28.80	N-30°-W	長方形	楕円形
〃	SI-62	5.8	5.0	29.00	N-50°-W	長方形	楕円形
〃	SI-79	5.5	5.5	30.25	N-50°-W	方形	不明
〃	SI-54	6.7	5.1	34.17	N-30°-E	長方形	楕円形
〃	SI-77	6.4	5.8	37.12	N-55°-E	長方形	楕円形
〃	SI-44	7.5	5.3	39.75	N-65°-W	隅丸長方形	不明
〃	SI-42	2.5	現4.1	(10.25)	N-65°-W	長方形？	不明
〃	SI-78	現1.7	3.7	(6.29)	N-50°-W	不明	不明
〃	SI-80	現2.4	4.4	(10.56)	N-60°-W	長方形？	不明

※（　）内の数値は推定値

住居跡は、一昨年度に調査した三本松遺跡で15軒、昨年度に調査した小原遺跡で１軒、そして今年度の調査で２軒が検出され、計18軒を数えるに至った。遺跡範囲における調査面積がごく小さいものであることを勘案すると、本遺跡は、県下でも有数の規模をもつ弥生時代集落になるのかも知れない。それはともかく、これまでに検出された住居跡を観察表にまとめると、次の傾向がうかがえる。

① 住居跡は、主軸をN－30°－WからN－70°－W方向にとるものが多数である。

② 住居形態には、隅丸方形・隅丸長方形・長方形が見られる。

③ 住居跡の面積規模は20㎡前後・25～30㎡前後・35㎡前後の３群に大別される。

この情報を涸沼前川流域における十王台式期の遺跡（矢倉遺跡・大畑遺跡）の事例と比較してみたい。

両遺跡は涸沼前川の下流域で、川を挟んで直線距離約600ｍの位置に対峙しており、十王台式期の住居跡が矢倉遺跡で25軒・大畑遺跡で10軒ほど検出されている。

形態的には隅丸方形・隅丸長方形が主体を占める。規模は矢倉遺跡が10～40㎡前後・大畑遺跡は20～45㎡前後で、双方の遺跡に大小の差を見られるが、これには住居数の差異によるのかも知れない。小原遺跡・三本松遺跡で大別した３群もこの範疇であり、当期における類例と適応する。

ところで、海老澤稔氏はかつて後期の住居形態・規模から各時期の特徴をまとめて、１～５期に大別し（1989・1993）[註1]、さらに、「規模別の割合では各時期において30㎡以上の大型のもの、20～30㎡の中型のもの、20㎡以下の小型のものが組み合わさり、３～５軒ぐらいの小グループを構成している。大型住居はそのグループの中心世帯の可能性がある」という。これに依拠するならば、本遺跡の住居跡群も集落内においてグループを構成する単位の一部をなしていると言えるであろう。

SI05からは主柱穴が４本検出されたが、SI04から検出された２個のピットの方は、深度や検出位置などから主柱穴とはいい難い。小型住居には主柱穴が皆無なものや１～２個のものもあり、住居構造が異なるものと思われる。仮に２ヶ所のピットが出入口施設に関連するものであるならば、主軸線上の東側に配されるSI05とは違い、短軸線上の南側に位置する。海老澤氏によれば、このような短軸線上に位置する例は５期後半になって出現したとされる。

ピット群として報告したPG01は、報文中に記したように住居跡の可能性も考慮したが、確信は得られなかっ

た。しかし本遺構周辺からSI04にかけて、実測復元された第11図８を始め、遺物が比較的まとまって出土しており、住居跡との関連に注意を要しよう。

（２）遺物について

出土した弥生土器は、壷形土器１個体のほかは小破片で、しかも遺構でもまとまった出方はしなかった。全域から散漫に出土しているが、その中でも標高37.5m～38.5mの範囲にやや濃密なことから、SI04・05、PG01といった遺構に関係するものと思われる。土器の文様構成・器形などの全容を窺い知る資料は少ないが、下記のような特徴が観察される。

① 口縁部文様帯は無文で幅が狭い。

② 貼付隆起線は、棒状工具などによる押圧により成形されている。

③ スリット手法は櫛歯２～３本でなされている。

④ 胴部文様帯の縄文は、付加条二種（付加一条）が主体で、しっかりとした羽状構成をとる。

⑤ 底部には布目痕もあるが、木葉痕が目立つ。

十王台式の編年に関しては、先学諸氏によりいくつかの案が提示されており、大筋で合意しているものの細部で一致しない。本遺跡の土器をこれに対比すると、①・②などの特徴では十王台式でも比較的古手に比定されそうである。

また近隣地域における関連性を示唆する土器も出土している。SI04（第８図３）・SI05（第９図４）などにみられる縄文施文の複合口縁を呈する資料は二軒屋式系・上稲吉式系と考えられる。十王台式にはあまり見られないとされる底部木葉痕が本遺跡には多い。これまでの調査においても、二軒屋式系・上稲吉式系土器が出土しており、十王台式土器にはない近隣地域の文化的交流が盛んであったものと考えられる。

最後に、この度の調査で出土した中で唯一、復元された壷形土器（第11図）について概観する。その特徴は観察表を参照されたいが、口径19cm、高さ52cm、底径13cmで最大径が上胴部にある、丈高の堂々たる壷形土器である。約66°の急角度で底部から直線的に立ち上がり、上胴部でゆったりと内湾してすぼまり、細まった頚部から垂直気味に立ってやや開口する口縁へと移行する。このプロポーションは十王台式に先行する東中根式に通じるものがあるが、最も特徴とするのは、体部全面に施された縄文装飾である。すなわち、口縁下に２条の貼付隆起線があり、その下から底部まで隙間なく撚りの異なる縄文がおよそ4.5cm間隔で12段にわたって重畳施文されている。単節縄文のように見えるが同じ撚りでも２本の太さを少し違えた異条縄文、直前段反撚、附加条縄文などが装飾的効果を狙って交互に配置されている。この縄文時代以上に縄に拘泥している様は、製作者の遊び心のようにも見えるが、むしろ縄文文化を継承する地域集団が西から進攻する弥生文化に対する抵抗感を矜持として、この土器に結集したようである。その意味で茨城県下における弥生集団の象徴的な遺物といえよう。

（小宮山）

2　古墳時代以降古代

古墳時代から古代に属する遺構としては、竪穴住居跡が４軒、掘立柱建物跡が３棟確認された。しかし調査範囲が狭長であったことと、遺構に伴うまとまった遺物が得られなかったことから全容を解明するには至らない。

まず、古墳時代の遺構にはいずれも後期に属する竪穴住居跡として、SI01・SI02・SI06がある。SI01は約半分の確認ながら、竈や柱穴等を検出できた。また、この住居は、西壁側に拡張が行なわれ、それにともなって新らたなカマドが構築されている。があるいは単独の棚状施設をもつ住居跡である可能性もある。遺物（第15・16図）は覆土上中層から、おおまかに７世紀前葉と考えられる土師器甕坏類がまとまって出土した。SI02は、調査範囲が限定されて遺構の一部を確認するにとどまった。遺物も外からの流入と思われるものが多く、時期の決定

はやや困難であったが、覆土や形態から古墳時代後期と判断した。帰属すると思われる遺物（第17図）を掲載しているが、７世紀後葉を中心と考えたい。SI06は調査区北側の縁辺部に位置している。近代の道等の転圧・削平が著しいため、遺存状況は不良である。詳細は前述の通りであるが、本址は他に比べて規模がやや大型の住居跡である。出土遺物（第19図）には床直上のものはないが、若干磨きののこる球型胴の甕や暗文を多用する加飾のある坏類から、６世紀後半の時期と考えられよう。

古代の遺構にはSI03・SB01～03がある。SI03は部分確認ながら、主軸がほぼ北を指し、北壁に造り付け竈をもつ住居跡である。覆土から出土した伴出遺物（第22･23図）はわずかであるが、常総型の甕、在地産の須恵器坏などから８世紀前葉と考えたい。この時期の遺構は本竪穴住居だけであるが、三棟の掘立柱建物の方は遺物や覆土からおおまかには古代と思われる。SB01とSB02とはいずれも主軸がほぼ東西を指し、形態や規模も同様と思われる。縄文土坑（SK02）を切るSB03は梁行において明確に小規模となり、また主軸についても前者２棟に比べその方向を違えることが、あきらかであり、時期差と考えられよう。しかしながら、いずれの掘立柱建物も遺物が僅少で時期ははっきりしない。とくにSB03は出土遺物がなくSI03との時間差などの詳細は不明である。

以上、古墳時代から古代にかけて概観したが、本調査区周辺にはさらに当該期の集落の広がりが予想される。南西約400mには平成15年度に調査した部分があり、その調査で古墳時代前期の遺構・遺物が確認されている。したがって小原遺跡（集落跡）はそこまで広がると判断される。しかし、平成15年度調査区には、古墳時代後期・古代はまったく検出されず、一方、今回の調査区では古墳時代前期の遺構はなく、遺物もほとんど出土が見られなかった。このことは、特に古墳時代から古代にかけては、本調査区南側の小支谷を介して、双方の台地の集落に時代差が認められるのではないかとも考えられる。双方の調査区ともきわめて限られているので、一概に判断するのも無理があるが、今後の調査により、この小原遺跡の中央部を割るように点在する一本松古墳群と集落の関係がより明らかにされることが期待される。

（吉田）

註１　近年では第５期をさらに４区分しⅦ期区分を提示している（2000）

参考文献

飯島　一生　1998　「十王台式土器の相違を考える」『研究ノート』８号

茨城県考古学協会・十王町教育委員会　2000　『茨城県における弥生時代研究の到達点』

海老澤　稔　1989　「恋瀬川流域における弥生後期の土器変遷について」『茨城県史研究』62号

海老澤　稔　1993　「弥生時代後期の住居形態について」『婆良岐考古』15号

海老澤　稔　2000　「茨城県における弥生後期の土器編年」『婆良岐考古』22号

勝田市史編さん委員会　1961　『勝田市　原始・古代編』勝田市

川又　清明　1999　「涸沼前川流域における弥生時代後期の遺跡の分布状況」『研究ノート』９号　（財）茨城県教育財団

友部町　1990　『友部町史』

友部町三本松遺跡発掘調査会　2003　『茨城県友部町三本松遺跡』大成エンジニアリング株式会社

友部町小原遺跡発掘調査会　2004　『茨城県友部町小原遺跡』大成エンジニアリング株式会社

服部　敬史　2004　「Ⅳ　まとめ」『茨城県友部町小原遺跡』

弥生時代研究班　1989～1999　「茨城後期弥生式土器編年の検討」『研究ノート』１～11号　（財）茨城県教育財団

瓦吹　堅他　1976　『高寺２号墳』友部町教育委員会

千種重樹他　1994　『小原香取・坂場遺跡』友部町小原香取・坂場遺跡発掘調査会

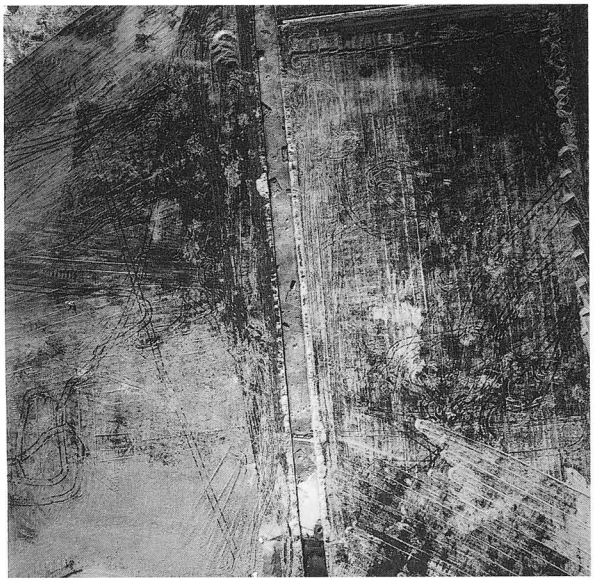
池田晃一他　1999　『寺山遺跡・東平遺跡・坂ノ上塚群』北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　茨城県教育財団調査報告第150号

能島　清光　2004　『北平遺跡発掘調査報告書』友部町北平遺跡発掘調査会

写 真 図 版

図版 1

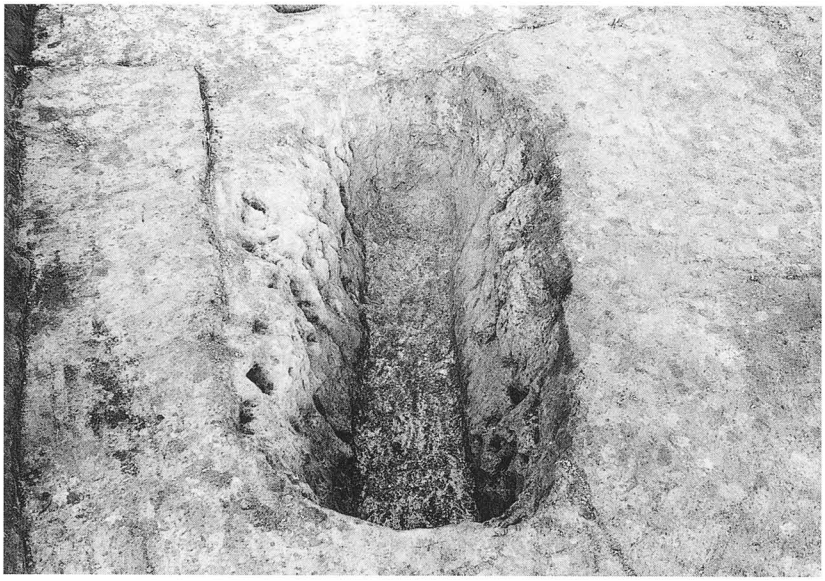
1　調査区全景



2　調査区全景

3　調査風景

図版 2

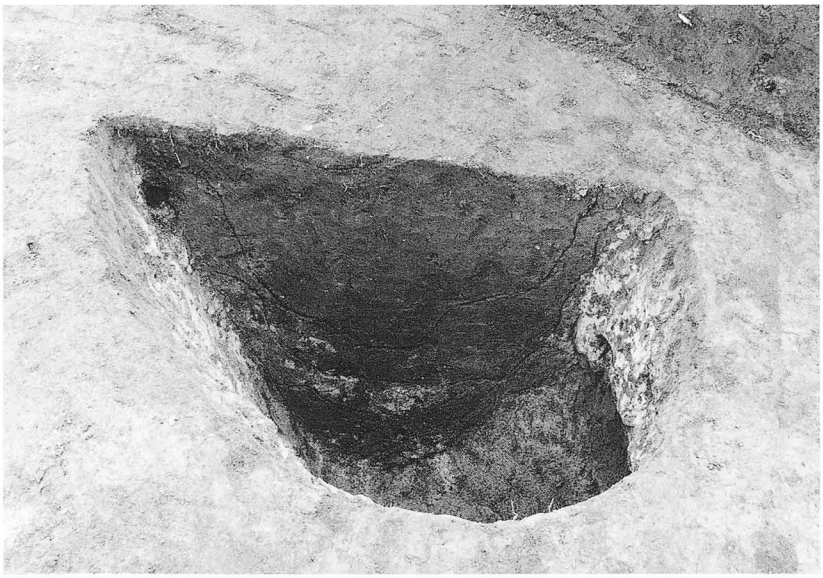


1　SK01　完掘状況
（南から）

2　SK01　土層断面
（南から）

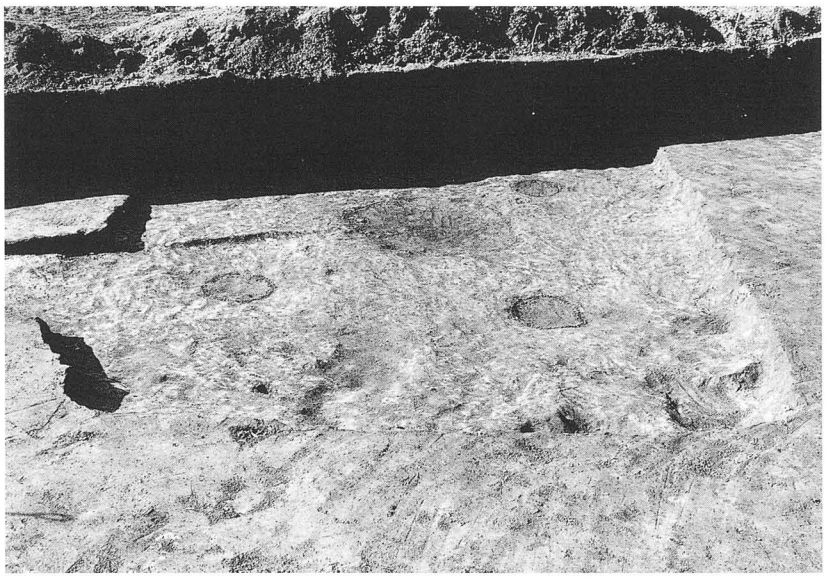
3　SK02　土層断面
（北西から）

図版 3



1　SK03　土層断面
（東から）

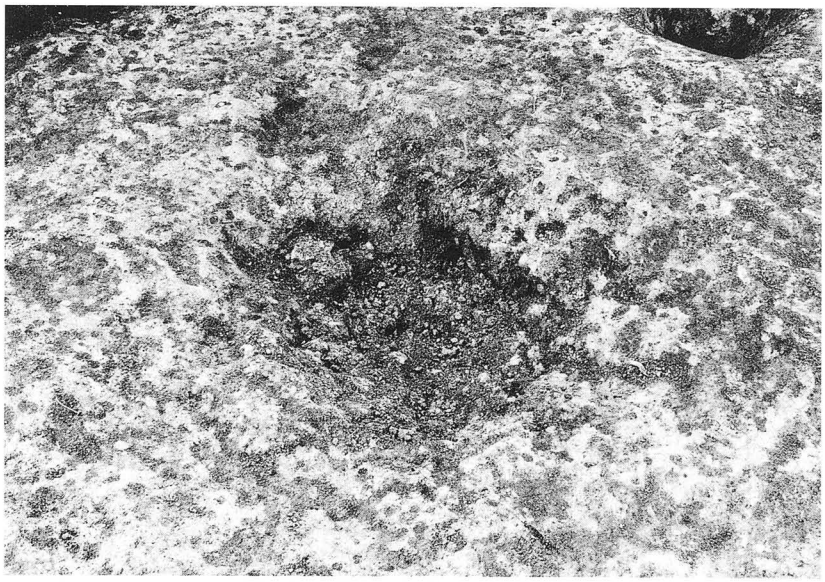
2　SI04　完掘状況
（西から）



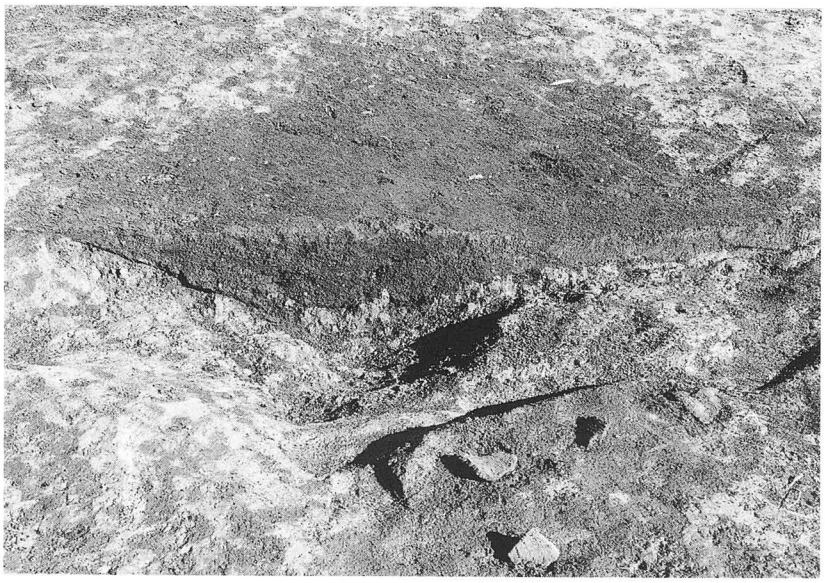
3　SI05　検出状況
（東から）

図版 4

1　SI05　完掘状況
（東から）

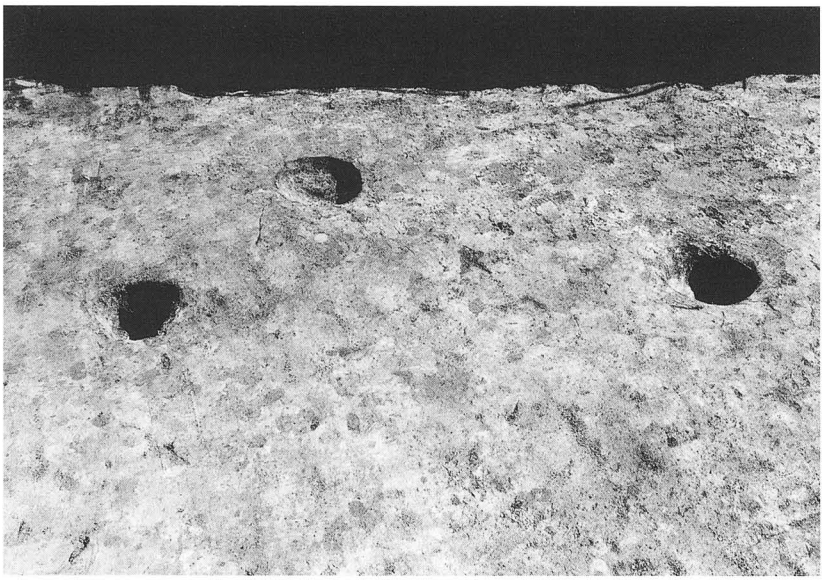


2　SI05　炉跡完掘状況
（東から）

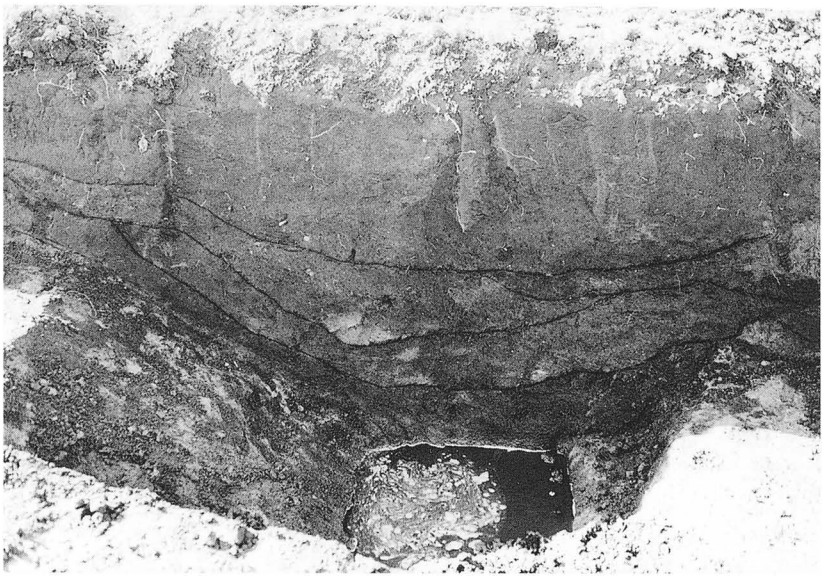


3　SI05　炉跡土層断面
（南から）

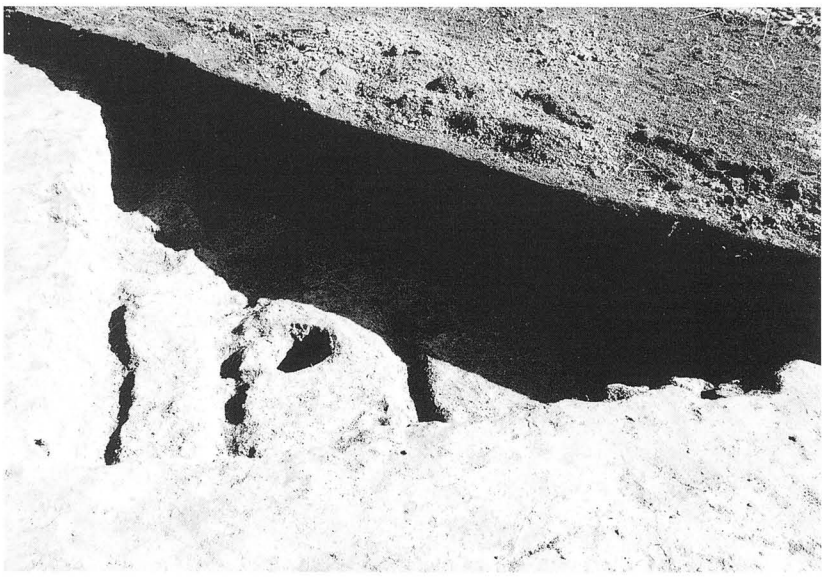
図版 5



1　PG01　完掘状況
（西から）



2　SD01　西壁土層断面
（東から）

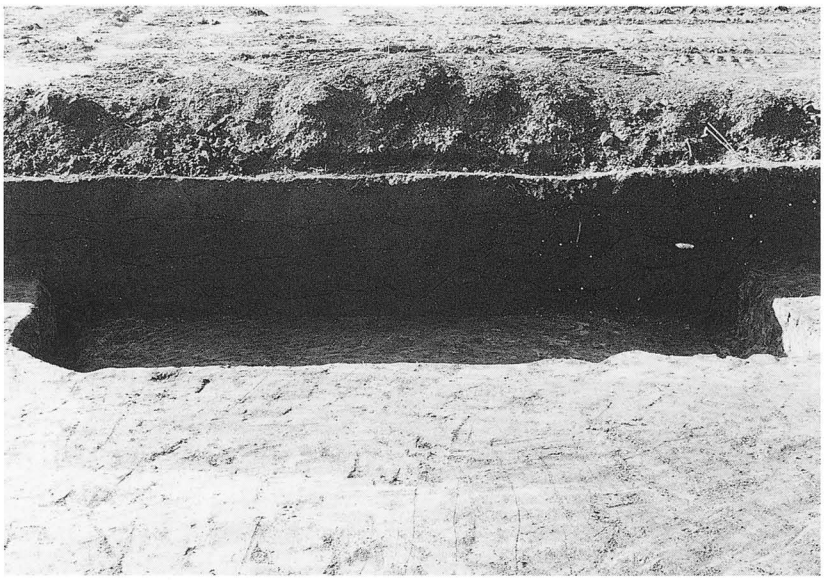


3　SI01　掘り方
（南西から）

図版 6

1　SI01　検出状況
（南東から）

2　SI01　カマド土層断面
（西から）

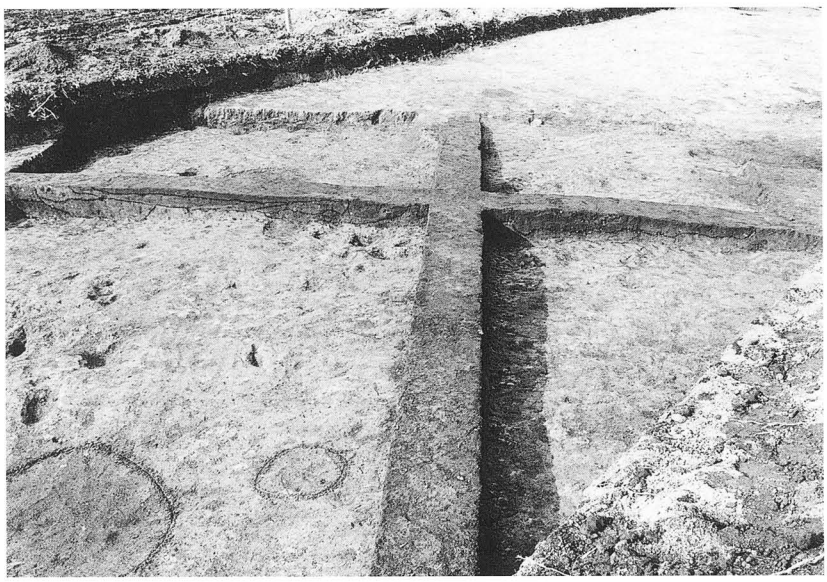


3　SI02　完掘状況
（東から）

図版 7

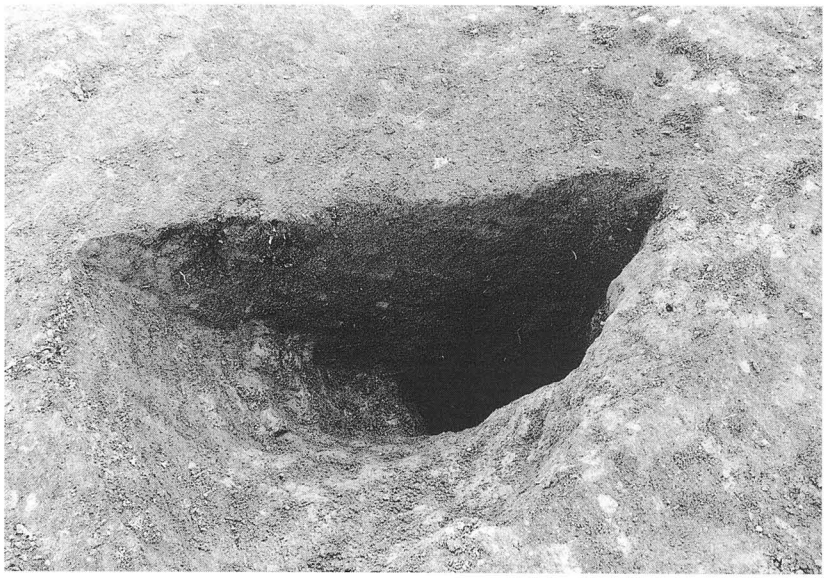
1　SI02　掘り方
（東から）

2　SI06　完掘状況
（南から）

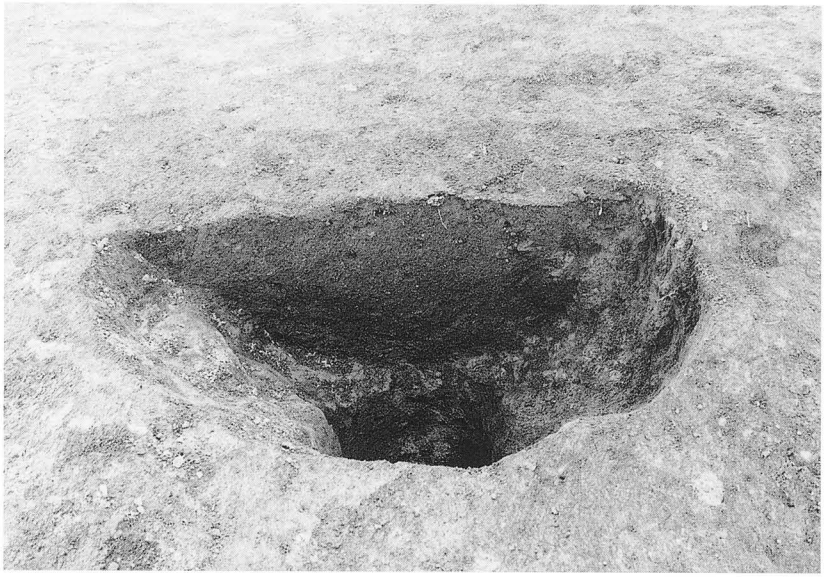


3　SI06　東西土層断面
（東から）

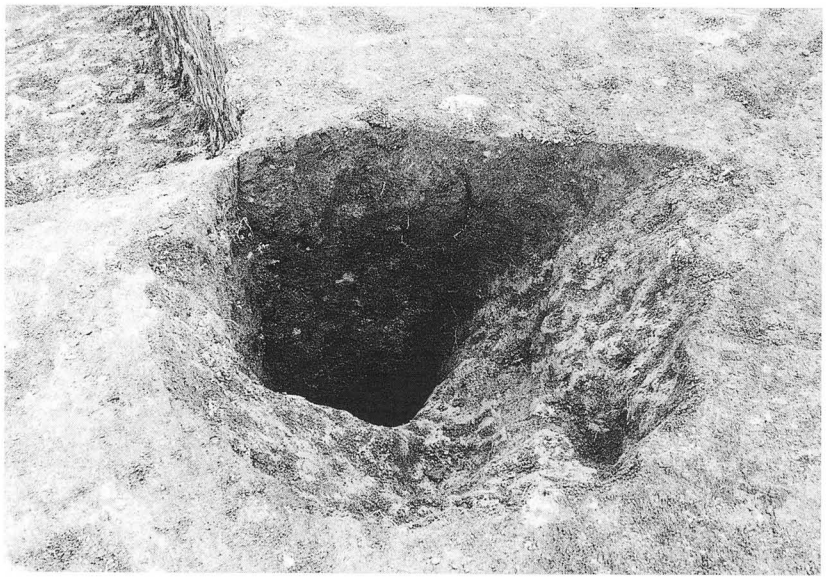
図版 8



1　SI06　P1土層断面
（西から）

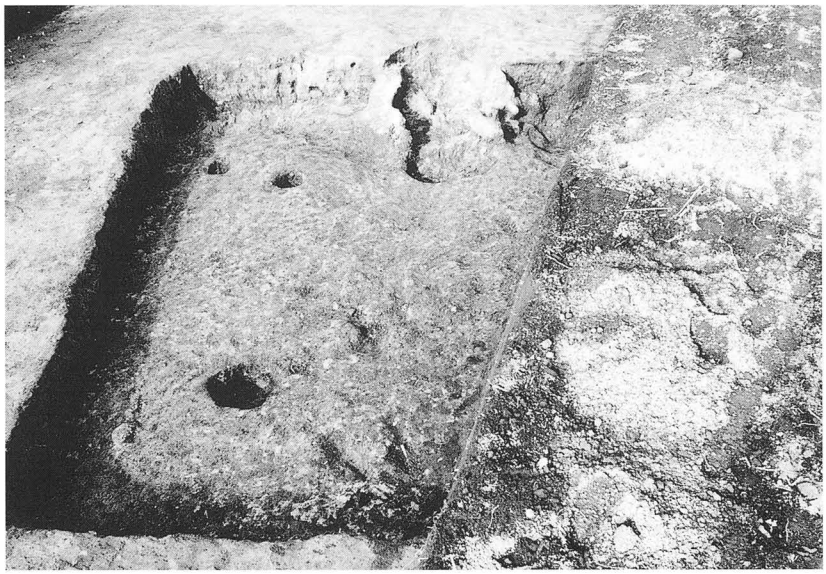


2　SI06　P2土層断面
（西から）

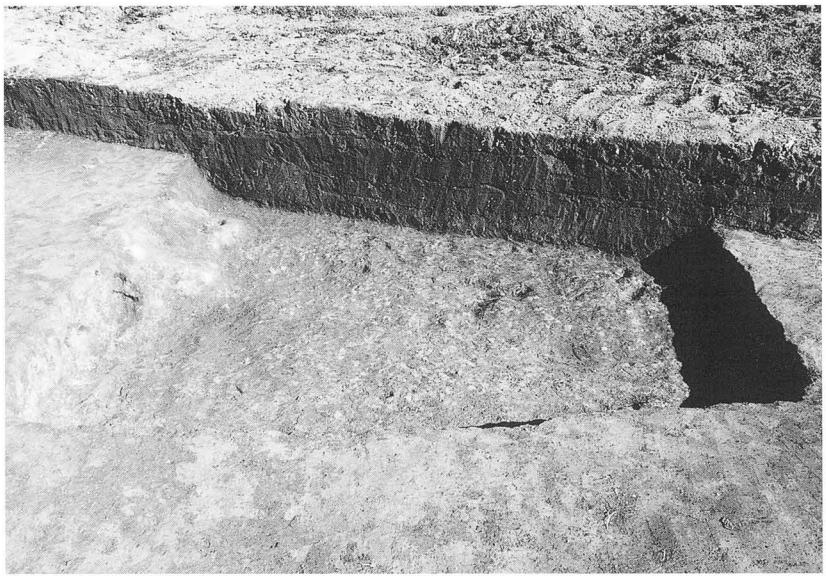


3　SI06　P3土層断面
（西から）

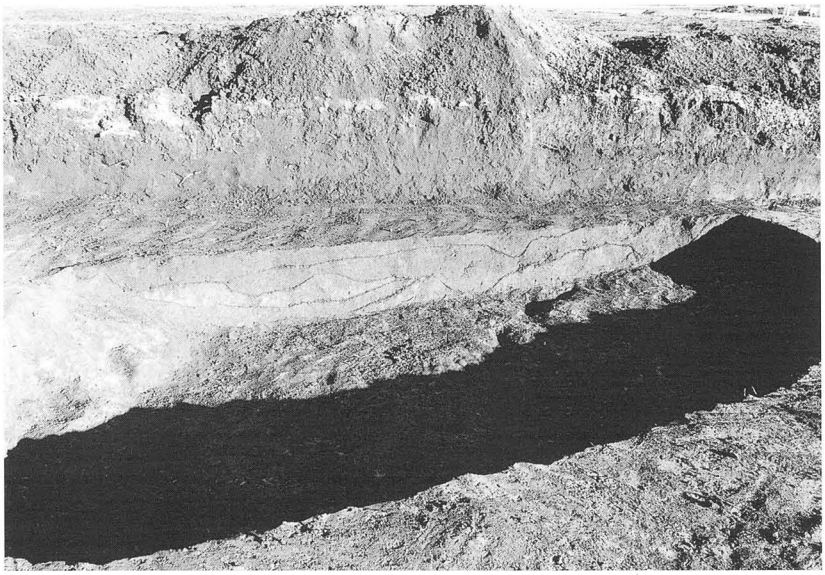
図版 9



1　SI03　完掘状況
（南から）



2　SI03　完掘状況
（西から）



3　SI03　土層断面
（西から）

図版10

1　SI03　掘り方
（南から）

2　SI03　カマド土層断面
（南から）

3　SB01　完掘状況
（西から）

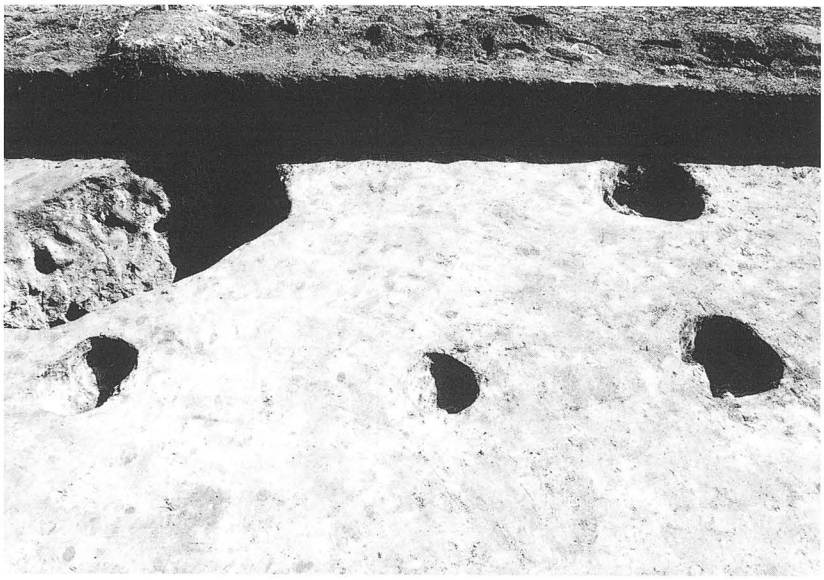
図版11

1　SB01　P6土層断面
（南から）

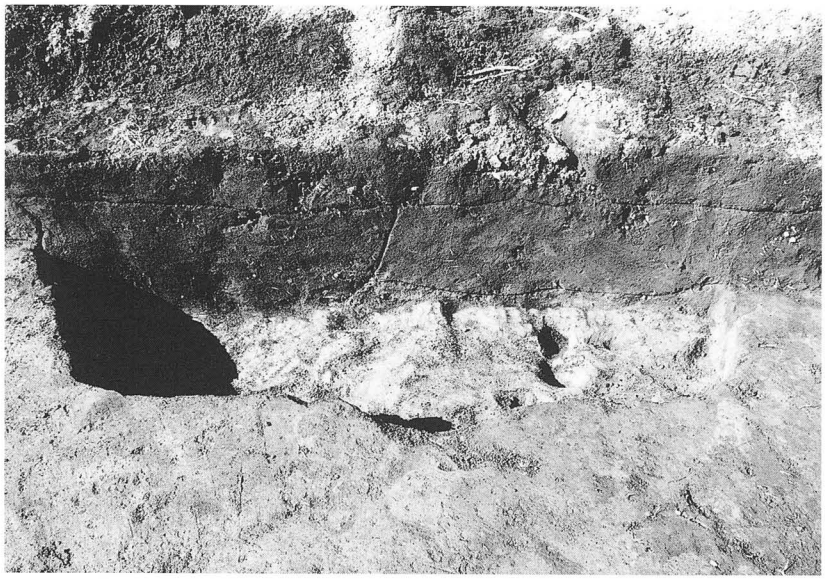
2　SB02　完掘状況
（東から）

3　SB02　P3土層断面
（東から）

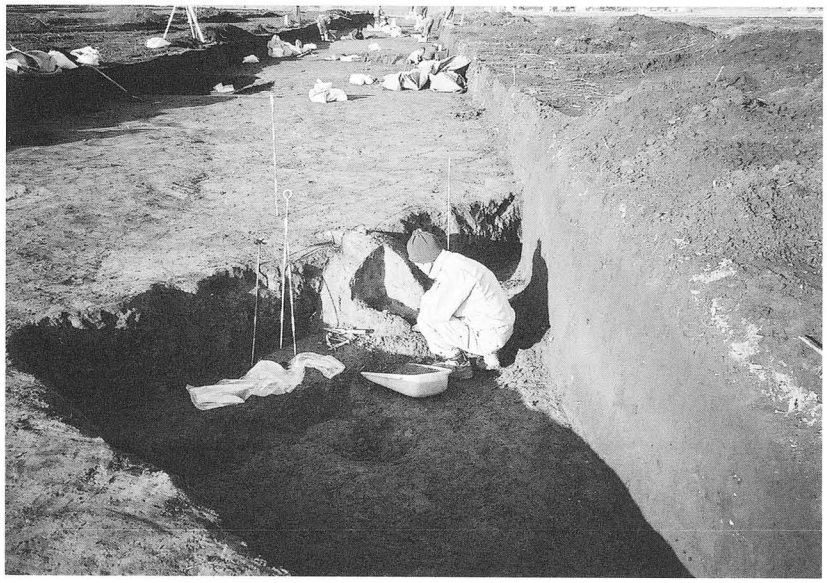
図版12



1　SB03　完掘状況
（西から）



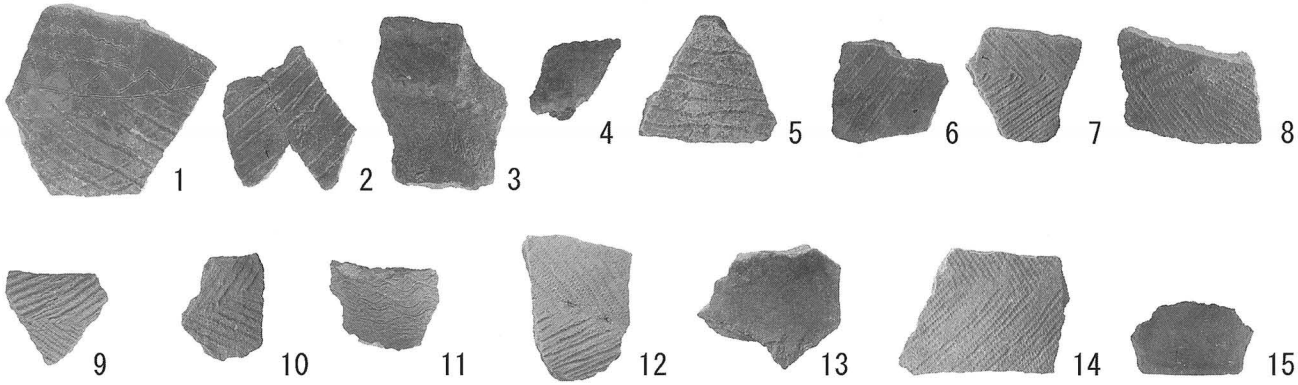
2　SX01　完掘状況
（東から）



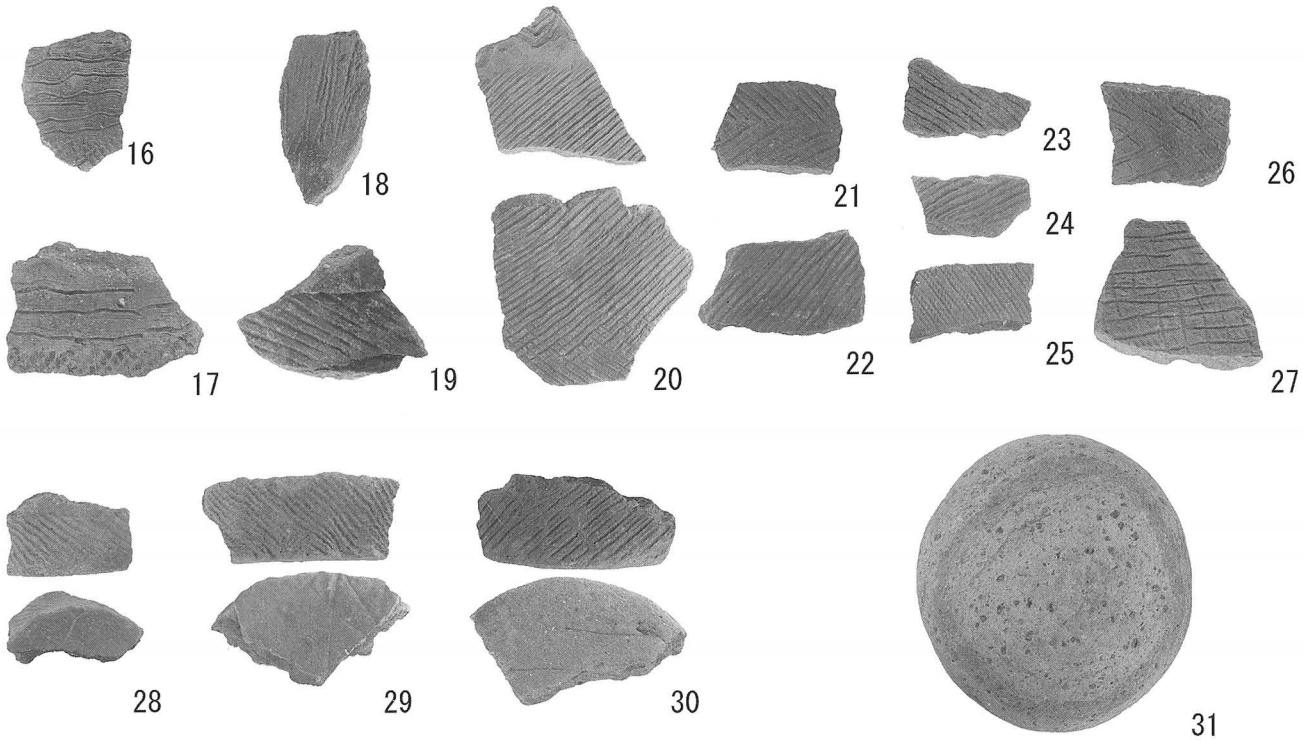
3　調査風景

図版13

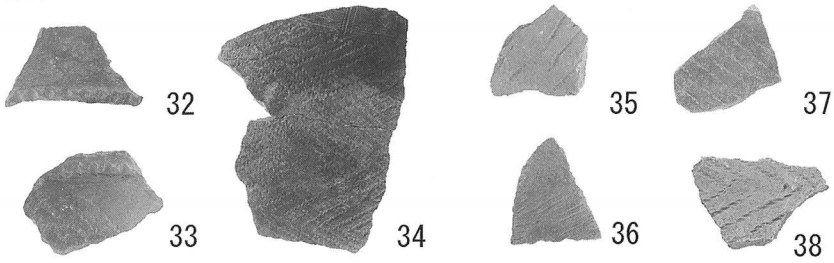
SI04



SI05

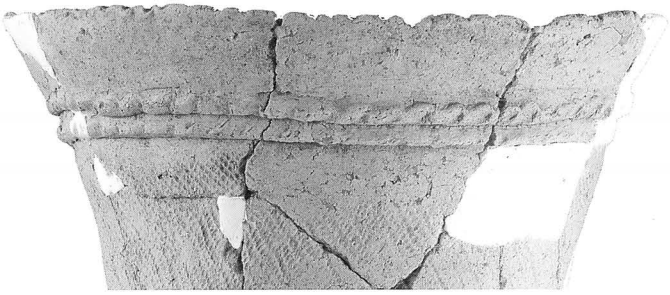


PG01



SI04・05・PG01出土遺物

1



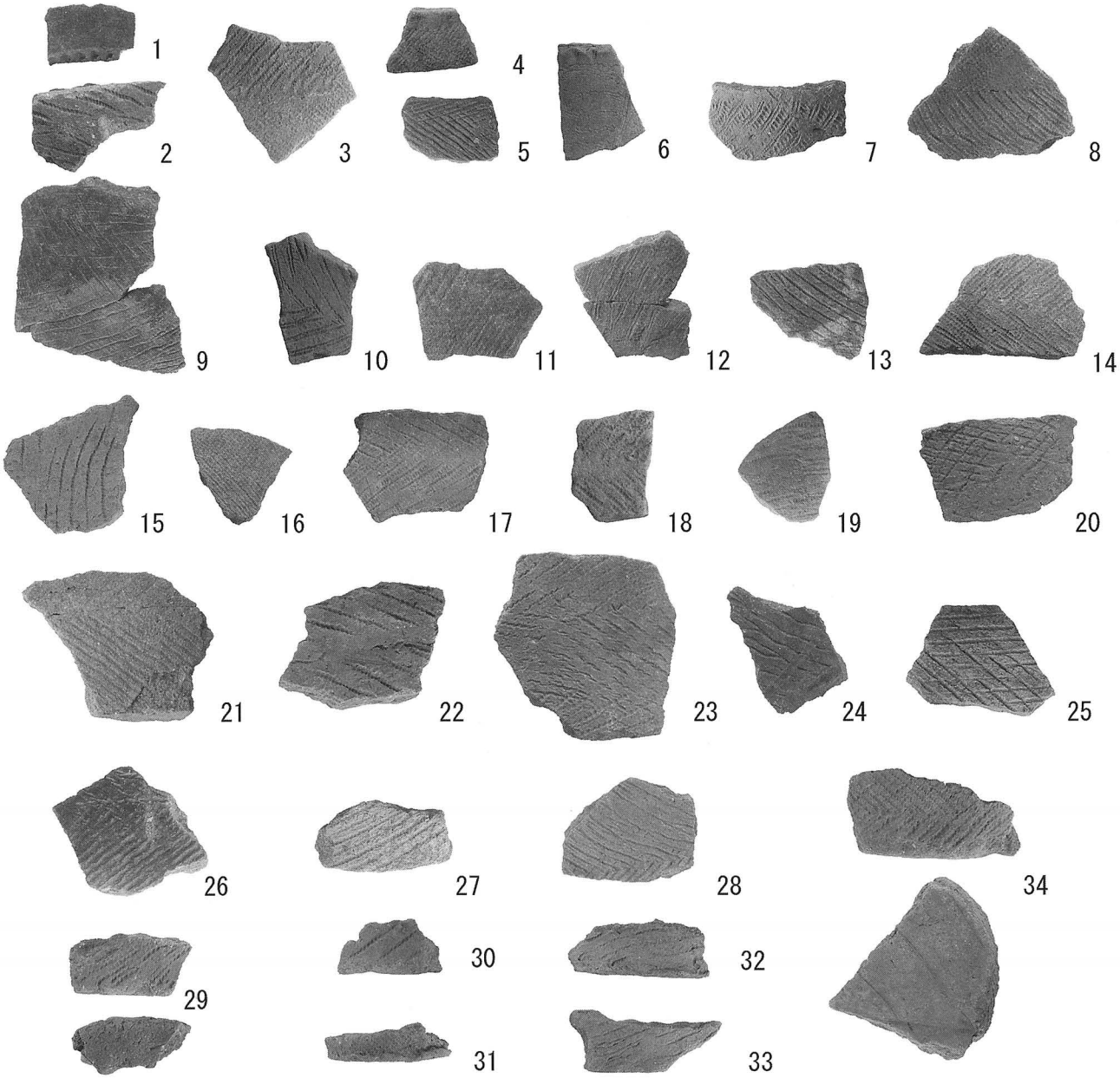
口縁部隆帯（S=1/2）

底部籾痕（S=×2）

PG01出土遺物

図版15

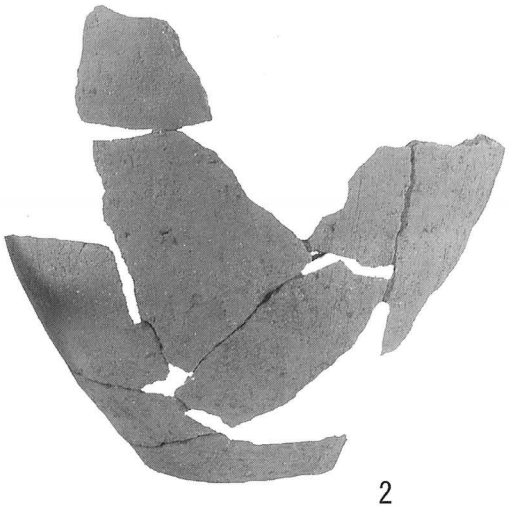
遺構外



SI01

遺構外・SI01出土遺物

SI01



1

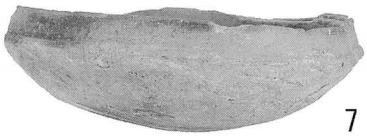
2

3

4

5

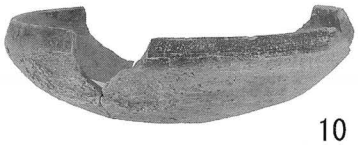
6



7

8

9



10

11

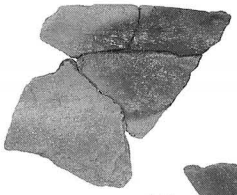
12

13

14

15

SI02



16

17

19

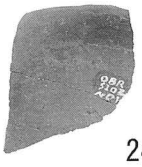
20

21

22

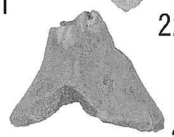
18

23



24

25



26

SI01・SI02出土遺物

図版17

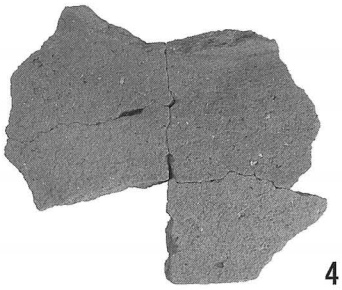
SI02

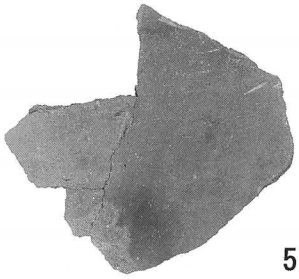
1

2

3

SI06


4


5

SI06

6

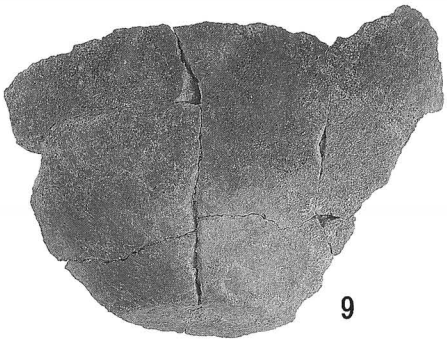
7

8

10

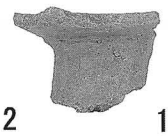
14

15


9

11

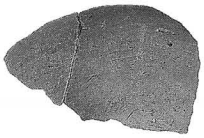
12

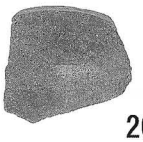

13

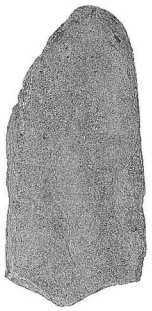
16

17

18


19


20


21

SI03

22

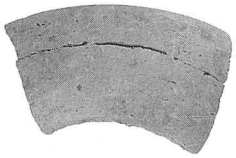
23

24

25

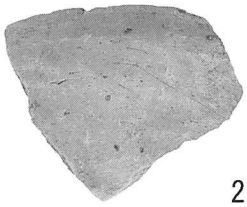
SI02・SI06・SI03出土遺物

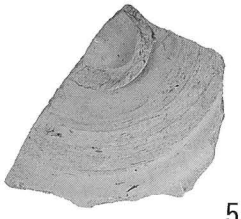
SI03

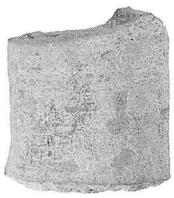

1

3

4


2


5


6

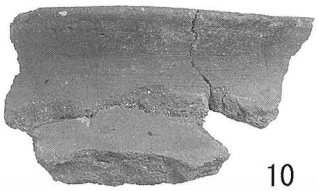
SB01

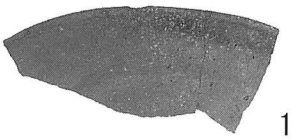
7

8

SB02

9


10


11

12

SX01

13

14

15

SI03・SB01・SB02・SX01出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	おばらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	小原遺跡発掘調査報告書
副書名	県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	友部町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	
編著者名	吉田寿・小宮山友康・小野真美・山嵜裕子
編集機関	大成エンジニアリング株式会社
所在地	〒162-0045　東京都新宿区馬場下町1-1　TEL03-5285-3155
発行年月日	西暦　2005年　3月25日

ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
小原遺跡（おばらいせき）	茨城県西茨城郡（いばらきけんにしいばらきぐん） 友部町小原（ともべまちおばら） 624番地外（ばんちほか）	8321	21	36度 21分 49秒	140度 19分 57秒	2004年11月5日 ～ 2005年2月10日	1,080㎡	土地改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小原遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安時代	竪穴住居跡、掘立柱建物址、土坑、溝、ピット	弥生土器、土師器、須恵器	縄文時代から古代までの 複合遺跡

茨城県西茨城郡友部町　**小原遺跡**

—県営畑地帯総合整備事業（一般型）小原地区（北区）　平成16年度埋蔵文化財調査報告—

平成17年３月25日

編集・発行　　大成エンジニアリング株式会社
〒162-0045　東京都新宿区馬場下町1-1
日本生命早稲田ビル８Ｆ
電　話　03-5285-3155

印刷・製本　　明誠企画株式会社